

新しい家庭科

自立した男と女を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

ウイ

先生は悩んでいる



国立婦人教育会館図書

和

104130

1987

4

四季のうた



さくら

きり絵と文 金子静枝

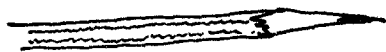
さくらの便りを聞き始めると、なんとなく家の外に気持ちが動き始める。お花見は近くの国際基督教大学や、井の頭公園で間に合わせるにしても、花の下で遊ぶ人びとの、のびやかな表情がうれしい。

卷頭詩

夢を抱く

羽生 槇子

わたしが一九歳のとき母は四六歳で亡くなった
わたしは 自分が四六歳になるまでを 数えて生きた
わたしの上の娘が一九歳になるまでを 数えて生きた
下の娘が一九歳になるまでを また数えて生きた
やったあお母さん
わたしは五〇歳をすぎたころからは
母がとうとう知らないですんでしまった「生」を
母にいつしよに経験させたげる と思いたくなった
ほら これが五六歳 お母さん
母に経験させてあげる「生」は キラキラせなくちゃ
気がつく娘たちがわたしのあとを追っている
まあ わたしたち 宇宙の天体みたい
追って追われて まわりまわって
空をゆくメアリー・ポピンズみたい
夢をしっかりと抱いている



先生は悩んでいる

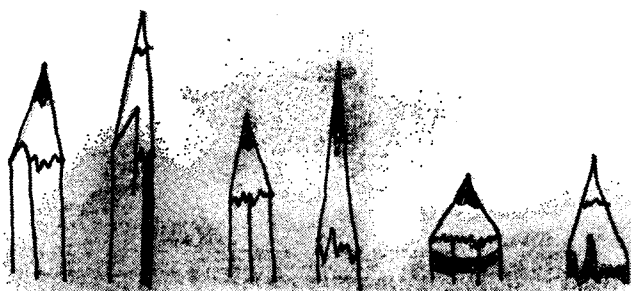
新しい家庭科を創
るために

言 発

特 集

先生の悩み——七三人の先生は語る……	4
先生について思っていること——二四四二人の子どもは……	12
先生の一曰……	17
……	22
……	26
……	28
……	30
友達になれてよかった……	30
……	36
先生も一緒に学んで……	38
……	44
初めて教壇に立つ私は……	46
……	52
カナダの教育から……	54
……	60
生と死を考える……	62
……	68
今、私は何をすれば良いか？……	70
……	76
……	82
……	88
……	94
……	100
……	106
……	112
……	118
……	124
……	130
……	136
……	142
……	148
……	154
……	160
……	166
……	172
……	178
……	184
……	190
……	196
……	202
……	208
……	214
……	220
……	226
……	232
……	238
……	244
……	250
……	256
……	262
……	268
……	274
……	280
……	286
……	292
……	298
……	304
……	310
……	316
……	322
……	328
……	334
……	340
……	346
……	352
……	358
……	364
……	370
……	376
……	382
……	388
……	394
……	400
……	406
……	412
……	418
……	424
……	430
……	436
……	442
……	448
……	454
……	460
……	466
……	472
……	478
……	484
……	490
……	496
……	502
……	508
……	514
……	520
……	526
……	532
……	538
……	544
……	550
……	556
……	562
……	568
……	574
……	580
……	586
……	592
……	598
……	604
……	610
……	616
……	622
……	628
……	634
……	640
……	646
……	652
……	658
……	664
……	670
……	676
……	682
……	688
……	694
……	700
……	706
……	712
……	718
……	724
……	730
……	736
……	742
……	748
……	754
……	760
……	766
……	772
……	778
……	784
……	790
……	796
……	802
……	808
……	814
……	820
……	826
……	832
……	838
……	844
……	850
……	856
……	862
……	868
……	874
……	880
……	886
……	892
……	898
……	904
……	910
……	916
……	922
……	928
……	934
……	940
……	946
……	952
……	958
……	964
……	970
……	976
……	982
……	988
……	994
……	1000

○Weになんでも言おう なんでも聞こう 70 ○わたくしからあなたに 88
○今月の読書から 82 ○Weの読者会だより 86 ○編集室からあなたに 94



連載

四季のうた

巻頭詩

✓研究ノート性

教育のなかの心理学

いま中学校で

読書つれづれ草

知らないことを知りたくて

ワンポイント

近代日本女子教育史

KNOW HOW

共学家庭科

Weの相談室

政治の目

経済の目

家族を越えた

ネットワーク

青春ふりかけ

さくら

夢を抱く

女と男の豊かな未来に向けて(1)

女と男の関係を考える会・森

「発達」そだつ」ということ(1)

友だちってなに?

少年と夕暮れ

(1)

「女学雑誌」と明治女学校

私と家庭科との出会い

いじめ

市川房枝さんの新しさ

歯止めを失った防衛費

リフセンターの共同生活

すっぱりと家を出られるかな……こしら・りょうこ

金子 静枝

羽生 楨子

陽子

小沢 牧子

仲野 暢子

武田 秀夫

蓮池 悦子

秋枝 蕭子

湯沢 静枝

回答・児玉 澄子

湯川 憲比古

福島 澄香

中嶋 里美

81

80

79

78

77

76

75

74

72

56

54

50

1

○波 地域とともに家庭科を創る 半田たつ子 84

83

○ひと 金子 静枝さん

表紙デザイン 加藤由美子
目次イラスト 馬場洋子
本文イラスト 編集部

○アンテナ 94

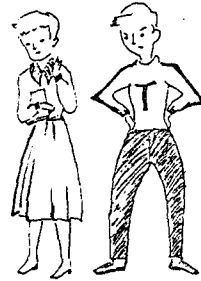
○十字路 92

○泉 90

○“We” EDITOR'S NOTE 96

＊ 先生は悩んでいる ＊

先生の悩み



73人の先生は語る

- 新学年早々「先生は悩んでいる」とは？ とお思いですか。いいえ、悩んでいない先生は一人もいないでしょう。悩みにきちんと向き合うところから、道を切り開きたいと願って次の問いを、先生方にぶつけてみました。
- 1 あなたはなぜ「先生」になったのですか
 - 2 「先生」になってよかったと思いますか
 - 3 今「先生」として悩んでいることは
 - 4 世の教育論議で腹が立つのは
 - 5 定年まで「先生」を続けますか

〈調査にご協力下さった方〉

小・中・高各30人、養護学校・大学各10人計110人の方にお尋ねし、73人の方がお答え下さいました。無記名で消印も鮮明でない方が10名ほどありますが、回答者は左記のように広範囲にわたっています。三重県の高校の先生は、コピーして、お仲間からの回答も同封して下さいました。ご協力下さった諸氏に、誌上で厚く御礼申し上げます。

北海道、青森、秋田、山形、福島、宮城、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、静岡、長野、新潟、石川、岐阜、三重、京都、大阪、兵庫、岡山、広島、鳥取、島根、山口、徳島、香川、愛媛、高知、大分、長崎、熊本、沖縄

・中学校の先生からの回答率が一番低かったのは、それほどゆとりのない日々なのかもしれないかもしれません。回答して下さいしたのは、比較的若く、お子さんのない方が多かったのです。

・小・高・養・大ともに、30代・40代の方が多く、子育てと仕事を両立させる多忙な毎日を偲びました。

・男性の回答者が少なく残念でした。男性の読者の方を大勢お迎えすることが、Weの課題です。

回答者のプロフィールは、下表をごらん下さい。

		小	中	高	養	大	計
依 頼 数		30	30	30	10	10	110
回 答 数	計	19	11	26	9	8	73
	男 女	2	1	7	1	1	12
		17	10	19	8	7	61
回答率(%)		63	36	87	90	80	66
20 代		4	4	4	2		14
30 代		7	2	6	4	2	21
40 代		3	5	7	3	3	21
50 代		3		9		3	15
60 代		2					2
子 ども	有	13	5	20	7	5	50
	無	6	6	6	2	3	23

1. なぜ「先生」になったのか (・は回答1人を示す)

◆教職への憧れ、教職への適性

20人

	小	中	高	養	大
小さい時からの希望、恩師への憧れ、学校好き	•••	••	•		•
自分らしさを伸ばせる、教育実習で適性を知る	•••		•		
いやな先生を反面教師として	••				
自分の性格に合う		•			
「人間の壁」「すりばち学校」を読んで	•		•		
教えることに興味があった				•	
研究と教育が両立できる					•
大企業に就職したが、合わず転職した	•				

◆人間とふれ合う仕事だから

19人

	小	中	高	養	大
人間に興味、人とふれ合って自分も伸ばせる	•••		•••	•••	
子どもの心がわかる教師になりたかった		•	•••		

◆子ども・若者が好き

6人

	小	中	高	養	大
子どもとのくらしが好きだから	••	•			
若い人とかかわりを持ち続けられる		•			
教え子の活躍を見るのが楽しい					••

◆学問・専門を生かす

12人

	小	中	高	養	大
専門を生かしたい、学んだことが生かせる		•	•••	•	•
家庭科の重要性、家庭科に興味をもつ		••			
自分の能力に適している					•••

◆経済的自立、男女格差のない仕事

25人

	小	中	高	養	大
早く自立したかった、生活手段として	••	••	•••	•	
男女格差がない、女性としての身分保障	••	••	•••	•••	••
生涯続ける職業としてやりがいがある				••	

◆社会とのかかわり

6人

	小	中	高	養	大
学生時代安保問題とぶつかったことが一の動機			••		
社会に役立つ人間として生き抜きたい			•••		
少しは役に立つかな			•		

◆自分以外の環境・条件

23人

	小	中	高	養	大
親や親戚にも教師が多かった	••		•••		•
職業として身近にあった。資格がとりやすい	•	••	•		
親の希望で家政学部、教員養成大入りやすい	•••				
親の励まし、恩師にすすめられて		•			•
他の就職がうまくいかなかった、たまたま合格	••	•			
資格がとりやすかった		•			
先生しかなかった、やむを得ず	•	••	•		

自由を書いていただいた回答を、七つに分類してみました。経済的自立を願って、男女格差のない仕事だから、という方が一番多く、教職に憧れ、自分にふさわしいと考

えた方は、小学校の先生に、社会とのかかわりで教職を選んだ方は、高校の先生に多くみられました。人間とふれ合う仕事に興味をもったから、というのは、先生にぴったりの方でしょう。大学の先生に、学問・専門を生かす、が最も多いのも当然ですね。

先生になってよかったですか？ に「いいえ」と答えた方は一人もなかったのです。「どちらともいえない」は、中・高で三割を越え、悩みの深さを偲びました(次頁)。

1 先生は、なぜ先生になったのでしょうか？

2 先生になってよかった!! は 七三・六%

3 今、先生として

悩んでいることは？

アンケートの六項目にいくつでも○をつけ、さしつかえなければ、その理由を書いていただきました。教える・研究する仕事の悩みと自分自身に関する悩みが多く、特に高校の先生では、生徒についての悩みが最も高

率でした。悩みの内容、お読み下さい。

イ 自分自身に関する問題

◆自分の弱さなど

(小・30代・女)

◆老父の介護のこともあり、疲れがとれず、

体力が続かず、納得のいく仕事ができない

(小・50代・女)

◆自分自身の成長にはプラスになっているだ

ろうが、児童にとつて、自分がよい教師だ

とは思えない。自分が「よい教師」である

ためには、まず自分が「よい人間」でなけ

ればならないと気づいた今、自分自身が一

番の問題だ

(小・30代・女)

◆自分も含めて、学校関係者があまりにも目

先のことに追われてしまっていて、これを

止揚しうる力量を持ち得ないでいること

(中・40代・女)

◆教師の仕事は時間内に終わらないこと、今

は独身だから、時間を気にせず家庭訪問な

どできるけれど、家庭を持ったら、自分の

生活と教師という立場で、非常に悩むので

(中・20代・女)

◆今一つ、生徒の中に積極的に入っていけな

いところに自分の限界を感じる

(高・20代・男)

◆自分を高めるための時間がない

(高・30代・女)

◆時間の切り売りという教職に疑問を感じは

じめた

◆自分の教師としての適性、教えるというこ

とに自信が持てない

◆「教える必要はない」と言いわけが出てく

る。こちらもやる気を失っていくのがこわ

い

2. 先生になってよかったか

(%)

	は	い	どちらともいえない
小	73.7	26.3	
中	66.6	33.4	
高	69.2	30.8	
養	77.8	22.2	
大		100.0	
計	73.6	26.4	

3. 今、先生として悩んでいること

(%)

	小	中	高	養	大	計
イ.自分自身に関する悩み	42	50	42	66		41
ロ.教える・研究する仕事の悩み	79	50	46	78	87	49
ハ.家族・家庭に関する悩み	32	20	19	11	25	22
ニ.生徒・学生に関する悩み	26	20	65			33
ホ.生徒・学生の親との悩み	5					1
ヘ.管理者・理事者との悩み	21	10	4		12	9
ト.同僚との関係の悩み	32	40	23		25	25
チ.そ の 他	11	10	15	11		11



30%～ 45%～ 60%～ 75%～

- ◆教師としての人格・力量不足 (養・40代・女)
- ◆自身自身の技術の未熟さを知り、何とかしなければ、と思っている (養・20代・女)
- ◆養護学校では、自分の専門分野を十分に生かすことができないことの物足りなさをいつも感じている (養・20代・女)
- ◆男女で学ぶ家庭科がいつも頭にあるので、高校家庭科の教員を志望している。いつもこういう内容の授業をすれば、高校生に響くか (考えさせることができるか) 考えている。いわゆる教育困難校などで、まともな授業ができるか不安 (養・30代・女)
- ◆非常勤で身分の安全が保障されない。来年の教育計画の保証がない (養・40代・女)
- 口 教える・研究する仕事に関する問題
- ◆「教える」技能が高まらない。努力不足と思うが、時々自分は教師に向いていないのではないかと悩む (小・20代・女・三人)
- ◆昔のように研究熱心な教師がへってきて、いくら呼びかけても、受けとめてくれない (小・60代・女)
- ◆指定研究しかない。それすら表面的でいい加減 (小・50代・女)
- ◆自分の好きなことができない、教えたいことがなかなかできない (小・30代・女)
- ◆時間がない (小・20代・女)
- ◆教材研究不足、自分のやりたいことよりもいろいろな報告やまとめに追われたり、体力が続かなくて、思うことができない (小・50代・女)
- ◆勉強しない教師は失格だ。なぜなら四〇人の人間の前で物を教えることを思うと、そうそう経験や憧れだけですましてよいはずがない。しかし、現在の自分は……。忙しいことを理由に、じゅうぶんな勉強をしていない (小・30代・女)
- ◆子どもが目を輝かせるような教材は、どのように創造するか、むずかしい (中・40代・女)
- ◆教材研究や指導法の研究をする時間が、学級担任との両立のため、なかなかとれない (中・20代・女)
- ◆大学の四年間プラス実習の二・四週間で、いったい教員として何が身につくか？ 大学卒業後、二年は研修期間として、大学と現場の間を往來する余裕をつくらうだろうか？ (高・20代・女)
- ◆生徒が教科に対して、生き生きととりくんでくれるような授業をしたい (高・40代・女)
- ◆自分の理論と自分の実力・体力が一致しないのでは、という不安 (高・40代・女)
- ◆家庭内での生活経験が非常に少ないし、体験不足なので、何も知らない生徒が多い。生徒に生きていく力をつけるために、何をどのように教えるべきか、教える力を自分のものにするにはどうしたらよい (高・20代・女)
- ◆なかなか満足する授業ができない (高・30代・女)
- ◆年々雑用がふえ、じっくりと教える、研究する仕事にかかわれない (高・30代・男)
- ◆養護学校の生徒は、学校が楽しみで、学習意欲も盛ん。かわいい限りだが、高等部卒業後の彼らの前途は多難、ここでも教員のやらなければならないことはたくさんある (養・30代・女)
- ◆教材についての研究不足 (養・40代・女)
- ◆学校という限られた枠の中だけが、はたして教育か？ (養・30代・男)
- ◆高校から養護学校にきたので、授業方法など、どうしたらよいかと考えている (養・30代・女)
- ◆時間不足、予算不足 (特に旅費) (大・50代・女)
- ◆「新しい家庭科」を創ること (大・50代・女)

◆つきつめれば時間不足の問題です

(大・40代・女)

◆大学は教育と研究が五分位ずつと思います

その両立がとても難しい (大・30代・女)

◆研究における実力不足 (大・50代・女)

ハ 家族・家庭に関する問題

◆実家と婚家の老親・病親四人をみる身、人

なみ以下の二女をかかえていることで、心

身の疲れがひどい (小・50代・女)

◆夫の仕事との関係で、私の仕事を続けられ

るかどうか (小・20代・女)

◆高校生の長男が、成績不振のストレスを家

族(老人や弟たち)にぶつける

(中・40代・女)

◆どの職業も同じと思うが、共稼ぎの忙しさ

(高・20代・女)

◆共稼ぎ、二児をかかえ、なかなか仕事に熱

中できないこともある (高・30代・男)

◆仕事をもつ母親として、子どもをカギツ子

にするため「申しわけない」という気持ちがある

(高・30代・女)

◆家事、子どもの教育に時間を要し、仕事に

打ち込む時間のないこと(養・40代・女)

◆親と子にはさまれたサンドイッチ世代とし

て (大・50代・女)

◆子どもがカギツ子になったこと

(大・40代・女)

二 生徒・学生との関係

◆行事の合間でする感じの学習指導でもあり

密着できない (小・50代・女)

◆家庭科が出張授業のため、なかなか意思疎

通がうまくいかない (小・20代・女)

◆なかなか心の通じ合わない子、かわりに

くい子がいて、その時その時、一生懸命悩

む (中・20代・女)

◆問題行動のある生徒を多くかかえているの

で (高・50代・女)

◆学校から離れつつある生徒のひきつけ方、

あるいは自立のさせ方がむずかしい

(高・30代・女)

◆問題行動のある子の中に、今一つ入りこん

で行けない、指導力不足で考え込む

(高・30代・女—二人)

◆生徒に対する愛情はあるのだが、その気持

を伝える言葉が非常に下手で、誤解を生じ

やすい。もっと生徒をひきつける言葉を発

したいと思うが、生徒の前では、つい強制

的・命令的な言葉になり、特に最近、今

まで以上に生徒から受け入れをしてもらえ

ないような気がします (高・50代・女)

◆実業高校の家政科・被服科、明るいのみで

学習意欲がなく、粗野な言動、生活態度の

乱れなど、悩みは多い。(高・40代・女)

◆生徒に自立する力、真に連帯する力をつけ

させるためには「先生」はどのように指導

すればよいのか。「いじめ」などのないH

R運営をどのようにして進めていったらよ

いのか (高・20代・女)

◆生徒が冷めており、何事も一歩離れていて

真意がわからない。こちらの熱意が伝わら

ない (高・30代・男)

ホ 生徒・学生の親との関係

◆「受験学力≠学力」と考えるほとんどの親

との付き合いは疲れる (小・30代・男)

へ 管理職・理事者との関係

◆組合の役員として、非行問題行動の検討委

員として動き回ることが多いが、年休を快

く与えてくれない (小・60代・女)

◆部活動(それも、スポーツ関係と音楽のみ)

を最優先にした学校行事の組み方を当然と

考えているその学校運営(小・50代・女)

◆もの言う者や、おかしいことはおかしいと

言う者は、働きにくい世の中になってきた

(中・40代・女)

◆現場の管理職に、主体性、能力が全くなく

すべて、県の言う通りになっている

(高・40代・男)

ト 同僚との関係

◆全校ぐるみの生活点検運動、チャイム着席などの取り組みに異和感がある

(小・30代・男)

◆難しく、わずらわされることが多い。多忙すぎるが原因とも思う(小・30代・女)

◆何かやろうとする時、自分は汚れたくないという教師のいかに多いことか。ことなかれ主義の人が多い。それでいて不満はたくさん持っているのです(中・40代・女)

◆理論の正しさより、実行のエネルギーに、その多くがかかっている「学校行事」などに追われ、「教育の理念追求」より「慣れあいの人間関係」を重視する教育が多い

(高・30代・男)

◆教師はもっと教育について論議し、教材研究に励む職業と思っていたが、現場の教師にその余裕はない。年々忙しくなっており管理体制も厳しくなるばかり。みな自分の分掌、教科のことで精一杯。ベテラン教師は若手教師に語らなくなった。教育の姿が昔と違いすぎるからと。

(高・30代・男)

◆若手は、部活動をはじめ、組合の仕事にも

校務分掌にも、若さと情熱でぶつかると、仲間との連帯とか、ベテランの教えを求める余裕もない

(高・20代・女)

◆こんな人が教師をしていていいのか、という人を時々みかける(一人よがりの人、常識のない人、仕事もしたくないのに、給料だけほしい人 etc)

(高・20代・男)

◆若い同僚(新採一三年)が多い職場の中の自分の立場

(高・30代・女)

◆同じ年頃で、完全に人生観、価値観が正反對の場合

(大・30代・女)

◆忙しすぎる、やりたいことはいっぱいあるのに、時間が足りない

(小・30代・女)

◆やらなければならぬ仕事が多すぎる。教える量と内容等に異議を唱える余裕もない

(小・30代・女、高・50代・女)

◆日教組の低迷。多くの教師が教育労働者としての階級意識を持っていないこと。従って、自らの被抑圧、生徒への抑圧性が自覚できず、管理教育が平気で行える。家庭科・体育についても(女性差別)

(高・50代・女)

◆特に悩んで落ちこみっぱなしにはなりたくなし、のりこえようとする努力のみと考えています

(高・50代・女)

◆養護学校卒業生のその後のあり方と、学校

教育の関連性

(養・40代・女)

4 世の教育論議で腹が立つのは?

次頁の表でござん下さい。5番目に、教職の継続意志をお尋ねしました(左表)。

今すぐにもやめたい方、迷っている、という方(小・中に多い)の「腹が立つこと」を原文のまま、紹介します。4の表は、この方たちのご意見を省いています。

すぐにもやめたい

(%)

5. 教職の継続意志

	小	中	高	養	大	計
定年まで続ける	37	40	50	56	62	47
定年前にやめる	26	40	45	33	13	33
今すぐにもやめたい	16	10				6
迷う	21	10	5	11	25	14



4. 教育論議で腹が立つこと

◆世の風潮に関して

	小	中	高	養	大
親や社会の責任を学校・教師に転化している	・	・	・・・	・	
マスコミによる「教育」の偏った宣伝・操作		・	・	・	・
教師の実態に無知な親のエゴ、子ども人質病	・	・		・	・
受験、もうけ主義に踊らされている世の親	・・・	・			
教育条件をぬきにしてみな教師のせいにする	・・・		・・・	・	・
教師も人間であることを認めようとしな					・
い 真実を理解しない、知ったかぶりの論議	・・・	・	・・・	・	
個を尊重しない一般的な物言い	・				・・・
管理を批判しながら、教員に管理を強いる社会				・	・
美辞麗句で差別・選別教育に拍車をかける議論				・	
母親批判―父親や社会のしくみまで掘り下げよ				・	・
教育がすべてを解決するような議論	・			・	
日教組を偏向教育とする反動的な声	・	・	・		
商業主義の情報を子どもに与えすぎる		・			

◆教育改革・臨教審に関して

机上の空論、現実とは別だ まるで魔女裁判	・	・・・	・・・		
一部の偏った人たちで行われ、阻止する力弱い	・		・・・		
国に都合よい、エリートのための教育改革			・・・		・・・
現場の声を聞かない、教育関係者少なすぎる	・	・	・・・		
生徒の側に立つ論議でない、生徒を苦しめる		・	・・・		
官製研修会で立派な教師が育つような錯覚			・		

◆教育行政・制度に関して

上からの規制で押しつける研修・管理	・・・	・・・	・		
新採研修で型にはまった教師をつくる		・			
教育予算の乏しさ、クラス定員多すぎる			・・・	・	
経済優先にはまり、エリート養成、教育空洞化	・		・		
教育政策の誤りから教師・生徒ともノイローゼ			・		
いじめ・非行対策を道徳教育でやろうとする	・				
知識・学歴偏重、日の丸・君が代、管理教育		・	・		

◆同僚教師に関して

体罰教師、体罰をしないのはごきげんとりだと	・				・
組合も政党の票集めの具、大衆迎合・独善的		・			
戦争国民づくりに加担し、ノウの闘いに立たぬ			・		
サラリーマン化、権利主張。生徒に寛容でない	・			・	・

◆生徒に関して

義務教育を受けたのかといふかしむ問題生徒			・		
子ども尊重とはいえ、甘やかしすぎ			・		

◆。臨教審。給食センター化、食器問題。道徳教育復活の動き。卒業式などでの日の丸・君が代問題。教員の週休二日制反対の動き

(小・教職歴：以下同じ：14年・女)

◆安直な「学校教育批判」には、すべて腹が

立つ。「いじめ・体罰」に関する論議一つをとってみても、実態の正確な把握なしに読者・視聴者がミソもクソも一緒にしてとらえてしまうような報道が多く、地方の父母、PTA役員の対応が、またひとつオカシクなってきた (小・33年・女)

◆管理面が強まり、子ども、父母、教師の悩みを解決する方向でない。教材研究の時間の保証とか、40人学級、教育費の充実など教育内容の充実に一番関わらねばならない。教育内容についても指導すべき内容と、さ

れる事項は盛りだくさんのままで、ゆとりだ、時数を減らす……といったも、ますます大変になるばかり、学力差は広がって行く一方である。高学年になって、どんなに努力しても、当該学年での学習を支える下学年までの学習事項をとりもどすのは容易なことではない子たちは、やる気をなくしてしまふ。精選し、じつくりととりくませる学習時程を確保することが、今実施されなくてはならないのに――

「自己教育力の充実」等、言われることはなるほど大切なことだと思う。しかし、その施策となると、現実には、レポート提出割り当てられた研究会が多くなり、そのために費される労力、時間は大きい。そのしわよせは、教材研究不足のまま、授業に臨むことであり、家庭生活のひずみ、疲労の積み重なりとなる。

「カレンダー方式」の年間教育計画は、一年間のことを、一日一日の一時分毎まで決めて報告する。一見いかにも計画性があるようだが、計画作成のために、学年のかわり目のただでさえ忙しい時期に、児童に直接かかわることを押しのけて割り込んでくる。日々の教育活動に枠をはめがちな、実

際的に効果のないものである。形式を整え、細かに管理が行き届くことに多くの力をさくことが年々ふえてきている。もともと教師の主体性・自主性を尊重しなければ、児童の主体性・自主性も育たないのではないか
(小・27年・女)

◆「生徒がだんだん悪くなってきたから教師の質を高める必要がある」という方向で、しめつけ、おしつけの研修をやらされる。教師の質を高めることは賛成だが、方法は反対である。また学校だけに解決をおしつけるのではなく、もっと家庭・社会(大人の生き方)に目を向けるような論議が望まれる
(中・25年・女)

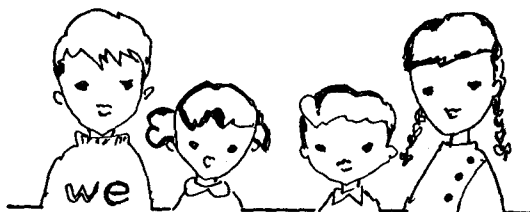
〈迷う〉
◆あまりにも学校に重く責任がのしかかっていること、学校をいじめれば世の中がよくなるというような安易な改革論が、知識人という人からも出てくる。我々は忙しさに追いまくられ、人間性も知性も育ててみず時間が削られている。そのため、確固たる意志をもたずにいる。意見をもったとしても、提唱する場がない(日教組はダメです)。我々は、このままでは、人の言う通りに教育活動をさせられる情けないことに

なるのではないか……。 (小・10年・女)
◆現場の先生方の声が、全く重要視されていない。偉い方々が、形の上で改革にこだわっていて、現場の実態をよく理解していないように思う
(中・1年・女)

◆批判するのは簡単だが、改める行動を起こさせるしくみができていない。学校に問題があれば、それを検討する余地が必要。教育について意見を出し合い、よりよい方向に変えてゆくシステムが日本にはまだなく、受け身の姿勢が残っている。学歴社会や競争社会をなくすことは、一人ではどうすることもできないが、行政への働きかけ等を通して、皆の力を結集しなければ
(高・5年・女)

◆管理者又は教師側に立った意見が重視され弱い立場にある学生・生徒のことが考慮されていない場合 (短大・12年・女)
◆ジャーナリストの取り上げ方が本質論をつかず、周辺で教育論をもて遊んでいる感じで、生身の生徒と接している者にとっては、結果的に生徒や父母の心を遠ざけてしまっているように思う。生徒とうまくいく時は続けたい、うまくいかない時は今すぐにもやめたいと変化する (高・20年・女)

先生について思っていること



2442人の子どもは……

アンケートをお願いした先生方に、生徒・学生への調査もご協力いただきました。その結果33都道府県から、2442名もの声が集

まりました。養護学校が少なく高校女子が非常に多いなど、回答数に偏りがありますが、先生も、親もぜひご覧下さい。

2. 3. 5. の問いに対して

		先生を				5.先生になりたいと			
		2.好きと思 ったこと がある		3.きらいと思 ったこと がある		思		う	
		男	女	男	女	男	女	男	女
小	3	68	100	26	67	0	47	21	40
	4	49	74	53	47	5	15	27	42
	5	74	89	58	71	8	24	25	53
	6	43	52	57	74	2	11	24	44
中	1	33	59	53	84	4	16	25	51
	2	28	70	78	88	0	22	19	63
	3	36	51	93	86	10	14	19	63
高	1	40	65	76	90	0	8	48	66
	2	9	71	9	91	9	8	17	67
	3	71	54	100	89	29	7	29	78
養護		50	65	50	100	50	18	0	53
大	1	83	94	96	94	17	17	29	53
	2	86	59	88	54	74	38	24	6
	3								

30%～ 45%～ 60%～ 75%～

学校	学年	男	女	計
小	3	19	15	34
	4	59	53	112
	5	118	89	207
	6	210	176	386
	計	406	333	739
中	1	77	73	150
	2	36	24	60
	3	42	43	85
	計	155	140	295
高	1	25	615	640
	2	46	390	436
	3	7	139	146
	計	78	1144	1222
養		2	17	19
大	1	35	36	71
	2	42	54	96
	3	77	90	167
総計		718	1724	2442

〔調査に協力して下さった方〕
左表の通りです。
「お尋ねしたこと」

- 1、「先生」について聞いて思い浮かぶのは？
- 2、「先生」を好きだと思ったことは？
「ある」人はどんな時？
- 3、「先生」をきらいだと思ったことは？

- 4、「ある」人はどんな時？
- 5、「こんな先生ならいいな」と思うこと。
自由記入の回答を編集部で分類し、男女別・学校種別にパーセントで示しました。
養護学校は少数なので男女の計で表しました。

1. 「先生」って聞いて思い浮かぶのは？

(数字は回答者全員に対する％，以下同じ)

	小		中		高		養	大	
	男	女	男	女	男	女		男	女
◆勉強・学校・規則・宿題・テスト・通知表・黒板 ・チョーク・授業・教育	51.7	55.6	31.6	39.3	70.5	30.3	10.5	32.4	31.1
◆たのしい・おもしろい・やさしい・笑顔・親切・ スポーツマン・きれい・すてき・いい思い出の中 の先生	16.3	25.5	10.9	17.9	3.8	3.8	5.3	11.1	22.2
◆頭がいい・かしこい・大切なことを教える・自分 に影響を与える	2.5	4.2	12.3	10.0	5.1	13.5	10.5	12.9	12.2
◆テレビドラマの中の先生(金八先生など)・先生を 演じた俳優(武田鉄矢・水谷豊など)・歌謡曲	0	0	0	1.4	10.3	1.7	0	1.3	2.2
◆給料安定・公務員・大人・先生の顔・メガネ・容 姿・服装	5.9	6.9	9.0	4.3	0	0.4	0	5.2	5.6
◆目上の人・遠い人・中年・としより・話にくい ・親しみもてない・冷たい・きびしい・がんこ	2.2	1.2	7.7	2.9	6.4	9.9	15.8	10.4	7.8
◆貧乏・しんどそう・つらい職業・しばられている ・かわいそう・つかれている	0.5	0	3.8	5.0	1.3	1.7	0	2.6	7.8
◆めんどくさい・でしゃばり・ものわかり悪い・ うそつき・きたない・変わってる・えらそうにす る・いや・いやみ・きらい・うとうしい・口先 ばかり・冗談通じない・自分勝手	0.7	0	12.3	29.3	24.4	7.5	5.3	2.6	3.3
◆差別する・ひいき・服装検査・矛盾した行動・い じわる・気分屋	0	0.3	1.9	5.7	3.8	3.9	0	2.6	3.3
◆いばる・こわい・おこる・オニ・ける・しごき・ 体罰	16.0	12.3	18.1	29.3	7.6	11.7	10.5	3.9	4.4



きちょうめん，がんこ，冗談が通じない…
は，予想でしたが，みえっぱりとか，
オニ，ここに書けないような汚い言葉に胸
がつぶれます。特に中学生に多かったの
です。先生の悩みは，生徒たちの離反の現実

の中で，でも「教育」なる営みを生業とし
てやらなければならないところでもあるの
でしょう。小学生には，金八先生も熱中先
生も縁がないようでした。先生イコール勉
強，これは宿命なのでしょうね。

2. 「先生」を好きだと思ったのはどんな時？

	小		中		高		養	大	
	男	女	男	女	男	女		男	女
◆勉強をよく教えてくれる・勉強が楽しい・やる気が起きる指導	10.1	21.9	3.2	24.3	3.8	6.9	10.5	7.8	5.6
◆生徒のために一生懸命・悩みなど真剣にきく・怒る時は本気で	1.2	1.8	0.6	7.1	5.1	13.9	26.3	16.9	33.3
◆人生経験話をしてくれる・きびしく頼りがいがある・尊敬できる・自分の非を認める	0.9	2.4	0.6	1.4	2.6	0.6	0	10.4	5.6
◆言うことすることに納得できる・アドバイスをうけうまく運ぶ	0	0	0	0	0	0.5	0	3.9	4.4
◆生徒の気持を理解してくれる・意見をちゃんと聞いてくれる・信頼してくれる・話しかけてくれる	2.2	4.8	1.9	7.1	5.1	11.9	15.8	18.2	24.4
◆ほめられる・励まされる・親切にされる	13.3	11.7	3.8	4.3	5.1	4.2	5.2	9.0	6.7
◆遊んでくれる・一緒に取りくんでくれる・友達のよう・気が合う・話をしてくれる・本を読んでもくれる	9.1	13.5	5.1	10.1	0	9.8	0	9.0	10.0
◆やさしい・おもしろい・たのしい・さっぱりしている・許してくれる・自由にさせてくれる・うちとけやすい	17.2	10.5	10.9	13.6	8.9	11.7	10.5	6.5	3.3
◆外見がかっこいい・元気がいい・美しい	0	0.6	1.9	2.1	2.6	0.6	0	0	0
◆おごってくれる・物をくれる・宿題を出さない・単位をくれる・点数をまけてくれる	6.6	6.9	3.2	2.1	3.8	0.4	0	0	0

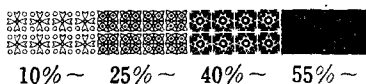


小学生が、遊んでくれる先生を「好き」とするのは当然でしょう。勉強をよく教えてくれる先生を好むのは、大学生を除いて、女子が圧倒的に多いのです。中・高の男子はたいして重きを置いていません。小・中で

はほめられた時やさしい楽しい先生が好まれ、高・大の女子では、悩みなどを真剣に聞いてくれ、生徒の気持を理解してくれる先生を「好き」と言っています。最下欄は甘い先生で、生徒が幼いと人気があります。

3. 「先生」をきらいだと思ったのはどんな時？

	小		中		高		養	大	
	男	女	男	女	男	女		男	女
◆教え方下手・テストでしめる・ムリヤリ教えこむ ・宿題をたくさん出す	4.9	6.9	2.6	3.6	11.5	7.9	0	7.8	5.5
◆理由をきかずに怒る・誤解したまま怒る・何もしないのに怒る・ちょっとしたことでしつこく怒る 生徒の気持がわからない・自分勝手	34.2	46.5	30.9	65.7	35.9	25.9	42.1	41.6	43.3
◆いつも不機嫌・うっとうしい・やつあたりする・ 自分が悪くても非を認めぬ・人間としていやな奴 ・意地悪い・いじめる・人を疑う・うるさい	0.7	0.3	1.3	7.1	2.6	6.4	0	2.6	8.9
◆一方的に押しつける・おせっかい・きびしすぎる ・理屈っぽい・説教ばかりする・自まんする・へん につっぱる・いばる・えらそうにする	0	4.5	4.5	5.7	1.3	18.3	15.8	7.8	5.5
◆うそをつく・うそを教える・裏表がある・責任の がれ・いんげん・裏切り者・口先ばかり・約束を 破る・理不尽なヤツ・わざとらしい	0.7	0.9	0.6	5.0	3.8	4.2	0	7.8	10.0
◆不まじめ・軽薄・じれったい・アホ・まちがった 生徒に注意できぬ・すけべ・いいかげん・情熱が ない・サラリーマンでしかない	0	0	0.6	4.3	0	4.4	0	0	0
◆差別する・ひいきする・バカにする・いやみを言 う・くやしい思いをさせる・生徒の気持をふみに じる	9.1	16.5	8.3	32.9	12.8	25.2	15.8	15.6	23.3
◆暴力・体罰・規則でしめつける	3.7	0.6	11.6	12.9	10.3	0.6	0	1.2	7.8
◆すべて、いつも、フィーリングが合わない・感覚 的にきらい	0	0	0	0.7	5.1	1.7	5.3	0	0



理由をきかずに怒り、何もしないのに怒りしつこく怒る人は大きらいーそれは当然ですね。どの学校段階でもきられていますが、特に中学校女子で際立っています。差別やひいき、バカにしたりいやみを言っ

たりすることも、中・高・大の女子を傷つけています。暴力や体罰は男子のほうが多く受けているようです。先生のすべてが、いつも大嫌い、という人も特に高校生に見られました。

4. 「こんな先生ならいいな」と思うこと

	小		中		高		養	大	
	男	女	男	女	男	女		男	女
◆教え方上手・熱心に教える・勉強はきびしく、休み時間はやさしい・先生を好きでやっている・先生に誇りを持っている・頭がいい	14.5	20.4	9.0	19.3	10.2	14.2	5.2	18.1	16.7
◆生徒の気持を理解する・相談相手になる・心が広い・生徒のことを思う・いざという時頼りになる・人間性豊か	9.0	10.8	14.8	35.0	30.8	34.5	26.3	20.8	41.1
◆自他にきびしく、やることはやる、させる・生徒との約束を守る・うそをつかない・信頼を裏切らない・けじめをつける・自分の信念を持つ	9.0	16.8	7.0	12.8	0	11.9	0	18.1	21.1
◆えこひいきしない・差別しない・人を見かけで判断しない	3.4	8.1	5.8	15.0	7.7	5.3	5.2	2.6	3.3
◆人間としての生き方などを話してくれる・話題豊富・説得力がある・人間的魅力がある・経験豊か	0	0	6.4	0	2.6	6.4	0	6.5	13.3
◆一方的に押しつけない・先生ぶらない・干渉しない・非暴力・自分の非を認める・あっさりしている・てきぱきしている・じれったくない	0.5	0	6.4	0	0	6.6	0	10.4	7.8
◆ひょうきん・明るい・たのしい・おもしろい・やさしい・親しみがもてる	55.9	46.8	37.4	67.8	0	22.6	10.5	7.8	8.9
◆遊んでくれる・友達のように・気が合う・一緒に何んでもやる・本を読んでくれる・話をしてくれる	10.3	11.1	3.2	12.1	3.8	11.5	0	6.5	1.1
◆テレビドラマ、演じた俳優・歌謡曲	0.5	0	0.6	2.9	16.7	4.4	0	2.6	2.2
◆美人・ハンサム・足が長い・若い・強い	0.9	11.1	7.7	7.1	26.9	3.6	5.2	2.6	0
◆せめて常識的に・せめてヒステリーでなく・ふつうならそれでよい	1.2	0.9	3.9	0.7	1.3	10.0	0	0	0
◆おごってくれる・宿題出さない・答を教えてくれる・5をくれる・勉強やめいつも体育にしてくれる・ムリにやらせぬ	18.4	9.9	4.5	7.1	14.1	1.1	0	0	0



10%～ 25%～ 40%～ 55%～

ひょうきんで明るく楽しい先生は、低学年に圧倒的に人気がありますが、高校男子は求めていません。何よりも、生徒の気持を理解してくれる人間豊かな先生を、みな待ち望んでいます。やることはやるし、させ

る、うそをつかず、けじめのある人もまた生徒は欲しています。ここには同じような意見をまとめてありますが、特に大学生ともなれば、好きなように、欲する教師像を描いています。先生、たいへんですね。

＊ 先生は悩んでいる ＊



先生 の

一 日



H・N
(男性・40代・高校勤務)

夫婦の年齢、共に四二歳。お互いに職場での中堅として、何かと雑用も含めて仕事量の多い毎日である。そんな夫婦に三年前、息子が誕生。子供の存在が親を規制する。ああ、何と多忙な日々よ。生活にゆとりが全く無い。いつも急ぎ立てられるかのように時間が過ぎていく。モーツァルトを聞き、好きな民俗学や民芸の書物をむさぼり読んだ日々、そして豊かな夫婦の会話はいったい何処へいったのか。音楽会、映画に芝居、その帰り道での素敵なレストラン……などは夢のまた夢。ゆとりの無い生活の毎日が正確に繰返されていく。でも息子との珍問答に、オモチャや洗濯物の散乱する部屋に、

ああ、これが平均的日本の家族というものか、と実感する今日この頃である。

さて私、つまり、先生であるぼくの一日を綴らなくてはならない。特別な日ではないごくごく普通的一天を選ぶことにしよう。わが家の女房殿の仕事は研究職、つまり実験の都合によって帰りが遅くなる。学会の前ともなれば親父は悲劇の毎日を過ごさなければならぬ。「もうじき終わるからね、あなた頑張つてね」と、叱咤激励される。やっと終わったかと思うのも束の間、「実はまたあるのよね」と、結局何のことはない、息子と二人だけの夕食が週に一日か二日は当たり前という図式が出来上がってしまった。そんなある日、つまり、いわゆる「ぼくの普通の日」を紹介してみよう。

1月22日(木)

5:30 起床。最近、少し疲れてて調子が出ないせいか、いつもより三〇分ばかり遅い。シーンと静まりかえった早朝、出来るだけ音の出ない場所、つまり玄関で、コーヒーマルをガリガリと挽くことから、ぼくの一日は始まる。出勤前の約二時間が一人だけの唯一の時間となつてしまった。昔は、夜はもちろんのこと、この時間に読書をしたり、ひと仕事をしてから出勤したが、最近駄目。ポーと

している時間と家事労働で終わることが多い。今日もそうになってしまった。コーヒーを片手に、新聞を隅から隅までじっくり読む。ウム、今日は生徒向けの話題は無し。

6:10 昨日は指導部会議で遅くなり、疲れたせいか、夕食の後片付けをやらずに寝てしまった。台所は食器の山。食器洗いはいつの間にかぼくの仕事になってしまった。洗いながら、息子専用の健康茶をつくる。

6:40 一人だけの朝食。昨夜の残りのけんちゃん汁と餅を二個。漬物。食教育に力を入れている者の食事としては、いささか恥ずかしい。ゆっくり作っている時間なんか無いんだよ。

7:00 身だしなみを整え出勤。今朝はママも疲れているのか起きてこない。息子とのお見送りなし。ネズミモチノキの下に駐車契約している自動車への鳥糞落下状況を調査してから、門前仲町駅へ急ぎ足。現在、住宅管理組合の理事をしており、住人の鳥糞公害の訴えに答えるために調査中。

7:15 津田沼駅直通の快速に乗る。『再考 日本の森林文化』（NHKブックス）を読む。

7:45 津田沼駅着。押し寄せる人波をかき分けてバス停へ。

8:05 学校着。用務員室にてお茶を一杯。Y先生が生徒向けの新聞コピーを見せてくれる。『高校帰属症候群』と題して、「世間体」と「学歴」欲しただけで登校し、向上心なく、ただ在籍するだけの生徒の急増、「ぼんやり、私語」まん延の高校の実態を報じている。わがクラスにも似たような生徒というか、全くこれと同じ生徒が最近多発、担任をいつも悩ませる。Y先生から一枚受け取る。現在、園芸科の一年生を受け持っているが、入学した当時のあのかわいい

餓鬼が、この時期になるといっぱしの大人になったような気持で行動する者が何人か現れる。これを相手にするのは、楽しくもあるがなかなか大変。毎日持ち上げてみたり、いじめてみたりで、わが悩みは尽きず。

8:20 職員打ち合わせ

8:30 1Hホームルームへ。やはり悪餓鬼どもが遅刻。始業式前に親子面談で約束したにもかかわらず、二週目にして早くも遅刻が増えている。次の手を打たなくてはと思いきや、ドタ、ドタ、ドタ、「やあ、電車が遅れちゃったよ。俺のせいじゃあねえよ」と、勝手に喚きながら着席。空席二つ。教室は非常にきれい。黒板もチョークの跡なし。昨日は小学校の先生方の園芸講習会で午後のホームルームは無かったが、清掃・戸締りは自主的にきちんとやれるクラスに育っている。全校で一番きれいなクラスと評判。これだけが担任の自慢か。出席点呼、諸連絡。『高校帰属症候群』について簡単に話す。思い当たる者、顔を伏せる。ニヤニヤしている者もいる。「本日も頑張っていこう」と、いつもの担任の終わりのセリフ。

8:45 本日は園芸科の推薦入学の日。今年は面接委員ではないので、受付を担当。かわいい中学生がすでに集まっている。この子たちが、自由闊達を校風とする管理教育とは縁遠いわが校に入学してくると、急に大人びてくるのだから、これがまた不思議。早めに受付ける。定員六名のところ、二八名やってくる。激戦。この中に在校生の弟と妹が三名いる。

9:10 三百米ぐらい離れた農場の中にある園芸科職員室へ。担当の鉢花温室を見て回る。いま温室の中には、パンジー、サイネリヤ、プリムラが咲き誇り、アザレア、ランタンキュラス、スイセンな

どの春の花が、開花を待っている。

9 : 20 職員室でお茶を飲みながら、推薦生徒の人物評、そこへ昨春卒業の女子二名が来校。進路カードに記名しながら卒業生と近況を語り合う。本校の園芸科には毎日のように卒業生が顔を出す。

9 : 40 二限目の授業のため、3Hの教室へポンコツ自転車で向かう。

9 : 45 「農業機械」の授業。いつもだと卒業を間近にした彼らに、労基法改悪の問題など、社会生活をするにあたって、知っておかねばならないことなどを話してから授業に入る。いささか今年は脱線しすぎて遅れ気味。今日は「ノートをしっかりとれよ」と、目配りしながら、かなりのスピードで授業を展開。

10 : 35 チャイム。ただちに農場へ。

10 : 55 農場実習開始(3H)。今日は昼休みを挟んで二時一〇分までの三時間実習。草花専攻生の八名と、「農場実習もあと二回、よく頑張ったなあ」と語りながら、クレマチスの植え替えをおこなう。

この実習のときが、ぼくにとって生徒をつかみきる最も重要な時間である。いつも会話が弾む。

12 : 35 昼食休憩。三五〇円の仕出し弁当を食べ終わった頃、園芸講座OBの代表二名が来校。今年の菊づくりの打合わせをする。本校では、「地域と共に歩む学校づくり」を目指して、六年前から学校を地域住民に開放し、園芸講習会を実施してきている。OB会も大変に活発であり、毎日のように誰かが農場に出入りしている。来月に入ったら草花専攻生といっしょに、土づくり、肥料づくりをやりましようと呼びかける。

13 : 20 午後の実習開始。生徒たちは草花の手入れ、水やりなどを

している。小生は二名の代表と、今年咲かせる菊の親株の生長具合を見て回る。昨年末、「四〇人学級早期実現のための請願署名」行動では、本校が県下最大の集約校になったが、その際、OB会が全面的に協力してくれた。今日おいでになっているIさんは、何と百名以上の署名を集めて下さった。引き続き協力を依頼する。

14 : 10 本日は五限で終了、帰りのホームルームへ。わがクラスの授業もなく、朝と帰りだけの顔合わせのみ。出席確認。一名が欠席のほか、全員そろっている。「今日は特別に変わったことなかったか」と、少しやり取りして終了。清掃当番といっしょに教室掃除。クラブ活動で着替えをしている者、早く帰っても何もすることがなく、何となく残っている者で、教室はとても賑やか。掃除をしながら生徒たちの会話に入り込むのは、実に楽しい。掃除に付き合わない先生がかなりいるが、なぜだかぼくには理解できない。生徒の裸の部分を見る絶好の機会だと思ふのだが。演劇部の生徒が呼びにくる。

14 : 40 演劇部の集まりに出かける。もう一人の顧問のK先生が脚本について話合っている。このクラブ、部員一名で潰れる寸前を、我輩が大勢の人物が登場する農村演劇の脚本を書き、「この役は君を除いてはいないよ」と、おだてて強引に教師の教権発動をし、部員に仕立てあげ、起死回生させた俄クラブ。お客さんのような部員ばかりで、部長は四苦八苦している。K先生は、井上ひさしの「新釈遠野物語」を脚色してみようと、かなり強引に迫っている。「こんな難しいの、俺たちに出来ないよ」と、部員はあまり乗り気ではない。黙って、生徒たちと若いK先生のやり取りを聞く。結局、やれるかどうか、皆で脚色してみようという方向で話が進む。途中で

退室。

15:20 事務室へ。事務長と、新しく造園圃場の中につくられる、体験学習のための建物について打合わせる。本校には、「友好の広場」と名付けられた手づくりの野外炊飯施設がある。ロングホームルームの時間は、いつもどこかのクラスが昼食会を開いている。焼そば、鉄板焼、豚汁、バーベキューと生徒たちは受験戦争の息抜きの時間として大いに楽しんでいる。普通科の生徒たちが、園芸科が一学級あることで、自然や農の体験に喜々としている様に、今日の受験教育のゆがみをまざまざと見せつけられる思いがする。この広場は、本校の生徒たちだけでなく、地域の人々の憩いの場ともなっている。ぼたんの開花を楽しみ、野草や柿の葉の天ぷらに舌鼓を打っている。今年の五月頃には、講義場を兼ねた野外炊飯施設と、薬加工、竹細工、炭やき、焼き物、そして味噌づくりや、しいたけ栽培などの、体験学習のできる小屋として衣替える。普職接近の第一歩の場として、大いに活用していきたいと考えている。すでに設計段階に入っており、最終のつめの作業、位置はこれでよいか、焼き物の窯はどうすると事務長と話合っている所に、教頭が呼びにくる。校長が組合と話合いたいとのこと。現在、小生は高教組の分会長。ボス交渉はしたくないと断るが、組合にどうしても話合ってほしいことを伝えるだけとのこと。

16:10 校長室へ。書記長が生徒会を指導中のため、書記次長と出かける。県教委の組合活動制限の攻撃が厳しく、校長としても分会の要求に添って頑張ってきたが、そろそろ耐えられない事態になったと、苦しい胸のうちを訴えてくる。とにかく頑張ってほしいと激励する。

16:50 市民生協の配達食料を事務員室で受け取って、農場職員室へ。会議室ではわがクラスの生徒たちが、来週から始まるグループ別農村調査の印刷をやっている。《農民の健康問題》グループと、《むらの古老に聞く》グループのようだ。農業委員会の役員も、委員会発刊の「園芸科新聞」をつくっている。「頑張っているなあ」と、声かけして更衣室へ。本日は女房殿の遅い日。保育園に息子を迎えに行かなくてはいけない。

17:10 草花専攻生のT君と温室を点検してから、二人でバス停へ急ぐ。バスがなかなか来なくてイライラ。

17:51 結局、一本乗り遅れて、津田沼始発の東西線直通の第一便に乗車。読書するもウツラ、ウツラ。

18:20 門前仲町駅着。急ぎ足で保育園へ。

18:35 延長保育の最終組が次々と帰っていく。最後の園児として保育園を出る。帰り道から高くそびえる我が高層住宅の建物が見える。「あつぱパ、あそこがピカピカしているよ。かえったら、なおしにこうね」。遠くに見えるハイツの蛍光灯が全部ついているかどうか、息子の点検の目は厳しい。「今日は寒いし、ママも遅いから今度しようよ」「フーン」と、会話をしみながら家路へ。

18:45 帰宅。彼の大好きな車で、ほんの少しだけ遊ぶ。

19:00 夕食の仕度。「パパはお食事をつくるからね」と言うのと、最近では仕方がないと思っているのか、一人で遊んでいる。でも、時々、「みて、みて、パパ」と台所へやってくる。料理することは昔から馴れていて、そう苦にはならない。冷蔵庫を開けて材料を見てから、臨機応変に調理できる。女房殿も帰宅が遅いからといって、今日はこれを作って頂戴とはめったに言わない。かといって、そん

なにすごい料理が出来るわけもないが、要はスピードである。小生の酒の肴となるイカの沖漬けを切っていると、テーパーの方では、息子が、「ぼくシシヨクしてみよう」と言いながら、出来立ての「ホウレン草のゴマ和え」や「ホウレン草、しめじ、厚揚げの煮つけ」なんかをつまみ食いしている。

19:50 二人だけの夕食。「さあ、ご飯だよ」と声掛けしても、知らん顔して遊んでいる。保育園に遅く迎えに行った時は、六時過ぎにおやつを食べているので、あまりお腹が空かないらしい。「今日のデザートは何かな」と、交換条件をちらつかせながら夕食。ママから電話、「今日は悪いけど、かなり遅くなるわ」と。学会も近いことだし、仕方なし。息子はママと何かお話している。パパは、イカの沖漬けでお銚子一本。

20:30 デザートのリングとヨーグルトを食べて夕食は終了。息子はおままごとをはじめ。相手をするが、明朝に今日の一日をメモしとかないことには、W_eの原稿が書けないことを思うと、食器を洗ったほうがよいと判断。「あそぼう、あそぼう」と迫る息子を振り切って台所へ。

21:00 後片付け完了。ちよっと夕刊に目を通して、息子と遊ぶ。今度はカルタ遊び。「あさごはん もりもりたべる じゃじゃまるくん」、「ハイイ」。

21:30 寝かせる準備。「今日はお風呂は中止だ」息子は大喜び。歯みがき、洗顔、着換え。

21:40 「今日は九時三〇分を過ぎたから、ご本は一冊だよ」の声に、息子はどれにしようかと真剣にご本選び。二人でベッドへ。何と一冊なものだから、厚い厚い図鑑を持参。まいった、まいった。

読んでやりながら、こちらが眠くなる。

22:00 玄関の扉を開ける音、ママのご帰還、ベッドから、「ヤア」とあいさつをして、息子と共にボタン・グー。

以上が一月二十二日（木）のぼくの日である。ママの帰りが遅かったので、家庭での仕事はいつもよりハードになってしまった。学校での生活は、内容に変化があるものの、いつの日も昼休みを除いて、ゆっくり席を温める時間など無い。何か仕事飛び込んでくる。というか空いた時間に仕事を入れてしまうのが実状だ。家庭においてもしかり。ぼくが遅い日は女房が忙しくなるし、二人いればいたで日頃やれないことをやることになるから、仕事量に変化はない。また、民間教育団体の全国事務局の仕事や、諸々の支援活動などで、土・日のつぶれることも多く、女房殿の負担も相当に重くなってきた。息子に手がかかる時だけに、夫婦にとって今が一番忙しい時なのかもしれない。もう少し息子が大きくなれば、夫婦の生活に、もっとバリエーションが生れるのかもしれない……。

さて、「先生であるぼくの毎日」の生活を振り返ってみての悩み、いくつかあるが、そのうちから一つ二つ拾い出してみよう。

まず第一に、高校教員の一般的な悩みと一致すると思うが、生徒の内面に迫る実践が欠けている点であろう。努力はしている。しかし、小学校などと違って、自分のクラスの授業のない日は、朝夕のホームルームだけが、唯一の顔を合わせる場である。放課後とはいえ、職員同士の集まりがやたらと多く、なかなか落ち着いて生徒たちと話す機会がない。いかに生徒たちと深いかかわり合いを持

ち、彼らの生活実態に迫りうるかが、今後の大きな課題である。

第二に、生徒たちの基礎学力をなかなか伸ばしきれない悩みである。どの親も子供たちが学校で豊かな力をつけ、学ぶ喜びを知り、生きる力を身につけてほしいと願っている。しかし、現在の園芸科の実態は、必ずしも親の期待に答えているとはいえない。「勉強もイヤ、働くこともイヤ」で、三年間に、「生きる力、学ぶ喜び」を知らないままに卒業していく生徒もかなり多い。これからの厳しい産業界の情勢、農民切り捨ての時代に、たくましく生き残るには、進学希望者だけではなく、就職者も農業自営者も、真に学力が伴っていないかどうかにもならない。しかし、現在の本校の教育課程は、学力回復にはほど遠い編成内容である。これを改め、内容を豊かにしていくには、普通科教員とのねばり強い話し合いが必要である。

最近、農業高校の学科再編の動きは急ピッチである。はたしてわが校の園芸科が生き残れるかどうかは、まさに私たちが、高い理念を持ち、お互いに切磋琢磨して、本ものの教育をめざして、頑張り切れるかどうかにかかっている。花形産業向けの速修教育ではなく、学力を向上し、生活力をつけ、たくましい青年として巣立っていく生徒たちを、育てられるかどうか、生き残れるかどうかの鍵となる。普職接近の教育課程づくり、生きる力を育てる教育実践、進路を保障し得る高い学力を育てる実践、そして地域と共に歩む学校づくりなど。

ああ、一日が何と短いことか……。

鈴木 まき子

(30代・小学校勤務)

小学校二年生を担当している私、三〇代、夫と子ども三人。

末娘が五歳になってから、読み聞かせをすれば、何とかあきらめて、ひとりで寝てくれるようになりましたし、上の子供たちも家事分担を責任もって果たしてくれるようになりましたので、私の体は大変楽になりました。

朝は遅くとも五時半には起き、ゆつくり新聞に目を通すようにしております。職場新聞の担当になってから、ネタ探しのためです。また、夜は、疲れている日は、必ずといっていいほど、夕食後に居眠りをし出すので、そんな日は、夫が食事のあと片づけ等、一切を引き受けてくれ、私は末娘と入浴して九時には寝てしまします。早く寝る日と夜中まで起きている日とは、週に半々の割合です。

体が楽になったと同時に、時間的な余裕が多少出て来ましたので読書が楽しめるようになりました。教育関係の本は、最近はお敬遠ぎみで、自然科学(植物、虫、動物、人間行動学)に関するものを読みあさっています。

学年末になると読書など優雅な生活はしておれなくなり、夕食後は連日、採点やら成績づけで追われる始末。夜遅くまで仕事をしていたても、職場の仲間に比べれば、私はまだまだ仕事量が足りないといつも思っています。

職場の仲間には、子供たちとかかわりをととても大切にし、自分なりに大事だと判断したことは、労をいとわずどんどん仕事をししてしまう魅力的な人が多く、子供たちもそのせいか大変生き生きとしており、教師を慕っています。

ですから、私自身もみがなくてはと、常に啓発されています。楽しい職場です。

2月5日(木)

4:30 起床・着替え、コーヒーを入れる

朝食の準備①(コーヒーを飲みながら)

御飲を炊く、みそ汁を作る、ふりかけを作る(煮干しの頭・腹 かつおぶしのだしがら、ごま)

5:00 学級新聞「しぜんのおたより」の原稿を書く

5:30 朝刊が届く、読む

末娘が起きる、トイレに連れて行き、また寝かしつける

5:45 職場新聞「ずっしり」を書く

6:00 ラジオ(NHK・FM)をつける

6:15 夫と子供たちを起こす

夫起床、末娘を起こし、抱いて台所の私の所へ朝の挨拶をしにくる、洗たくを始める、寝室のそうじをする

6:30 朝食の準備②……子供たち(娘十二歳、息子十歳、末娘)が

食卓のセッティング、干物を焼き、盛りつける

朝食

6:50 息子・夫の靴をみがく

7:15 夫出勤

7:25 保育園の連絡帳を書く、娘に買物のメモとお金とを渡す

7:30 末娘を連れて出勤

7:45 娘・息子・食卓の後片づけ、食器洗い、戸じまりなどをすませて登校(8:15)

7:55 保育園に子供を預ける

8:25 職場に着く、出勤簿に押印

8:30 職員朝会

8:40 学年担任どうしで打合わせ

8:45 一校時授業、朝目習の答えあわせ、漢字練習、かさこじぞうの授業

9:30 終了のチャイムが鳴るが、「おもしろいからつづけよう!」という子供たちの要求にこたえ、かさこじぞうの朗読(男女ふたり組で)を続ける

9:45

二校時 理科

「音を出してみよう」の、グループ実験

大なわ集会(全校児童校庭で)

10:20 三校時 理科

「音……」の実験の続き。ノートに記録をさせる

11:30 四校時 理科テスト

算数

下がり九九の練習 九九表穴うめ……おもしろいので子供

たちにうける

12 : 15

給食準備

当番が牛乳をひっくりかえしてびんを割ってしまったが、子供たちだけで後片づけをする。けがもせず、上手にできた。

子供たちに準備はまかせ、私はノートの点検

12 : 35

給食をいただく

13 : 00

給食終了、後片づけ 下校指導

13 : 20

三分の二の子供たち（二十八人）下校

清掃当番（十五人）と教室のそうじをする

よく働くようになったので、短時間で終わる

当番の子らも下校、私、職員室に降りる

13 : 40

K君の母親宛に手紙を書く

K君、下校

13 : 50

学級通信を書く

職場新聞を印刷して、配る

クラブ発表会用、担当クラブのシナリオを書く

14 : 40

クラブ活動、担当クラブの（バスケットボールクラブ）の

六年生が呼びに来る

担当のクラスの子供たちがまだ残っていて校庭の片すみで

なわとびとサッカーをしている。バスケットクラブを見たい

というので、じゃまにならないように、ベンチで見学させる

せる

クラブ終了

15 : 40

「しぜんのおたよりノート」にコメントを書き込む。

二年生の子供たちが、ずいぶん鋭い目で、自然をウオッチ

ングできるようになったことに感動する。絵も大変リアル

に、かつ、やさしく描けている。続けて来た成果が現れた

ことにやや、満足

クラブの子、二名。クラブノートの記録（新チームメンバ

ー表）を届けに来る。金太郎あめをあげると、顔をほころ

ばせて帰る

職場を出る

地下鉄の中で『お座って楽しいね』を読む

保育園へ子供を迎えに行く……ふくれ面の娘、だいてほっ

べをすりよせると笑顔になる

近所のスーパーで買い物

帰宅

末娘といっしょに、手洗い、うがい

保育園の連絡帳を読む

上ふたりの子供の話をきく

夕食の準備

ジョン・デンバーのLPをかけ、ボリュウムを高くして聞

きながら台所仕事……息子「お母さん、また始まった」

娘 「亮がC・C・Bをきくのと同じだよ」

ごはん、みそ汁のダシ汁作り、洗濯物の整理は、すでに上

の子ふたりで完了している

息子……風呂そうじ、食事をする部屋の片づけ

娘たち……ふたりで串カツにパン粉をつけるところまで

と、ポテトサラダの味つけをやる

夕食で上がり

本日の献立・串カツ・ポテトサラダ

・えのきのなます

・シラスのおろしあえ

・ブロッコリーのからしあえ

・イカの塩辛

・きゅうりの三五八漬　たくあん

・ごはん　・ワカメととうふのみそ汁

子供たち食卓へ運ぶ

夫　帰宅

父・子　食事

流し、調理台等片づけ

やつと食卓につく

食事をしながら、明日の娘の社会科見学のこと、息子のサ

ツカーの試合のこと、末娘の保育園でのこと、子供たちそ

れぞれが競って話すので、彼らが満足するまで、夫と共に

聞いてやるのにひと苦労

食事終わる

食後の休憩、新聞を読む

娘に、食器等流しへ下げることを頼む

夫　末娘と入浴

夫　床につく。『ぼくしごとに行くんだ』こどものと

もを読みきかせる

21 : 00

子供たち入浴、就寝

末娘の保育園の連絡帳を書く
包装紙を正方形に切る……折り紙にするため

昨年の秋頃から添い寝をしなくても末娘が、ひとりで

(あるいは夫と寝てくれるようになったので、夕食後、

自分の時間が持てるようになり、大変楽になった

気がついたら、いつの間にか、ウトウト居眠り

21 : 30

台所後片づけ

明朝の食事の下ごしらえ

22 : 10

台所の床、ふきそうじ

入浴

くつ下等洗濯機に入れたくない物を洗う

22 : 40

洗面台のそうじ

職場から持ち帰った仕事をする

23 : 00

「しぜんのおたより」を書く

23 : 30

十一時のニュースを見る。コーヒーを飲みながら、職場新

聞を書く

2月6日(金)

0 : 15

読書『空想茶房』平凡社

1 : 00

床につく

長嶋 安男 (50代・中学校勤務)

1月12日(月)

6:20 起床。寝起きがいいのがただ一つの取りえ。起きられなくてもかならず起きる。妻は朝食(パン・野菜・牛乳)と弁当の支度。私は布団をたたむ。雨戸を開ける。新聞をとりに行く。朝食をとりながらテレビでニュースと天気予報を聞く。

7:15 出勤。西武池袋線富士見台駅まで歩く。一六分間。

7:33 小手指行に乗り清瀬まで。約二〇分間。秋までは一台早い所沢行に乗ったが、寒くなって一台遅らせた。『下り』なので坐って行ける。貴重な読書の時間。毎年メモしているが、今年度は、まだ七五冊め。角川文庫、多田道太郎『しぐさの日本文化』。久しぶりに学担をしているせいか、毎年は達成している年間百冊は怪しくなった。

8:15 学校着。とくにスポーツをしないので、いつも歩くように心がけている。健康を考えて……。事務室へ行き、生徒の感想文を

コピーする。七枚。

8:20 朝礼(8時25分開始)のため、校庭へ出る。寒い。正直いっていやだ。でも、これが仕事。腰のホカロンに感謝。

8:40 簡単な学年打合わせを終えて教室(2-17)へ。出欠確認。本日、欠席者0。やはり嬉しい。続いて、第一校時は「道徳」。前週末の打合わせ通り「三学期における二年生の心構えについて」。内容は、二学期末と三学期初めに女子がおこした事件を概略話し、注意を促す。事件に加わった生徒がクラスにいるのでどうもうまく話せない。

9:30 Kさんが、ロッカー(といっても棚)に入れておいたジャージが紛失したと届けに来る。記名はしてある由。時間がなく、次の休憩時に一緒に探すと約束。

9:40 第二校時、企画委員会(校長・教頭・学年主任・各分掌主任で構成の会)参加。今回は記録の当番。私は校内研修部の主任なので出席することになっているが、学校の会議の中では一番つまらない会議。ただし、これは私の勝手な感情。やはり、大切にしなければ……。

10:30 Kさんが来て、ジャージはIくんのロッカーに入っていたとのこと。IくんがKさんに好感を持っていることは周知の事実ゆえ、また誰かのいたずらだろう。Iくんはお人好しなのでまたからかわれたのだろう。

10:45 2-8。授業。『セボイの反乱』を中心に。

11:35 3組のNさん、生徒会誌「土」の原稿を取りに来る。Nさんは「土」の編集委員。ついでにおしやべりをしていく。「お年賀状の返事、ありがとう」という。「いや、こちらこそお先に頂いて

……」という、Nさんは、「小学校時代の先生を含めて五人の先生に出したが、返事をくれたのは先生ともう一人……」という。「お便りを頂いたら、返事を書くのが礼儀。貴女も憶えておいて……」
というながら、返事を出さない仲間(教師)がいるのが羞しくなる。

11:45 あき時間。生徒に二期期書かせた感想文をまとめたもの――冬休みの自宅研修課題――の印刷物を折り、揃え、ホチキスでとめる。夜の研究会の仲間に配布するため。

12:35 弁当を持って2-7教室へ。生徒と一緒に食事。東久留米市は、中学校は給食なし。父母は給食を望んでいるようだが、私はないほうが気軽である。これ、正直な気持……。

12:55 このとき、ようやく息抜き。ホッとしてお茶を飲む。1時25分まで。昼休み。

13:25 第五校時2-6、授業。「黒船と開国」。雑談に入り授業は予定の半分。次回が負担。気が重い。

12:15 体育着に着替えて、教室の清掃に行く。最近の中学生はほとんど掃除ができないから、疲れる。自分一人でもやる覚悟でないなければならない。「先生が率先してやれば生徒はついてくるもの……」などと考えられたのは、もう二〇年以上むかしの話。あきらめて、自分でやるしかない!!

14:35 帰りの学活。簡単にあすの連絡を伝えて帰す。

15:00 定例(週一回)学年会始まる。部屋がたりず、二年生はいつも調理室を借りる。北側で寒いが家庭科のI先生がストーブをたいておいてくださる。土曜日の父母参観、カルタ大会実施案、前記の事件に参加した五名の生徒の親を5時に呼んであるので、その手筈について話し合う。冬休み中の動向について情報交換も行う。け

っこう時間がかかり、4時30分終了。

16:30 職員室に戻ると、早々とHさんの母親がすでに来校している。会議の始まる前まで、応待する。

17:00 母親が揃ったので、校長室で会合。校長・教頭と二年生の担任が参加。学年主任と生活指導主任から事件の概要と学校の採った処置を説明。母親にも発言を求める。最終的には被害者宅に謝罪にいくよう説得。学年主任と被害者生徒の学担が同行する。

18:05 下校。急いで茗荷谷まででかける。学校を出るころから雪が降り出す。電車の中は、また読書。

19:20 F社の研究会「中学生の世界」に出席する。6時30分開始だから、50分の遅れ。持参したレポートをもとに「現代の中学生の言葉づかい」について話す。話し終って会食。

21:00 研究会が終る。外は雪が降り続けている。

22:20 帰宅。雪の中を急いで帰って来たせいか、家の中に入ると温度差もあつてか、クシヤミ連発。鼻汁を何回もかむ。風邪を引いたのかも……。

22:30 就寝準備。予習は、研究会があつたので日曜日に済ましてある。ふだんは、布団を敷くのは私の仕事なのだが、今日のように遅く帰る日は、妻がしておいてくれる。だから、今夜は、洗顔と歯磨きとひげそりだけ。今晩は風呂はなし。

23:00 就寝。あす、6時20分まで、ぐっすり寝たい。

1月22日(木)

7:00 起床、着替え、洗面、化粧、布団の整理

7:15 食事の準備

7:30 朝食、簡単に食べたづけ、夫の昼食準備

7:50 出勤準備、マイカーのエンジンをかけ暖める。新聞の見出し、死亡広告確認、愛犬バビのお墓に「おはよう・行ってきます」と挨拶

8:00 出勤

8:20 学校到着(今日は車が混雑して時間がかかる)三年期末テスト作成の点検、事務の人に印刷を依頼する

8:40 一年衣生活学習、授業開始

10:30 授業終了(一〇分休みに戻らずに学習教具の始末と次時の準備)後始末、教室点検

10:40 研究部会

森 真知子

(40代・中学校勤務)

12:30 研究部会終了 午後の仕事の段取り

12:40 食事(担任以外は会議室で給食)

13:00 一年、冬休みのレポート(家の仕事を実践しレポートする)を点検しコメント記入する

14:00 一年、衣生活、学習カードの作成

14:50 次年度、修学旅行予算書の作成

15:30 清掃活動を見守りながら、一、二校時の実験布の整理(汚れ落ち実験で洗濯した布の乾燥を確かめ整理保管)

15:55 清掃指導、点検終了、教官室へ戻る(家庭科室、理科室、技術室の清掃指導を分担)

16:00 二年住生活、学習カード作成(個を生かす学習となるための新しい試みで今年度カードを作り直す)

17:40 帰宅準備、退勤

18:00 帰宅、愛犬バビのお墓に「ただいま」。店(夫の仕事一時計店)の従業員の人たちとおしゃべりしながら一休み

18:15 従業員が退勤した後、店番(夫が会議で留守)しながら冬休みの課題整理

18:30 来客(問屋さんとおしゃべり、夫がまもなく帰宅予定のため待ってもらう)

18:50 夫婦宅、お客の対応を引き継ぐ、夕食の準備(明日の食事の下準備も)二階の居間に掃除機をかける

19:30 夕食 夫とおしゃべりしながら(途中に店に来客があったりする)九時半まで、明日のおでんの下煮をしながら

21:30 夕食かたづけ、明日の食事の下準備

22:00 ダイニングキッチン、廊下、玄関踊り場、階段の拭き掃除

22 : 30	トイレの簡易掃除、家の外まわり点検、愛犬バビのお墓に「おやすみ」	14 : 30	冬休みのレポートの点検しコメントを書き入れる
22 : 50	衣服の整理(夫、私の衣服の整理と明日の着用衣服の準備)	15 : 45	担当区域の清掃活動の指導
23 : 30	布団を敷く、洗濯物の整理など	16 : 00	教官会議開始
23 : 50	新聞を読む(北海道新聞、毎日新聞)	17 : 50	会議終了、明日の授業の準備(プリント、学習使用の用具の確認)
24 : 00	洗濯物を干す、居間のじゅうたん以外にからぶきをかける。ごみとりローラでマリ(室内犬)の毛を拾う	18 : 30	帰宅
1月28日(水)	就寝(水道凍結防止作業をわすれずに)	18 : 40	帰宅、庭のバビのお墓に「ただいま」 愛犬マリを相手にひと休み
7 : 00	出勤	19 : 00	二階居間、寝室に掃除機をかける
8 : 00	学校到着	19 : 30	夕食をしながら夫とおしゃべり
8 : 15	本校入学試験のための作業(1) この作業は二三日継続の予定、細切れに時間を使って作業をする予定をたてる	21 : 00	あとかたづけ、ダイニングキッチン、階段、玄関踊り場、廊下拭き掃除、明日の食事のしたごしらえ、外回り点検、バビのお墓に「おやすみ」
9 : 00	原稿書き(衣服整理のしおり作成、生徒の評価についての考察を原稿に)	22 : 00	衣服の整理(夫、私の衣服の整理と明日の着用衣服の準備)
10 : 40	三年C組授業(一〇分休み教室にもどらずに)	22 : 30	洗濯物を整理、布団を敷く、テレビをちらちら見る
12 : 30	授業終了、後始末、教室点検	23 : 00	二年生住生活、学習カードの点検をしてコメントを書き入れる
12 : 40	星休みの仕事の段取りをする(中一入学試験作業)	24 : 00	新聞(北海道新聞、毎日新聞)、雑誌(栄養と料理)を読む
12 : 45	給食(学級担任以外は他の職員と一緒に会議室で食事)	1月29日(木)	入浴、洗濯機を回す。洗髪
13 : 00	給食終了、入試の作業(2)	0 : 30	ドライヤーで整髪、洗濯物をほす
13 : 30	大学同窓会事務整理	0 : 45	居間の床にごみとりローラをまわす。家具など床面以外をから拭きする
13 : 40	午前の原稿書きの続き、終了	1 : 00	就寝(水道の凍結防止作業を忘れずに)

＊ 先生は悩んでいる ＊

友達になれてよかった



松本キミ子

『教室のさびしい貴族たち』が出版された時、出版記念パーティに登場人物たちを二人くらいは呼びたいなあと思っていた。

確実に来てくれそうな人は、私の息子、本の最終章の主人公である。

次に誰？ と考えたら、もう胸がドキドキするばかり、頭の中が混乱するばかりで、誰かれの顔や、体が思い浮かぶ。そして、文章に書けなかった楽しい私とのつきあいの瞬間・瞬間が思い浮かび、まるで映画を見ているような陶醉に、時間がどんどん過ぎてしまう。

もうひらき直って、男の子一人と女の子一人にきめて、とにかく誘ってみることにした。

まずは明少年。

この子とはずーっと前に別れたはずなのに、別の場所で、

彼の話をきくはめになった。

当時、私は産休補助教員で、あちこちの学校を三か月から多くて一〇か月の間一つの学校で図工を教えていた。

産休補助教員をするにあたって、何となく自分にいきかせていたことは、コネをたよらないということだった。案ずる必要もなく、私を次の学校に推薦してくれる校長は、ほとんどいなかった。

ところが今回つとめた学校は、めずらしく、校長会の席で話がきまったそうだ。困ったなあと思った。

結婚式の招待客と同じで、主賓をスターにするために、自己表現をつつしまなければならぬのは、私には苦しい。校長の推薦にふさわしい像を演じられない私は、思いつき好きなように授業をやりたい。そのために私は産休補助教員という、すばらしい職業を見つけたのに。

そこで、私は秘やかに好きな授業を進めよう、目立ったことは極力さけようとした。

はじめて教員仲間へのあいさつの時に

「昨日までは自由人、今日からは職業人、頭のきりかえがまだできていません。落ちついて頭がはつきりしたら、きちんと挨拶したいと思います。どうぞよろしく」と、だけ言った。私としては、うまく逃げられたと、なにくわぬ顔して、自分の机に向かっていた。しばらくして、一人の先生がつかつかと私の傍へ来た。

「松本先生、以前に〇〇小学校に行かれたことありませんか？ 植物はねっこから描く授業なさいませんでした？」

「ギョッばれたか！」と青天のへきれき。

「娘と息子がお世話になりました。やあ、娘に言うとき喜びますよ。娘は何しろ、毎日のように学校から帰ると、黒板で私たちに絵の描き方、教えてくれるんですよ。ですから僕、先生の絵の描き方覚えていきますよ」と、うれしそうに次々と話しはじめる。

「今、ごあいさつにたたれた時、ピーンときたんです。やあ、今日帰って、娘たちに話すのが楽しみです」

その日の午後だったか、女の先生だけが集まって、会食をしようという計画があった。一人、会費は千円とのことだった。

学校の先生って金持だなあ、昼食に千円もつかうのか。金持の学校の先生のペースにならないよう、今日限りにしようとかかなり真剣に思った。

私は、自分の生活費を、産休補助教員をしている時の収入の半分以上使ってはいけなときめていた。

理想的には、半年学校の先生をやって、半年は働かずに過ごすときめていた。そのためには、収入の半分以上で生活する必要があった。

そればかりか、その時私は、四〇歳になっていて、突然二人の息子たちをつれて、家出をしていたのだ。

突然の行動には、知恵がないと、現金がドサツといる。とりあえず飛びこんだ不動産屋さんの紹介してくれた家にすむのに、三十数万円がかかり、少し落ちついて、ここが惚れたと、確かなもののある家へ移動したいと、二週間ほどで又移動したので、又十数万円。いよいよ、カーテンとりつけたら、くぎを買ったりで、何から何まで買わなくてはならず、それが又、すごい出費だ。

私は大学ですぐ日野市の多摩川べりの家に一五年近く住んで、移動したことがなかった。しかも、家出した季節が十二月の末、どこの人たちも猫の手をかりたいほどの忙しい時だった。いや、四〇歳になって、突然無計画に家を飛び出した私に、友情の手を差しのべてもらおうという自信が私には

なかった。

二〇年近く、夫と暮らしてきて、その間にできた友人たちは、夫婦の共通の友人であって、私のではない。私一人のためにかけつけてくれる友など、あろうはずはない。私は一人で、私の人生を切り開かねばならなかった。

まず心ひきしめねばならないのは、家賃をはじめ、生活の経費だった。それだけでも五万円ほどかかりそうで、あーあ、うまくやっているといるのかなー、働くだけの人生はやりたくないしなあーと思いつめている時だったので、楽しくない心境で、その会食に参加した。

ひたすら、ひかえめで、めだたないようにと、自分の名前と住んでいるところと「子ども二人の母子家庭です」くらいの自己紹介をした。

それなのに、

「実は松本先生は、すばらしい実践をなさる方なんです。私はこの学校でお目にかかれて、偶然とはいえ、もう感激しているんです」

「ハア？」私は、相手に全く見覚えがない。困った。どこで会った人かと、思い出せず、めまいがおきそうだ。

「へアキラ」覚えておいででしょうか。〇〇小学校の。私、実はアキラのおばなんです。名字は全く違います」

ここで彼女は、まわりの人々にも話しはじめた。

「私の甥（へアキラ）が、本当にいろいろ問題のある子だったのですが、この松本先生のおかげで、すっかり元の明るい子になり、アキラの家族からいつも松本先生の噂は聞いていたのです。とてもユニークな図工の実践をなさり、きつと我々も良い刺激を受けられると……」ともうニコニコ顔だ。

「へアキラ」、私にとっては忘れるはずのない名だ。アキラと過ごした楽しい日々が浮かび、もう幸せ気分満杯だ。

そのおばさんから、遠足に行く途中、多摩川の土手を歩きながら、アキラの過去の物語を聞くことになった。

アキラが小学校一年の時のことだった。アキラの通う小学校の近くは、ミニミニローカルの電車が走っている。

その電車の線路に、数人の子どもたちが石を乗っけて遊んでいたらしい。小学校一年のアキラは、それを見ていたそうだ。

はつと気がつくと、みんなは逃げていなくなっていて、電車の運転手さんに犯人ということで捕まってしまった。

石を乗つけた友達も、それぞれ自分たちは知らないというはり、アキラがやったといういはる。

「それからがアキラに、校長先生はじめ担任、電車会社は『お前がやったのになぜ素直にそれを認めないのか。ねじれた心を直さねばならぬ』とクラス中で、アキラに反省させるようと、グラウンドの中に一人で坐らせたり、いろいろなこと

をさせたんです」とおばさん。

「なぜ、両親は学校に抗議しなかったのですか？」と、私は当然の質問をした。

「それがね、アキラの父は小学校の先生なんですよ。ですから同僚や上司を批判することができづらかったのですね」

前任の図工の先生から、「本校の問題児として、ぜひ先生の頭の中に入れてほしい」といわれた二人の中の一人が、アキラだった。「授業中に、ちょっと強い刺激を与えると発狂する子がいるんです」との説明に、

「えっ、てんかんかなんかですか？」と私がきいたら、「いえ、それとは違うようなのですが、なにしろ突然、真っ赤なオニのような顔になり、あばれて手がつけられなくなるんです。どうぞ、その子には気をつけて下さい」

その先生はじめ、その学校のアキラ評は全部ウソ。アキラは素敵な少年だった。

私の登校時間に合わせて、いつもの坂道にいくと、ニコッと顔を出してくれる。私たちは世間話をしながら登校するのが楽しみだった。私はみどり色のセカンドバッグを持って、彼は、みどり色の手さげカバンを持って、それが私たちの合言葉だった。

そのアキラとの交友の日々を本に書いたので、アキラをパーティに誘った。

アキラは来てくれた。ただニコニコしているだけで、挨拶の番がきても、あちこちから質問があっても、ただ恥ずかしそうにニコニコしている。すっかり小学校時代の皮がむけて、伸びやかな中学生だった。ただし、中三で、二か月後に高校受験をひかえているとのことだった。パーティの参加者から、

「あんなに素敵な青年だとは思わなかった！」といわれた。私の文才のなさを暗に示されたようなものだ。

十二月の末にパーティがあったので、アキラから遅い年賀状が来た。

「パーティ御招待ありがとうございました」と、何の変哲もない文章だった。しかし、年賀状のすみに、小さく、うすく色鉛筆で、緑色のカバンの絵がポツンと描いてあった。

それを認めた時、フイに涙があふれてきた。

次の年の年賀状は、母上からアキラがめざす高校へ無事入学できた喜びの報告があった。

今年の年賀状では、小学校六年で私と出会うまでは、いじめられっ子の典型で、人前で喋れないということになって、日直もやらせてもらえなかったひだか坊やが、高校に受かりましたと通知がきた。

その子に私が言葉をかけると

「無駄だよ。こいつに口きいたって無駄だよ。こいつはバカ

なんだから」とまわりが口々に教えてくれ、そればかりか、
そういいながら、一人の子は私の目の前で、「全くお前はど
うしてそうバカなんだよ」と頭をなぐるのだった。なぐら
れた張本人は、のろのろと、それ以上痛くされないように、
顔をかばうために両手で防禦しようとしていた。

その子は私と出会った一〇か月の授業中は、一文字もみず
から文字をかなかったのに、別れた年、鉛筆の年賀状が来
た。

「先生のおかげで成績があげりました。ありがとうございます
した」

ほう、彼はついに文をかいてしまったか、と、あきれて見
たのを覚えている。その彼が受かった高校とはと少し気にな
って、中学の教師をしている友人に問い合わせたら、トップ
クラスの高校だという。信じられない。

パーティの前日、彼にもお誘いの電話をした。その時、

「あした？ 英検二級のテストあるの……」と彼、

「あなたのこと本に書いたの。あなたの彫刻の写真も本にの
せたよ」

「えっ？」「あつ、そういえば彫刻だけ、僕のところに返っ
てない」

電話の向こうで、なつかしいたどたどしい声がした。
彼らと友達になれたことが、私の財産である。



編集室からあなたに

◆春の公開ゼミにぜひご参加下さい！

「コンピューターが人間らしさを消す!?」

＊3月29日(日)午後1:00～5:00

＊東京都婦人情報センター(飯田橋駅隣セ
ントラルプラザ15F)

＊参加費800円(資料代含む)18歳未満は
400円

＊問題提起/湯川憲比古・橋本益男・石川
由紀

＊グループ討論 ＊全員による討論

＊司会/川崎絢子・姫野順子

＊保育室 あり、先着10名、3月25日まで
にウイ書房にご連絡を

＊問い合わせ先 ウイ書房 03-326-1380

いま緊急にして最大の課題を話し合いまし
ょう。お仲間も誘ってぜひご参加を！

◆原稿募集

6月号-学校給食で論争しよう

7月号-「制服」着る、着せられる

いずれも身近なテーマです。きっといろい
ろな思いを抱いていらっしゃることでしょ
う。2000字程度でご意見をどうぞ。

「Weの相談室」へも、はがきで、お尋ねを
お寄せ下さい。

×切りは、6月号は3月末日、7月号は4
月10日です。

◆『家庭科新時代』お仲間におすすめを！

Weを飾った5年間の実践の中から、えりぬ
きの31編。家庭科の先生以外の方にも楽し
く読めて考えさせられます。いよいよ家庭
科新時代を迎えようとしている今一人でも
多くの方に、Weが志す家庭科の姿を知って
ほしいのです。チラシ、必要ならご請求下
さい。既刊5冊の単行本も、新学年のプレ
ゼントにどうぞ！

—小学校では—

新しい家庭科を創るために

蛭 間 裕 人

比留間先生 家庭科でがんばる

—最初の挫折—

比留間比呂志は教師生活三十数年になる。今年担任となった五年生で初めて家庭科の授業を持つことになった。

学級減でそれまであった家庭科講師の枠がなくなり、学級担任が持たざるを得なくなった。もちろん、理科は専科として残したのだから、理科を学級担任が持ち、家庭科を専科にすることもあり得

た。が、定員減で現在のメンバーの中から誰かが専科にならざるを得ない等、いろいろな経緯から担任が家庭科を持つことに落ち着いたのだった。

このことを、家庭科教育に関心の強い女性に話したところ、「家庭科軽視ね」と憤慨していた。比呂志は、咄嗟には（あながち、そうとばかりは言えないのでは……）と思いながらも、それは声にはならず、彼女の意見を認めてしまったような形になっている。このことは、ずっと後々までも彼の頭の隅のどこかに引懸っていて、考えるとはなしに考え続けるテーマのようなものになっていった。

家庭科が単に、衣・食・住、に関する技術を習得する場であるとすれば、専門的な教育を受けた専科教員に任せた方が効果的であろう。しかし彼には、家庭科にもう少し大きな任務を与えたい気持があつたのである。もつと社会科学や自然科学の方法を取り入れた総合学習といった形。家庭を包囲している地域社会・環境問題などとの関連も含めて実践的な学習を進めることが出来ないものだろうか……。

男性の家庭科専科教員が東京近辺には何人かいて、彼らの書いたものが目に触れたこともある。映画も……。ちよつと真似してみたい気のある部分もないではないが、学級担任としては限界が見えていた。比留間比呂志は、科教協（科学教育研究協議会の略称）に属しているが、そこでも先端的な実

踐で会をリードしている人の多くが、理科の専科であることも念頭にあった。

さて、この一年、あるいは卒業までの二年間に、どれだけのことが出来るのであろうか。

比留間比呂志には、家庭科について苦い思い出がある。

それは家庭科というより家庭科専科の湯沢先生と、比呂志の担任する児童との間にあったトラブルを、彼が正しく捌くことが出来なかったという思いである。

前に勤めていた山椒小学校のことであった。彼のクラスの五年生の家庭科は、新卒新採用の専科、湯沢さんが持つことになった。

四月、もう最初の反乱があった。「若い女の先生だと思って……」と受け取った比呂志であったが、よく聞いていくと湯沢さんの方に非があることがわかった。運針を教授し、その練習が宿題になっていた。次の時間、点検。彼女は一番前の席にいた杉原君の運針用の布を持ち上げ、厳かに

「自分でやったのじゃないわね。ちゃんとわかるんですから……」

言うなり、赤い糸をツ、ツ、ツ、ツ、と抜いたのである。ボーカーフェイスで……。しかし、その演技の底は割れていた。みせしめ。児童の反発は造反有理と言えるものであった。

短大卒で教職に就く。先輩にどのようなことを言われて来たか、想像がつくというものである。「初めが大切よ。ナメられないように、初めにガツンと一発、やっておくことよ……」。

この前二年ほどいた家庭科の専科は、子供たちに大へん慕われていた。同様、新卒で来たのだったが、大阪へ転任して行ってしまった。五年生になったらあの先生といっしょに勉強ができるぞ、という四年生の時からの子どもたちの期待が裏切られたことも、湯沢さんにとっては辛い立場だった。

三分の二の教職員が組合を脱退したばかりの職場であった。残った三分の一の組合員の中にあつて、懸命に分会を支えようとしていた比呂志にとって、湯沢さんはどうしても組合に入ってもらいたい人であった。そんな事情もあつて、彼女を強く批判するということが出来なかった。児童の側への働きかけも、湯沢さんのことには触れず、家庭科がいかに大切かと説教するという中途半端なものに終わらざるを得なかったのであった。先生は先生を庇う、と児童たちは比留間先生に失望したに違いない。それが以後二年間、卒業までずっと糸を引いていたと思う。湯沢さんへの批判を棚上げにした誤りとして、それは彼にとって苦い思い出となっている。

衣の分野の最初の教材はボタンつけ、スナップつけである。



——よし、あれでいこう——
比呂志は心に決めた。

あれ、というのは腕飾りのことである。布切れにスナップやボタンをつける練習のための練習ではなく、「作る」仕事の中でそれを習得させるのである。

これは元をただせば、彼の創案したものではない。湯沢さんが都教研（東京都教職員組合の教研会議）の研究集会で仕入れて来て、授業の中に取り入れ、成功していたものの一つだった。比呂志にとってのあの苦い記憶——教師の権力を嵩に杉原君の糸を引抜いた湯沢さんから、押しつけでない授業を志向する湯沢さんへの成長への記念品とも思える物が、その腕飾りであった。

裁縫箱はセットで四年の時の担任が既に関わっていた。その材料袋の中にフェルトの布があったのでそれを用いることにした。まず適当な幅と長さに切らせ、腕首に一重に巻いて合わせ目をスナップで止めることにした。

「お母さんの裁縫箱の中に、きっとボタンが沢山とってあるよね。きれいなや、面白いのや……。そういうのをここに縫いつけて飾りにしたいんだ」

「……」

「いろんな色や、いろんな形や、小さきまざまの、そういうのを組み合わせ、アクセサリー——腕環みたいな——を作ろうと思う」

「何でえ？ そんなの作んなきゃなんないのお？」

笠原さんだ。（また！）と比呂志は思う。このクラスを担任してまだ日が浅いのだが、何か新しいことが始まる段になると、「やりたくない」「やらせられたくない」の拒否反応なのだ。特に言葉に出す数人の気分ひきずられるのか、学習への参加が、仕事への取り組みが、消極的に傾く。学級全体の雰囲気「やらずにすまそう」の方向に流される。

比呂志は出鼻を挫かれ、鼻白む。

同じような話をもう一度繰り返し、今回はボタンを沢山持つて来るように念を押したのだった。

蓋を開けてビックリ・ガックリ。

持つては来たものの三つ四つ。裁縫箱の隅にきちんと、チマチマと、慎ましく並んでいる。

「どうして、もっと沢山持つて来なかったの？」

比呂志はそう言ったなり、後の言葉が出て来なかった。

彼のイメージとしては、ビニールの袋や大ぶりのジャムの空き瓶にザクザク入ったボタンなのだ。中には忘れて来る者があっても、誰かに渡りをつけて調達し、ひとの入れ物の中

を物色して交換したり、そんなやり取りの中で腕飾りができていく。

が、二・三個のボタンではどうしようもないではないか。二時間続きの家庭科の時間を。

前、山椒小学校の時は、自分の作った腕飾を担任の比呂志のところに見せに来た。腕に巻いて。満艦飾のトラックみたいにキラキラのや、インデアン飾りを思わせるのや。そして、体育の時も着けたまま、汗臭くなっても取るうとしない者もあった。なのに——と比呂志は思う。二時間かけて、ボタン三個だなんてノ

「もつとつけたら？」

「いいのお」

尻上がりに言う。「つけなさいノ」「つけるノ」でなければ動かないのだろうか。かつて山椒小の子が喜んだことをこの子たちは喜ばないのだろうか。子供が変わったのか。世の中が変わったのか……。教え方が悪いのか。

柳の下に泥鰌どろこはいない、なのか。

それでも、二、三人の男子が小さなボタンをきちんと並べていてねに縫いつけていた。チマチマと、ゆっくり……。割に仕事に熱中している様子が、比呂志にとって大きな救いであった。こういう仕事を認めてやらなくちゃ——と比呂志は思う。

ほとんどの幼児が絵を描くのが好きなのに、大人になると描かなくなる。作品を値踏みされ、低く評価される者は次第に絵から遠去かる。それと同じで、子供たちが思いっ切りやったことは、大人（主として教師）に削られる。やり直させられる。やり直すくらいなら、ぐずぐずしている内に、教師がああせいこうせいと細かく指示するから、そのとおりやれば無難なのだ。指示待ち症候群。だから「こういう風にやったら？」でなく「こうやれノ」の方が良かったのかも知れない。しかし——と比呂志は思う。「……なさいノ」「……しろノ」は極力避けたい。いや、かしではなく、ならばこそと言いつ換えた方がいい、と思う。

登校拒否からは遠いが、教科拒否みたいな傾向が目立ち始めている。音楽が嫌いだから笛を忘れて来る。習字道具を忘れて来るのは習字がやりたくないからだ。本人は無意識であっても、忘れて来るというより、置いて来たと云った方がいいような気がする。

振り返れば、家庭科拒否症はかなり多い。また「主要四教科」に入らない家庭科を軽視する親の気持を、児童がストリートに反映するためか、その時間を力を抜いてやり過ごそうという傾向もある。

湯沢さんの場合だってそうだった——と比呂志は思う。あ

れが漢字書き取りだったら杉原君のお母さんは、子供の代わりにノートの升目を埋めようとはしなかったろう。いやこの機会に一字でも余計に漢字を覚えさせようとしたに違いない。運針——運針の意義について比呂志は余り重要視してはいないのだが——の宿題を通して、その技術を息子の身につけてやろうとは、その母親は思わなかった。

だから家庭科専科は苦勞した。学級担任だって同じだ。何でも、やらないで済ませば得、という感じの児童を前にして比呂志は考える。——これは闘いだ。

それには忘れ物で教師がカリカリするようでは駄目だ。三十センチメートルの物指を持って来るように言っても、十五センチメートルのビニールのペラペラのですませようとすると子供たちに腹を立てても駄目なのだ。だから、彼は三十センチメートルの竹の物指を人数分そろえておいてそれを使わせるようにして来た。

だから裁縫箱をそれと同様にしたかった。といっても、それだけの物をクラスでそろえるのは不可能だ。一学級の人數分の裁縫箱を公費で購入し、それを使わせるのである。そんなこと不可能、と先生たちは言う。箱の中がめっちゃめちゃになって、どうしようもなくなるに決まっている、と。

それには、それに対する方策があるはずだ。——と比呂志は思う。箱に通し番号をつける。No.15の箱は、どのクラス

No.15 使用カード

年 組	氏 名	使用 状 況							
5	1 水上 洋	4/13	4/20						
	2 松谷 淳	4/12							
	3 藤田 高志	4/4	4/21						
6	1 長谷 谷 公	4/16							
	2 比留間 比呂志	4/12							
	3 細川 健	4/7							

言者が話したことである。教育費の父母負担軽減のための実践例としての報告だった。比呂志は、児童の持ち物運びの負担——忘れ物、置いて来る物を出にくくする——を軽くすると同時に、それによって教師がカリカリしないためにも、これを実現したいと思っていた。子供が空手で登校できれば一番いいのだ。

だのに、四年の担任がもう購入させてしまっていた。ああ、なかなか思い通りにはいかぬものではありますねえ。裁縫箱の件といい、腕飾りのことといい、比呂志には八方塞がりと感じられた。最初に挫折あり、前途の多難を思わせる出発であった。

(東京都小平市立小学校)

も15番の児童が使う。簡単なカードを作り、箱の中に入れておく。必要に応じて、使用状況について通信を入れることも良いだろう。例えば(水上君へ。針が折れたから、新しいのをもらって入れておいて下さい。松谷)など。

これもまた、比留間比呂志の発明ではない。山椒小での家庭科の研修会で、都教研からの助

—中学校では—

新しい家庭科を創るために

姫路サークル

香川敦子

土台石を据える—

私たちは兵庫県姫路市の姫路短期大学の同窓会館を根城に中学での技術・家庭科について、ほそぼそと勉強しているサークルです。MEMバーとしては二十人ぐらい登録されていますが（年千円の通信費を納めて、会合の通知と前回の報告を送る人）、月一回の会合に集まれるのは、四人から一〇人ぐらいまで、一〇人も集まると、

賑やかなのでびっくりしています。現職の中学の先生のMEMバーはいつも忙しく、土曜日の午後三時から、という条件でもなかなか出席は難しいのです。最低四人というのは、家庭科教育とは全く無縁であった私K（現在は家庭科の男女共修をすすめる会世話人）、家庭科教育にずっと携わり、現在ある短大で家庭科教育法を担当しているI、姫路短大の卒業生で、別の短大で家庭経営などを担当しているY、同じく卒業生で、ある短大と、高校の両方の非常勤講師をしているM、七〇代、六〇代、五〇代、四〇代の四人です。この四人はほとんどいつも出席です。

その他は中学の家庭科の先生でベテランから新人まで（このMEMバーは、この一年間に分担執筆するとき自己紹介することになります）。それから、高校家庭科の先生（四年前にWの「高校では」を執筆された方たち）、お母さん、中学の技術の先生など、MEMバーではなくても出席して下さった方もあり、機会があればどなたでもとお誘いしています。中学の技術・家庭科についてはそういう場が必要であると、深く思っているからです。

平和と平等が地球人の旗印となっている今、何と現実はそのと遠いことでしょう。中学校も正に、非平和・非平等の場です。臨教審とか教課審の委員の方は、中学の現場のことをちよっとでもわかっていられたいでしょう。し

かし、臨教審・教課審はつきつきと審議をすすめ、路線をしかれます。これが国の文教政策というものです。

この中で新しい技術・家庭科は何ができるか。私たちは模索しています。その小さなサークルの小さな弦きを一年間皆様にお送りしたい、そう思つての出発です。

私たちの六年間の模索の中で、ごった煮のようにいろいろなものが出て来ました。何も解決されなかったといえは大変淋しいことですが、そうでした。一方社会的には、家庭科の問題はつきつきと展開し、変化していきました。

簡単にいえば、男女ほとんど別のことを学習していた中学も、女子のみ必修といわれた高校も、「家庭科は男女必修になる」ことになりました。

私たちは初めから、中学の技術・家庭科を男女共修でという目標で集まったサークルです。この前の改訂のときには、社会が強く要求した男女共学・必修の方向は否定できなかったのですが、何とか否定したかった文部省が、しぶしぶ出した線が、中学に関しては、通称一領域のり入れということでした。

さて領域とはもともと、領地の範囲とか、学問の範囲のことなのでしょうが、家庭科では、被服1・2・3、食物1・2・3、住居、保育、の八領域に分かれています。技術科は、木材加工、金属加工、機械、電気がそれぞれ1・2と分

かれ、栽培と合せて九領域です。

前にも述べたように、五、六年から、中学の技術・家庭科の男女共修は一歩前進して、男子も家庭の領域から一領域（例えば食物1）を学習することが条件づけられました。この一領域のり入れが、「義務教育の中の中学で男女が全く、別のことを学習している」のではありませんという免罪符であったわけです。教科書は、男子用・女子用と書いた別のものであったのが、技術・家庭の両方を含む上・下二冊となりました。

数年前、ある先生が、こんな話をしてくれました。

「PTAの会合で、『家庭』の教科書は全然使わないところがあるが、ぬかしたりしないで教えてほしいと注文された。注意してくれと校長にいわれた」。校長も、親も、かくも多くの領域があつて、その中(十七)から七領域を選んで学習するものである、という認識はありません。技術・家庭科がこのように複雑な領域から構成されていることは問題だと思われる。

前に述べましたように、中学の技術・家庭科で何ができるかを模索し、何も解決しなかったのです。こうすればよい、こうすべきだというめどは、全くつきませんでした。けれども私たちは無駄とも思わず、月一回何かを話しあつていきます。そして私にみえて来たことは、飽きずにこうして話して

いることが、未来の家庭科を築く、大切な道だということである。こういうことから築いていかないと、新しい家庭科は、今の領域内容・指導要領にみられるような、住む人のいない大きな建物のようなものになると思います。

一歩前進と思われる一領域のり入れをするということは、全面共修へのワンステップとみるべきなのでしょうが、その実施の形態は、男子のみの級で学ぶ食物、女子のみの食物が大勢です。

またここで技術・家庭科特有の状態を説明する必要がでてきました。一つの級を技術領域を学習する男子、家庭領域を学習する女子と別れて授業すると、級の人数は半数になります。男子のみの級は二倍になります。この半数になった男子のみ・女子のみの級を、単学級とよぶようです。単学級で授業をするとなれば、先生の授業時間数、特別教室（例えば調理実習室）の使用頻度の調整ができません。食物は1・2・3がありますから、一学年が十学級だと、三十学級が使用することになり、二時間使って、一日に三学級こなすとして、月曜から金曜で十五学級、土曜日に二学級で十七学級しかできません。これは例えばのことで毎週どの学級も調理実習するわけではありませんが、これが確保されないと、時間割その他のやりくりのために不必要な苦勞をしなければなりません。それで級数を半分にするために、一・二組の女子をまとめて、

三・四組の女子をまとめて、という形が普通です。小規模校といわれる（学年三学級ぐらい）ところでは、単学級で授業をしています。これは大変、教師にも生徒にも恵まれたことで、効果もあがります。私たちが最低の理想としたい形です。

さて、のり入れの食物1の授業はというと、一組（男女）の授業、二組の授業というのではなく、のり入れでない授業と同じく、一・二組の女子、一・二組の男子という授業が行われています。全部ではありませんが、その方が多いのではないのでしょうか。

これには、実務的な理由があります。一領域だけののり入れです。その期間（二十時間から三十五時間のわく）がすぎれば、男子・女子は、また異なった領域に入りますから、またもとにもどって、一・二組、三・四組の、男子のみ、女子のみという編成になります。ですから、のり入れ領域も、他と同じく二組合併の方が、スムーズに（進度が少しずれてもその級だけずれこむ）つなげます。やはりここに、十七もある領域の中で「一領域をのり入れる」という条件が、その一領域をのり入れることさえ不自由にしています。

私には「領域のり入れ」ということの意図がはっきりしません。今回の教課審の中間まとめでは、木材加工、電気、食物、家庭生活（新しくたてられる領域です、仮称）の四領域について総ての生徒（つまり男女）が履修するとしています。

これからの領域の問題については今はふれないでおきます。

技術・家庭科という教科の目標とされている「生活に必要な技術、それを使った家庭や社会の生活」というときに、なぜ一領域だけのり入れればよいのか。一領域を選ぶとき何を根拠に選ぶのか。

ここには、男子にも必要な家庭領域、女子にも必要な技術領域という考え方があります。それはそれ以外は男子のみに、女子のみにというのは、男女差別の発想です。

例えば、男子も必要な家庭領域は、食物だというなら（実状は男子のり入れ領域は食物が大半です）、女子も家庭科は、食物だけにしたらどうですか。女子に必要な技術領域が木材加工（これも多数派です）、男子も他の領域はすてたらどうですか。私は、技術・家庭科の目標をこの二領域からだけでも、構築することはできると思います（決してそれがいい方法だとは思いませんが）。

「家庭科」「技術科」は何を学ぶのか、についてはっきりしたイメージを持っていればできると思うのです。

ということは、十七もの領域を並べて、この中から、家庭から五、技術から一、その他一、（男子はこの反対です）などと、領域のわくを指定したからといって、技術・家庭科がうまくいくものではないということです。

生徒たちに、「のこぎりびきとかなげずりをできる」「木

製品の設計について構想の表示の方法を知り、構想図を書く」などを、二十時間から三十五時間で教えるのです。

将来、釘一本打たないかもしれないけれども、男子はのこぎり、かなは学習する。家の中のちょっとした工夫や、改造がすきになるかもしれないけれども、女子は、ここではのこぎり・かなとは無縁である。

食物についていえば、「簡単な日常食の調理を通して、栄養・食品の理解をさせる」（男子にも当然必要です。だから、のり入れのトップ領域であり、中学での男子の家庭科は、食物、という安易な社会通念ができるという結果もあります）ですが、その内容を少し紹介しましょう。食物1では調理についてみると米飯、みそ汁、ルー、魚・肉の油焼、卵焼、野菜果物のいため物、サラダ。食物2では、すし飯とすまし汁、乾めん、ひき肉料理、野菜の煮物、あげ物、小麦粉を用いた菓子、寒天を用いた寄せ物、食物3では味付飯、くず汁、海藻、魚介・野菜の酢の物、あえもの、卵の蒸し物、天火焼。これは、料理学校のカリキュラムではないのかと思います。包丁の使えない（使ったことのない）生徒たちが三十時間ほどの授業で、このようなことをする必要があるのでしょうか。それに、食物1・2は青少年の、食物3は成人の栄養・献立をつくるというタイトルがついています。青少年とは中学生のことなのでしょうか。成人とは、彼等の将来のこと

なのでしょいか、それとも現在の家族（親）のことなのでしょいか。それにしてはなぜか今一番問題になっている幼児の食事については何もふれていません。これは保育領域（しばしば省かれる領域です）の中で幼児の衣生活や食生活に関連して、一日分の献立作成、おやつなどがあげられます。そしてこの部分は省いてもよいと但し書があります。

栄養のバランスではないけれど、食の領域はきわめてバランスが悪いと思われます。

食えるということは、人間にとって何なのだとということから出発すればよいと思うのです。自分たちの今の食生活、材料、調理の方法、台所収納、（住居）、買物（経済）、食卓の準備・手伝い・後片づけ（家事労働）、幼児・中学生・老人の食物は（保育・家族関係・老人介護）、調理するときの着るもの（作業着）、幼児には（エプロン）というようなことを組立てれば、私の考えるまると家庭科ができそうな気がします。ところが現在の内容は、将来台所をうけもつ女子は、「これだけのことはできるようにしなければ」というかまえがあります。

それでも中学では、食物領域が一番やりやすいようで、先方も力をそいでいます。共修も多く行われています。そこはそこ、指導要領とはつかずはなれずです。

小麦粉からうどんをつくる。よもぎを摘んでよもぎだんご

をつくる、このような教材はとり入れられています。生徒たちは、いきいきと「つくって食べた。食える」ということは、調理するということは」と家庭科の根源にふれられるようです。領域というものの繁雑さ。その内容のピンボケさ。そして女子の特性、女子の教育に対するピントの合せ方の鋭さがからまって、私たちはこの問題を話し合うと迷路に入りこんだような感じになります。

この「領域」にかかわる実害は（内容はとも角）、男と女は役割がちがうのだ、女だけが家庭科を勉強する。ああいうことは女のすることだ、という観念を、義務教育の中でしっかりと植えつける。男子に対してのみでなく、もっと悪いことは、女子に対してもです。

家庭科を女子差別条約のいう「男女平等教育」の旗手にしようと考えている私たちは、全く土台石が据えられないのです。このように教育された男性が（女性も）、大学で（特に教育系大学で）意識改革される機会を持って教員になるかという、その期待はうすそうです。

私たちはまるで素手で狼と戦うようだと思います。狼は私たちを、いとも簡単に食べてしまうでしょう。ただ、私たちは食べられても、食べられても生きかえることができるという特性を持っています。それは、哲学・思想にかかわることだからです。

新しい家庭科を創るために

梶 原 公 子

人間が本来なら 感じるはずのこと

※家庭科以前にあるものは

私がWeのことを知ったのは、We創刊後半年余のことだ。それまでは育児休業にあり、一年間専業主婦をやっていた。育休が明け、浦島太郎みたいな心もとなない気持ちでいた時、ある同僚に、かつての『家庭科教育』に代わって発刊されたのだ、と『We』を紹介された。

不安な気持ちでいた私は、Weを手にとった時、その内容にとても明るいものと共感を得た。バックナンバー一号一号を読み、特集はじめ発言欄、名取さんや寺島さんの実践、「波」などを読むごとに、すごいなあ、これからの家庭科はこのように創造的でなくては、とひとり感銘した思いは今も鮮明だ。創刊後の六月号「わたくしからあなたへ」での村田泰彦さんの「Weの創刊は、青鞥に匹敵する」という言葉も忘れられない。

このようなことから、全く遅ればせながら、私は家庭科必修についての正しい認識を、ほとんどWeから学んだ。そしてこの時の思いを書き送った文が、一月号に載って感激したのだが、これが私がWeにひたすら刺激され、関心を持ち続けてきた経緯である。

あれから家庭科を巡る状況もずい分変わって今、家庭科は新しい地平に立ち、新しい革袋を用意された。そしてそれにふさわしい新しい酒を用意しなければならない、と盛んに言われる。けれども実のところ、その酒となるべき「実践」を盛る、という自信が、あるいは意欲が私個人の中で萎えつつあるのを感じる。何を書き出しから無責任なことを言って、とお思になるかも知れないが、少し言いわけを述べたい。

昨年「波」の「家庭科行脚」に掲載された通り、九月初旬、半田さんが私の勤務校に授業参観に来られた。二時間の

授業を参観された後、半田さんは、「梶原さんが質問し、誘い水を向けても、ひとりばかりません、と黙ってしまうと、次々にそのようにしていましたが、生徒さんはいつもそうなのですか」と聞かれた。私は大体そうです、と答えると、更に

「なぜ生徒は次々わかりません、と言って黙ってしまつて平気なのでしょう」

と言われた。私は、とっさに一つは本当にわからないということ、もう一つに高三にもなつてハイハイ小学生みたいに言わないこと、また今の風潮としてまじめに考え、答えるのを軽視することからではないか、と答えた。半田さんはそれでも余り「納得」という感じをされず、話は別のことへ流れていった。

その後、私はこの一件が頭のどこかに残り、いつも黙って聞いているばかりで、心からの反応を表現しない生徒たち、というのを意識するようになった。

そして十一月号。半田さんは、「波」の中で、「どんなにすばらしい内容でも、生徒とうまく噛み合わなかったら、空しい」として、「家庭科以前の問題を掘り起こす必要」を書かれた。そして、「優秀な先生が練り上げた授業をすれば良い時代は、既に遠くへ去った——」と。

いくら「良い授業だ。さあ聞け」と思っても、生徒にとつ

て一体それは何なのか。何の心の響きも意欲もたらさないとしたら、「実践」を書くことは、まさに空しい。

このように胸中すっきりしないでいた十二月、それを半田さんに話す機会があった。

「こうしたら生徒の意欲を起こすことができる、という方法を期待するのではなく、こういう授業をやってもダメ、ああいう方法でも生徒はのらなかつたということを書いて下さい。そこから、なぜだろう？」という疑問が生まれるのですから」と半田さんは言われ、一緒にいらした武田秀夫さんは、

「実践報告として、きちつと書かれたものにはウソがある。それは、滅菌室で純粹培養された無菌状態のようなものだから、教師の一人よがりや自己満足になつてしまう。現実の授業はもっと生々しいものだ」と言われた。

自分の意図する授業と生徒との間にギャップを感じていただけに、私のひとりよがり空回りしている授業を指摘された思いだった。授業にのらないのは、生徒のレベルが低下しているからだ、生徒自身が上ってくるべきだ、という思いが内心あったのだ。

問題はきちつと整った指導案を創り上げることではない。それは教師には必要でも生徒にとっては必要でない。生徒に必要なのは、何かしらはつとする心なのだ。

これがこの実践を書く私の出発となった。

＊中国の実情にみる

話は半分飛ぶが、私は昨年夏中国大陆を旅行した。高校で世界史に登場して以来、中国大陆とその歴史にひどく魅せられてきたのが旅行の動機である。昨年は二度目で、幸運にも上海の某大学教授K先生の紹介を得られ、その大学で日本語を学ぶJさんに通訳を願うことができた。K先生は気取らず謙虚な方で、日本通でもある。堪能な日本語はユーモアや洒落さえ飛び出る。Jさんは彼の教え子で、清楚でエリートという形容がふさわしい女子大生だ。

私は半月にわたり彼女の通訳で、エキゾチックな上海、美しく荘厳な北京、そして広大な華東平野の街々を旅した。

Jさんは日本や日本語について色々質問し、不可解な点があるとノートとペンを取り出し、「その字を書いて下さい」と言う。ホテルにもどってから、持参の日本語の本を読み返す。

ある時話をしている内に、日本の大学生の話になり、「日本の大学生は、何のために大学に行くのですか」

と質問された。中国の状況を見ると、大学生は勉強をするために大学へ行くという実質を伴った明快さを感じる。Jさん



杭州西湖近くの市場 朝6時

は自宅は上海だが、大学寮に住んでいる。学資はすべて国負担で、必要なのは食費だけだが、それも大学寮でとても安価だ。学生につきもののアルバイトも全く不要なので、彼女は二十三歳の今日までその経験がないという。妹さんも大学生だが、金銭的な負担は両親にほとんどない。自分の目ざすところに従って勉学に専念するのがごく自然である。

日本の実情は中国とは大分異なり、Jさんは大学生というイメージに異質なものを感じたらしい。しかし「大学生は勉強するもの」というような、原点と呼べる実態がしっかりとこの国には根づいているのを感じる。

例えばマーケット。農業国であるだけに、早朝市場に行く
と、採りたてのナスやキュウリ、インゲン、ピーマン、ニン
ニク……生きたままの鶏、スッポン、タニシなどが山と積ま
れている。路上で農民が商う自由市場も、桃や西瓜、冬瓜、
りんご……が売られ、それらの臭気と喧騒に包まれた光景は
すごい活気だ。

客はその中を品定めし、欲しいだけ計ってカゴに入れる。
キュウリと羽をパタつかせた鶏がカゴの中に混在する。パッ
クだとかトレイ、冷凍、ワックス、防腐剤、保存料といった
ものたちの存在余地は、全くない産地直送。

それから目につくのが、買い物カゴを下げ、品定めに余念
がないのは半ズボンにサンダル履きの主夫たち（写真）。都
市労働者の大半は三交代制で、国是としての男女平等があ
る。その朝明方番の方が、妻であれ夫であれ買い物し、料理
をするという。

K先生は、中国では男が家事をするのは当たり前だと言
う。「私も妻が働いていますから、料理は大変得意です。日
本では主人が家に帰ると、奥さんがお茶、灰皿、新聞とうや
うやしく持ってきますね」

とユーモアたっぷりに話される。

かつてある新聞で、一日主夫を体験した記者が、周囲の主
婦から、好奇の目を浴び、まいった、という記事を見たが、

中国では全く記事としての価値がないな、と思った。

中国の女性はいくましいなあ、という印象を受けた。例え
ばバスやタクシーの運転手に女性をみかけるが、イヤリング
などして自信たっぷり。だが、お客が「早く発車しろ！」（実
は私は全くというほど中国語は分らないが、多分そう言っ
ている）などと文句を言おうものなら、彼女はものすごい剣幕
で、「交通渋滞で発車できないでしょ！」とやり返す。

いや、我が同志^{*}Jさんも、日頃にはこやかだが、言う時は
すごい。旅行社やホテルでの交渉など口角泡を飛ばすことく
弁舌を振う。（*中国では敬称の代わりに同志を用いるとか）

あるいは一本一角（五円足らず）のアイスクャンデーを、
アイスボックスに入れ、路上や停留所で売る老婆（失礼）は、
ウチのおばあちゃん（義母）に見せたい。

さて、私たちは旅を終え、蘇州から汽車で上海にもどっ
た。上海駅に汽車がすべり込むと、Jさんはいち早く出迎え
てくださったK先生を見つけ、手を振った。雑踏のプラット
ホームに降りたった私たちは、にこやかなK先生と再会し
た。そして、K先生は開口一番日本語で言われた。

「いやあ、Jさん、二週間もの間よく無事でいました。見事
に通訳を果たし、梶原さんを連れてきましたね。大したもの
です」

このK先生の言葉を讀まれ、あれえ、オーバーだなあ、と

思われるかも知れない。しかし、中国の現状は、自由に車に電車に飛行機に乗り、ホテルに泊まる日本を基準に考えると誠に「不自由」である。ホテルに泊まる時は、原則として旅行社（国営で一つしかない）を通さねばならない。飛行機や汽車の切符を買うのも、面倒な手続きがある。中国人であるＪさんでも、学生証の他、大学の照会状を提示せねばならない。

また、北京で泊まるホテルが明確でなければ、北京までの航空券は買えない。しかも、北京では、中国人と外国人が同室に泊まっていけない、という法律があつて（南京ではない）、私はツインルームにひとりで、Ｊさんは、他の中国人の相部屋に泊まつた。この法律は、Ｋ先生ですらご存じでなかった。

ホテルは行く先々で頼みこむしかなく、しかも国営しかないの少ない。悪くすると野宿の恐れもある……。しかも、通訳の卵と中国語が通じない女性二人とあつて、Ｋ先生はこれを「冒険旅行」と呼び、一方では案じていたのだ。

けれども私の経験からすると、このような場合、Ｋ先生の立場の人は、学生でなく私のような立場の人に言うだろう。

「ウチの学生が至りませんで、ご旅行中は何かとご迷惑をかけたでしょう」

謙虚と社交辞令に慣れた私の身体に、このＫ先生の讃辭

は、誠にさわやかにこたえた。Ｊさんの顔もうれしさにほころんでいた。

良縁を見つけ、専業主婦のかわいいお嫁さんを夢見る女子高生に、働くことを、性別分業のひずみを学ばせねば、と考える。食べ物本来のことよりも、食品添加物を言わなければならぬこと。学校で先生でいると、体裁や見栄や社交辞令ばかり上達し、生徒の魂を生き生きさせる術は、全く持ち合わせなくなってしまうこと……。

中国は社会主義国だから、発展途上にあるから日本と違うのだ、との反論もあるが、生活の根源としての示唆に、私は深いものを感じた。

人間が本来なら自然にそう感じるべきこと、それが何か、ぎくしゃくして、そう感じなくなっている。大人も子供も……。そこら辺を原点に、次回から私の目ざす家庭科との取り組みを書いてみたい。

（静岡県立御殿場高等学校）

(1) 性知識の実態 I

女と男の関係を考える会 □

はじめに

私たちは、シリーズ1 変わりゆく性意識と性行動(86年四、六月号)で、若者の実態をみてきた。今の生徒や学生たちは、たくさん性の性に関する情報の中にいて何でも知っているかのように思えるが、実際には正確な知識を知らないままに友達同士のあいまいな情報にふり回されている。また、雑誌やマンガ、テレビ、ラジオ等の性のとりあげ方は、興味本意で刺激的であり、女性の性をもてあそんでいる。

このような風潮の中で、「お互いに愛しあっているれば、性関係をもっともよい」と考える若者たちが増えてきているが、同じ行為でも、女性には厳しく男性には寛大な「伝統的二重規準」が存在し、とくに女性の「悲劇」があとをたたく、男女共に「性の解放」とは

ほど遠い状況に置かれている。「性の商品化」の嵐の中で、セックスを遊びとしてしかとらえられない若者、お金で性を買うことに罪悪感をもたない男性や自分の性を商品化することに抵抗なく自ら売春に足を踏み入れる女性もいる。

このような性情報の氾濫や歪んだ性のイメージに対して、若者たちに正しい情報を提供し、性の意味や愛の大切さを語っていかねばならない。私たちは、まず正しい性の知識を学校教育の中で教えていかなければならないと痛感している。

シリーズ4では、女と男の豊かな関係を築きあげるような教育を考えてみたい。性意識と性行動の実態についてはすでに報告しているので、今回と次回は私たちが実施した「性知識調査」の結果に基づいて、基本的な性知識を若者がどれだけ知っているかを検討しよう。調査対象校は次の通りであり、調査は85年十一月に、授業の一貫として自計式集合調査法によって実施した。

A 高校…創立後六十余年の公立普通科。ほとんどの生徒が大学進学をめざしている。

B 高校…創立後約十年の公立普通科。地元集中受験が行われている。

C 短大…家政系の女子短期大学。

D 大学…男女共学の四年制総合大学。社会学専攻の男子学

生を対象とした。

B 高校は、「保健」の授業の中で、「性とその機能」「結婚と家庭」「家族計画」等について、かなり熱心に指導されている。一方、A 高校の場合はこうしたことについて不十分にしかなされていない。

表1 性知識についての調査 第 学年 (1、男・2、女)

〈お願い〉この調査は、みなさんが性についてどのくらい正確な知識をもっているかを知るために行われるものです。ありのままを答えてください。

次の文章を読んで適当なものを一つ選び○をつけてください
(1) 卵子は排卵後 8 ～ 10 時間位受精能力があると言われている
①、はい ②、いいえ ③、わからない

(2) 精子は射精後 7 ～ 10 日間位生きていると言われている
①、はい ②、いいえ ③、わからない

(3) 排卵日はどのようにして知ることができるか
1、前の月経が終わってから 7 日目か排卵日である

2、前の月経が終わってから 10 日目か排卵日である

③、基礎体温を計って急に下がっている日が排卵日である

4、医者でみてもらわないと知る方法はない

5、わからない

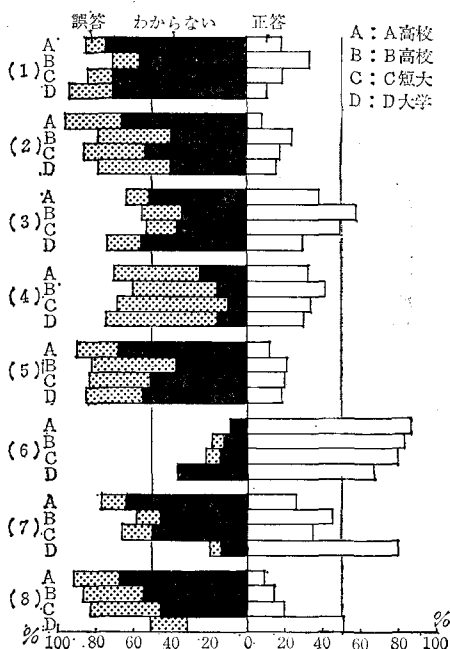
(4) 妊娠期間は、よく「十月十日(とつきとうか)」と言われる

るように、310 日間である

(5) 28 日ごとにきちんと月経のあった女性が、月経が 10 日遅れたので医者へ行った。もし、妊娠していたとすれば、この時、妊娠第何週とかぞえるか
1、第一週 2、第二週 3、第三週 4、第四週
⑤、第五週 6、第六週 7、わからない

(6) 胎児が 3 ヶ月ぐらいまでならば、放射能や薬の影響は受けない
1、はい ②、いいえ ③、わからない

(7) マスターベーション(自慰)をひんばんにすると肉体に悪い影響を与える
1、はい ②、いいえ ③、わからない
男性が精子を体に長くためっていると体に悪い影響を与える
1、はい ②、いいえ ③、わからない



調査項目と解答(1)(表1、正答は番号をマルで囲んだ)

〔問一〕と〔問二〕は、卵子と精子の体内での受精できる時間を尋ねる項目である。私たちがよくめにする教科書等でも、排卵後の卵子の寿命は約二四時間、精子は三日間となっている。ところが、最近の研究では卵子の寿命は非常に短く八〜一〇時間ぐらい、また精子の方はもっと長く七〜一〇日間ぐらい女性の体内で生きていられるといわれている(『生殖医学トピックス』金原医学新書七四、金原出版)。

回答をみると、正答率は〔問一〕が二三%、〔問二〕が一四%と低く、「わからない」がそれぞれ六四%、五〇%と高い率を示している。これは、彼等が教えられていない事を物語っている。また、新しい知識が教科書に反映されていないし、以前の知識で教えられている事が問題といえるだろう。

〔問三〕は、排卵日を知る方法を尋ねたのだが、これも正答率が低く女子で四三%、男子で三〇%である。特に女子は毎月の排卵と月経を体験しながら、排卵日を知る方法を、四つの選択肢から選ばないとは驚きである。ここでも「わからない」が多く、女子で三四%、男子で五三%あった。基礎体温は、ホルモンの影響で低温期と高温期があり、低温期から高温期に移る時に少し下がり急に上昇するので、排卵を知ることができる。

A高とB高を比べると、A高には「わからない」が多く、

教えられていないことがわかる。また、C短大生は二〇歳であるが、一七歳のA・B高校生とあまり差がなく、年齢とともに自然に自分で獲得する知識は少ないといえる。また、男子は女子の生理に関心がうすく、詳しい知識は知らない者が多い。

〔問四〕では妊娠期間を質問している。妊娠期間とは、受精卵が着床してから発育し、成熟した胎児となり出産するまでの期間をさすが、受精や着床を知るのは難しいので、便宜上、最終月経第一日から数えて四〇週間二八〇日目を分娩予定日としている。一般に約一〇カ月といわれているが、実際は九カ月と数日になる。また排卵日から分娩日までの在胎日数は平均二六五日となる。

昔から「とつきとうか」と言われるため、「妊娠期間は三一〇日である」という質問に対して四七%の者が「はい」と答え、「いいえ」という正答は三五%であった。

〔問五〕は妊娠週数の数え方を尋ねたもので、胎児の成長、中絶の時期等の理解に必要な基本的知識である。月経周期が二八日の場合、最終月経の週は0週、二週目に排卵―受精、月経予定日が第四週の一日目になり、設問の「診察日の一〇日目」は、翌週つまり第五週ということになる(妊娠期間は、満の日数または週数で表す)。

正答は一六%しかなく、「わからない」が五二%になって

いる。ここでの B 高校の「わからない」が際立って少なく (三六%)、授業の影響がうかがえるが、正答率が低く、定着していないという問題を残している。全体でも、週数を答えた者の三分の二が誤答であり、性情報が氾濫し、性についてよく知っているように思われがちだが、実際には人工妊娠中絶の時期などを間違って認識していることが多いのである。

〔問六〕は、三カ月までの胎児への放射能や薬の影響をきいている。特に妊娠初期はいろいろな器官が形成される大切な時期で、母体の変化が胎児に影響することがある。放射能や薬物の他、心身の過労やストレス、疾病、タバコ、酒などに留意しなければならない。

この正答率は高く、女子は八四%、男子で六六%である。男子は「わからない」というものが三一%と高いが、全体としては、妊娠初期の胎児への影響の情報は非常によく知られている。

〔問七〕〔問八〕でマスターベーションについて質問したが、男女で明確な違いが現れている。男子は自分の体のことであり、〔問七〕で八〇%、〔問八〕で五一%の正答がある。しかし女子は、三四%、一三%と非常に低い。この結果では、マスターベーションに対する誤った理解のために、罪悪感をもったり、不当に性を抑圧したりすることが、男女共に心配される。

性的に発達した男女にとって、マスターベーションは正常な反応であり、肉体への悪影響はない。日本性教育協会の調査(81年)によると、二〇歳の男子の九八%、女子の四一%がマスターベーションを体験している。〔問八〕への解答であるが、精子は毎秒一〇〇〇個ずつ作られるというが、性的な刺激があれば射精される。射精されなければ、かなりの期間体内にとどまって、再び体内に吸収されていくので、これもまた体に悪い影響はない。

* * *

以上、性のしくみに関する設問および回答についてみてきた。その結果、妊娠初期の胎児への影響に関する事以外は、「わからない」や誤答が多いことがわかった。次回は、妊娠・避妊・中絶の知識についてとりあげる。(森 陽子)

〈参考文献〉

- (1) 鈴木秋悦『生殖医学トピックス』金原出版、80年
- (2) 佐橋憲次・山本直英・村瀬幸浩編集『人間と性の教育』、『1 月経と射精』『2 妊娠と中絶、避妊』『3 性の不安と悩み』
- (3) 飯塚理八『不妊と妊娠の医学』立風書房、84年
- (4) 北沢杏子『ひらかれた性教育3』アーニ出版、85年
- (5) 河野美代子『さらば、悲しみの性』高文研、85年
- (6) 『現代性教育研究』82年二月号、日本性教育協会編集

心理学のなかの教育

小沢 牧子



「発達＝そだつ」 ということ

(1)

この連載も、二年目に入る。一年目は「体罰」、「登校拒否」、「カウンセリング」について書かせていただいた。これらは、教育にかかわる心理学の領域のなかでは、「臨床」という分野に属する諸テーマである。心理学という学問が、人間の心の理解に寄与する側面をもつと同時に、ひとびとの心を管理し、ときには生きかたに口を出し、支配する側が期待する人間づくりに奉仕する側面をもあわせ持つことを伝えようとしてきたつもりである。うまく伝えられたかどうかは、たいへん心もとない。しかし今号からはじまる二回目も、これまでと同じ視点から心理学をさぐり、とらえる努力を重ねてみたい。

さて、教育にかかわる心理学Ⅱ教育心理学Ⅱは、大別して

五つの領域をふくんでいる。(1)発達、(2)学習、(3)人格形成・人間関係、(4)評価、(5)臨床である。この一年の連載では、このうち「発達・そだつこと」、「学習・まなぶこと」の二つのテーマについて考えてみたい。自分の子どもたちとかかわりや、教室で出会う学生たちの意見などの具体的なエピソードに教えられ、助けられながら――。

発達概念の危うさ

「発達」とはよいこと・望ましいことだというイメージを私たちは持っている。「あの子の最近の心の発達は、すばらしい」とか、「若者らしい順調な発達を上げている」という表現によく出会う。そしてその表現は喜ばしさを伝えている。

ところが、山下恒男さんという心理学者は、私たちが肯定的なイメージでとらえているこの「発達」という概念こそが、実は子どもたちを抑圧し、大人たちをも不自由な価値観に縛りつけているのだと説いた。たとえばことばが出るのがおそい子どもや、文字・数字などの記号的思考が苦手な子どもについて、「発達障害」という表現をする。その表現は科学的な装いをもっているけれども、ひとりひとりの子どもがさまざまな個性をもって生きているという見かたを閉めだして、子どものたどるべき道すじの方ばかりに私たちの関心向けさせてしまう。「発達」とは、子どもが私たちオトナの

側に近づいてくることをさしており、期待している道からはずれたり寄り道をしているようにみえるときは、強制的につれもどそうとする。そして私たちオトナは、子どもをどのようにしたら良い発達へとみちびけるかという技術論へと傾いていく、と山下氏は「発達概念」の抑圧性を説くのである。

されど子どもはたしかに育つ

山下氏のこの考えは、『反発達論——抑圧の人間学からの解放』（現代書館）という著書のなかにくわしくのべられている。私自身は、山下氏のこの書から多くを教えられ、持つべき大切な視野を与えられたと思っているが、一方で「でも、やっぱりそれだけではない」という気持を同時に持っている。「発達」ということばが「善」の看板をかかげて実は私たちを捕えこみ縛りつけていることも確かであるが、子ども自身が「発達」へと向かう力づよい生命力を内側にもっているということも、また否定しがたい事実だと思うからである。「発達」のもつ肯定的な感動的なイメージを、私は抑えこんでしまいたいとは思わない。また、それは私にとってあまりに不自然であると感ずる。

ひとつのシーンを想いだす。いまは成人した息子が、生まれて数ヵ月をすぎたある日、赤ん坊を陽のあたる縁側へ出して裸にしておく、彼はとっぜん寝返りをうとうとしはじめ

た。足を交差させ、腰をねじる。上半身はまだ動かずに上を向いたままだが、飽かずに下半身をねじる動作をくり返す。何時間も。私は赤ん坊の様子にすっかり見とれてしまい、一緒に何時間も眺めていた（なんてヒマな母親だったんだろう）。

夕刻にかかるころ、上半身もすこしずつねじれてきた。そしてついにコロリと彼は、まるでオムレツをひっくり返すときのようにひっくり返り、腹ばいになった。赤ん坊ながら、何が自分に起きたのかという顔でキョトンとしている。何しろ世界がいきなりひっくり返ったのだから。若い母親の私もいっしょにびっくりした。

胎内から外界へ出ようとし、仰向けの姿勢から腹ばいに、そして手を鍛えつつ這い、さらに世界をひろげ、立とうとする。子どものそのような姿は私の中にあまりにも生き生きとやきついて、「発達」の肯定的なイメージをつよく支える。何もものかへ向かう子どものちから。いのちのちから。それをもう一度、しっかりとどってみなければならないと思う。そしてそのちからや子どもの勢いを何が助け、何が阻み歪めるのだろうか。

心理学は子どもの発達をどのような眼でとらえてきたのだろうか。山下氏の「反発達論」をみちびき出した心理学の実際や背景を、次回にさぐってみたい。



友だちってなに？

陽射しの暖かい四月になれば、わが生徒諸君もいよいよ最上級生の生活が始まる。ここまでいろいろあって、ひと節ごとに私たちも考えさせられた。

今度の事件はA組の律子がちよつと素敵な革靴を履いて来たことから始まった。帰りに随分捜してもみつからなくて、律子は上靴で帰った。二・三日経ってその靴としか思えない同じ物を初美が履いていた。目敏いユウコとカッチャン（初美と同じC組）が見つけて「その靴どうしたの」と聞いた。初美は「サンシャインの二階のハンバーガー屋の隣の店にお母さんといっしょに行った時買ったの。聞いてもいいよ」。その晩彼女たちは電話をかけて、初美のお母さんに訊いたら、「最近靴は買ってないし、そんな赤い靴は持っていないは

ずだ」という答えだった。次の日それを突かれると、「どれのこと？ ああ、それならタマちゃんに借りた靴のことかな？」とトボケル。F組のタマちゃんは初美とある種の共感があるらしく仲が良い。初美に「ワケを聞かないで」と懇願されて「靴を貸した」と証言したものの、何かアブナイ気配を感じて考え直したようだ。

一方律子やカッチャンたちと私はどうしたらいいのか随分悩んだ。教師の決まりきった対応では、初美の件はいつもきちんと解決していない。彼女たちの真剣さを真つ正直にぶつけてみるしかないかもしれない。「今までにもいっぱいあったけど、一対一だと平気でごまかすし、現場を見ていないのにそれ以上どうしようもなかったんだ」「うちは近所だから、お金がなくなつた時お父さんが言いに行つたの。そしたらおばさんすつごくオコッて「証拠を見せなさいよ」って怒鳴り返して来たんだよ」「こんなに大勢見ている前で堂々と履いていたのに、本人が認めないからそのままなんてヒド過ぎる。私たちも怖がらないではっきり言うから、ちゃんと解決したい」。私たちは警察じゃないのよと念をおすと、「あの子だってこのまま大きくなって良いわけじゃないでしょう？」「トミ子の新しいジャージだって、なくなったら急に初美が新品着てるし……」「他に漏らしたりしない。私たちの恥だもん」。律子と証言者四人に初美、タマチャン、教師は関係の深

い三人だけがオブザーバーとして坐る。

初美は強気に出た。「話があるなら順番に言って」。ユウ子
が口を切って「赤い靴のことだけど、サンシャインで買った
って私たちに言ったよね。タマチャンに借りたのどっちなの
?」「私の靴はいつもサンシャインで買うから、そう言った
だけよ。赤い靴はタマチャンから借りたの。次の人は何?」
……「なんでそんな風に人を疑うの?」

彼女たちは根気よく「りっちゃんがかわいそうだからホン
トのこと言ってるほしいの」「私たちどっちも友達だから、
すっきりして元のように遊びたいのよ」「いやだろうけど、
みんな変に思ってるんだよ。もし違ったら私たち友だちを疑
ったりしてホントに悪いことをしたことになるから、お願
い、教えてよ」。精いっぱい話す顔に真心が溢れていた。初
美はまだ逃げ切れるつもりか、次々とあり得ない話を持ちこ
んで攪乱している。タマチャンの担任が靴の実物を確認し
た。「彼女は赤っぽい靴はこれしか持っていない。他の子が
見たのはこれではないんだネ。タマチャンは初美にその目靴
を貸したのか?」。

タマチャンはそれまでずうっと黙っていたけど、思い切っ
たように「貸してません」。それから「ねえ初美、裏切った
みたいで悪いけど、これ以上あんたがウソを次々作り出すの
を私ツラくて聞いてられない。お願いだからホントのことを

言って、全部元へもどそうよ」とふりしぼるように言った。
カッチャンたちもナミダを浮べて、「初美、お願いだから。
私たち友だちなんだから……」。初美はしばらくして「それ
じゃあ言うけど、ある人が律子のこと憎んで、靴を取った
けど、私に預かってくれて言うから……」「それは誰なの
?」「言えない」。律子が泣き出した。「私自分では何も覚え
がないけど、そんなに人に憎まれるようなことをしてるのか
しら。それなら教えてよ、その人に謝らなければならないも
ん」「初美、りっちゃんのために教えてよ。責めないから。
友だち同士じゃない」。

突然初美が「友だち友だちって気安く言わないでよ。タマ
チャンは別だけど、あんたたち私に何をしてくれたっていう
のよ」。ユウ子はボロボロ泣きながら言う。「私初美になんにも
してあげてないかもしれない。でも一緒に帰ったり、話し
たりするのは友だちじゃないの?」。タマチャンがはつきり
した口調で「私初美に何もしてもらったわけじゃない。でも
友だちだと思ってる」。「初美、勇気出して。本当のこと言お
うよ」「そしたら私たちまた遊べるじゃない」。初美の心がほ
ぐれたかどうかはわからない。自分が取ったのではないと抵
抗しながら、彼女は律子の靴を持ってきた。ジャージーも彼
女の家から出て来た。その後誰もがさり気なく遊んでいる。
それぞれに重い体験だったけど、優しく、賢くなってる。



先生も一緒に学んで

森本真樹子

「男子は早く下校しなさい。早く早く。女子はそのまま、家庭科のテストですよ」。

期末テストの初日、二教科のテストを終えて頭が飽和状態のところへ、先生の声が響く。私は思わず

「先生これってどう考えても男女差別だよ。男子ずるい。先に帰って、女子だからって家庭科のテストやらされるのって、すごく屈辱的なことなんだよ」。

と先生に言い寄った。先生はしばらく黙っていたが、やがて口を開き、

「でも女子は、調理実習でおいしいものが食べられるじゃない」。

「そりやそうだけ……」。

私は、次に口をついて出てくる言葉を、グツとのみこまねばならなかった。家庭科のテストが始まるということだけでなく、あまりにもたくさんの文句が、あとからあとから出てくるからなのであった。

私の通っているのは、わりと自由な校風の県立高校であ

る。私はこの高校が大好きだ。先生も生徒も、型にはまらずユニークだからだ。しかし、ただ一つ、どうしても腹が立つことがある。それは、家庭科の授業である。高校に入學してこれまで約二年間、家庭科の授業を振り返って思い浮かぶことといえば……ただひたすらにノートをとらされたということぐらいだろうか。食物にしろ、被服、住居、保育にしろ、とにかく先生の読み上げる事柄をノートに書き留めるばかりの授業であった。そして、その内容といえば、品物や物質の説明ばかり。なぜそうなのかとか、どのくらいそうなのか、などということを私たちに問いかけることは一切しない。つまりは、先生の教材の押しつけである。そんな無意味なノートを、きれいにしあげるか、汚くしあげるかによって成績の80パーセントはつけられてしまう。また、もっとひどいのが調理実習である。

中学の時は、班で役割分担や、時間配分、作り方の確認などをきちんと行ってから実習に臨んだ。そして、やる前に必ず先生が、調理の注意や要点を説明し、作りあげたものは班

ごとに味見をして批評してくれた。ハンバーグを作った時は、卵は肉をつなぐため、パンは全体をやわらかくするため、玉ねぎは臭みをぬぐために加えるなどということを、しっかり体で覚えた。

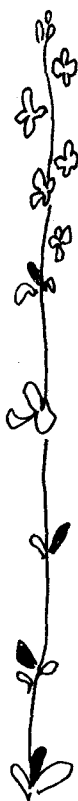
ところが、高校にきて初めて調理実習を行った時、私は「一体何の意味があつてこんなことをするんだろう」とたまげてしまった。冷し中華の作り方を書いた紙を手がかりに、自分たちで勝手に作り、食べるだけなのである。一言の注意も要点も聞かず、出来上がりを見てもらうことも一切なかった。まるで、友達の家を集まってみんなで料理を作ったのと同じである。

こういう家庭科の授業を受けてきたおかげで、どっさり家庭科に対する要望が固まつてきた。まず第一に、家庭科とは一体何を学ぶ教科なのだろうか。一口に言えば、「人間性豊かな家庭生活はどうあるべきか」を学ぶことだと思う。すると当然、女子だけ必修というのはおかしいことになる。家庭というのは男女からなるものだから、そして、現在の自分の家庭を振り返ることが、まず第一に必要なことではないだろうか。授業で生徒の一人一人が、自分の家庭生活についての現状とそれについての感想を発表し、お互いに聞くことにより、今の日本の家庭像というものがだいたいつかめるだろう。さて、肝心なのはそこからどう学ぶかである。例え

ば、一般に日本の家庭の中の父親の存在は、「父は達者で留守が良い」という言葉がピッタリであろう。しかし、外国では、家族の絆がとて深いとよく聞く。その違いは、どこからくるのかを話し合い、また資料を調べ、そして結論をまとめるといふことをすると、単に学生時代だけの勉強に留まらず、長い人生に向けての考えの基盤となるだろう。自分の家庭を振り返り、問題点を挙げ、話し合つて結論を出すということが、基本だと思う。

今、日本全国の家庭科の授業は、果たしてどれだけこの私の考えと同じような流れで、行われているだろうか。もちろん、私の考えと違つたつていい。要は、先生も生徒も、真剣に家庭科を見つめているかということである。家庭科とは、他の数学や理科や英語などの教科より何よりも、現実的で、その内容を充実させるということとは、これからの人生を十分楽しく、賢く、有意義に生きていく力を養ふということになる。だから、先生も現実に人生を歩んでいる人間の一人として生徒と一緒に考え、学ぶことを忘れないでほしい。

全国の先生方、私たちと一緒に学んで！



初めて教壇に立つ私は

布施 智子

私は、幸運にも来春から教職につくことになった。それだけに、We 創刊号の和田典子氏の文章「初めて教壇に立つあなたに」は、全く自分に向けられているようで、非常に興味深く読んだ。

私の場合、専攻は国語であるから、和田氏のいう家庭科教師の体験する苦労とはまた違った意味でとまどうかもしれないと思う。しかし、家庭科を専門に学んだ人たちを、なかなか採用したがない現在の山形県の実状を考えると、私たちのような副産で家庭科を学んだ者に家庭科教育の将来のかんりの責任が任されているわけで、怖いような気がする。

家庭科という教科は、やはりまだまだ軽視されていると思う。戦前は、柔順な女子をつくりあげるための策の一つの方法に利用され、戦後は民主化、男女平等の名のもとに発足したのも束の間学力偏重の風潮のためにゆがめられ、急激に重要性を失っていったと思う。

しかしながら、家庭でつくっていたものの、商品化、家庭

内労働の減少などが顕著な現代を生きる子どもたちにとって、家庭科は本当の意味で必要な教科ではあるまいか。お金と機械に囲まれて生活している子どもたちは、すべての面において体験・経験が不足しているように思う。TVや雑誌などから、情報はあふれるほど吸収できるから、半ば知っているようであるが、その実、実際に触れた・見た・聞いたといった五感を通しての生の体験が、はなはだしく足りない。頭でっかちになって、原始的な人間としての生きる力を身につけていない子が多くなっている。

生活というものを教える家庭科の意義は、以前にも増してますます高まっていると言える。衣食住の知識や技能を学ぶことによって、生活を考え、社会の中で自分の役割を考えさせるきっかけとなる教科だと思う。

近ごろは、中・高校生の自殺なども大きな問題となっているが、家庭科の中でこそ「生きる苦しみ」やそれを通しての「生きるすばらしさ」を教え、子どもたちに生きる知恵とたくましさをも身につけさせたいと私は思っている。

「女子に対するあらゆる差別の徹底に関する条約」にもとづいての家庭科男女共修も、家庭科教育に新しい道を拓くということで、非常に有意義だ。教育課程にこういう内容が位置づけられることで、近い将来、真の男女平等化が実現することを期待する。

それから、和田氏の文を読んで強く感じたことは、教員にはさまざまな外圧があるのだということである。それは、時には先輩教員であつたり、時には生徒の父母であつたりであらう。職員室でも、多忙なためか会議も深めることができず、共通理解を得られぬまま、協力や協業についての認識と実践がなかなかなされないことも多々あると聞いている。

学生気分もぬけきらずに、甘い自分勝手な教育理想をかかげて教壇に昇れば、頭をガンとやられるかもしれない。しかし、私はどんな外圧、障害も結局は教師のしっかりした教育観があれば、乗り越えられるものと信じている。

一番大切なのは、教科をとわず、教師と生徒の信頼関係であると思う。教師と生徒が一对多数にならぬように、常に一对一の関係が成立するように心がけたいと思う。

教育とは子どもの心を燃やすことだともいう。そのためにはまず教師が燃えなければならぬ。常に自ら学び、生徒からも学び向上しようとする気持ちを忘れてはいけないう。

教師に求められているのは、知識や教える技術のうまさ以前に、人間性だといえるのではないか。家庭科教師又は国語科教師といった肩書きをとりのぞいて、なおその人に残る魅力というものが、本当に生徒を引きつけ、信頼させるものだと考える。

子どもは、無限に拡大し、いつも躍動し続けているから、それに負けないだけの柔軟性、感動する心を教師は持つていなければならぬ。

世の中には、たくさん職業者があるけれど、人間と人間との純粹な信頼関係を柱とするものはやはり、教育であらう。微力であっても、その仕事を選んだ者の責任をしっかりと自覚して、取りくんでいこうと思う。

(本年三月、山形大学卒業)



カナダの教育から

井田裕子

カナダのあるグループが、金曜日夜八時に、中高校生のいる家庭に一斉に電話をして、わが子が今どこにしているか知っているかを調査した。ところが、電話に出たのは大半が子供たちで、そのほとんどが親の居所を知らなかった。これはカナダの家庭像の一面である。一般に両親は子供たちの行動に必要以上に口を出さない。子供たちが早く大人になるのは、大人たちが早く子供たちを大人にしたがっているからである。

日本では先生方は親の干渉に悩むが、ここではむしろ親の放任・無関心が問題となることが多い。一部の進学校では、自殺や麻薬の問題が起きているが、親が子供の進学にかける期待度は、日本と歴然たる差がある。小学校で一、二番の優秀な子供だけが推薦で入る *incentive school* がそれほど人気のないのは、三年間たった六〇名の中で暮らすのは子供にとってマイナスだと考える親が多いからだ。

カナダのハイスクールでは、担任は成績をつけたり出欠をとるだけで、進路指導や相談事はスクールカウンセラーが一手に引き受ける。一人が約二五〇人を受け持ち、顔を覚える

だけでも大変だと思いが、問題を抱えた子は向うからやって来ないから、こちらから生徒たちの中に入って行く。彼らが研修を受けた地域の病院・精神医が、いざという時、力を貸してくれる。私が会ったマクナブ氏は比較的低所得者地域にあるハイスクールのベテランカウンセラーである。カナダの離婚率が40%以上であること、十六歳で家を出た子に福祉からお金が出ることを尋ねると、それほど家を出る子はいないし、すぐ気がついて戻って来る子が多いですよと言われ、こちらも安易な図式化を修正せざるを得なくなった。

先日公立のハイスクールの家庭科を教えるブレンダが新しい教科書(Family Living)を見せてくれた。カナダでは家庭科は必修科目ではない。しかも料理・裁縫・大工仕事などに細かく分かれ、好きなものだけ選ぶ。私が彼女を訪ねた時も、女の子三人と男の子一人が作ったばかりのパンケーキを楽しく食べていた。裁縫を選ぶ男の子はさすがに少ないが、女の子だからといって家庭科を学ぶ義務もない。

Family Living も、料理と同じく選択科目の一つである。

四〇〇頁ほどのずっしり重い教科書は心理学・社会学入門と言えそうなほど高校生としては高度な内容である。この教科書は男女両方の生徒のために作られており、どこにも、男の場合女の場合という記述はない。「男女間の能力差は生物学的なものではなく、あくまでも社会的に作られたものである」「結婚前に二人で話し合い、家事の役割分担と、各経費はどちらの収入から支払うか、リストを作り契約を結ぶとよい」などが、さらりと書いてある。

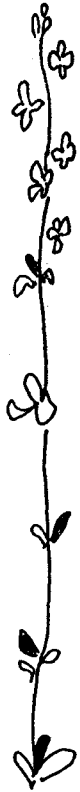
十代の若者と両親はお互いにどう理解し合えるか。継父になつたらどうするか。子供たちの巣立つた後の空白とどう向き合うか。家庭の危機にどういう支えが得られるかなど、一生に起こり得るあらゆる局面を網羅する。核家族や家庭の崩壊により、他の世代と接点のないまま育つことの多い今の子供たちに、読んでもほしい本である。ブレндаは、生徒が各々放課後週二回、赤ちゃんのいる母子家庭、保育園、老人ホームを訪ねて手助けをするという地域参加の学習を行っている。

バンクーバーの小学校はおもしろい。クリストファーは同じハイスクールの数学の先生で、ブレндаの新しい試みの発案者でもある。彼の長男ジェフリーが小学校に入る時、母親のラニーはまだ少し早いなと感じたので、しばらく彼を家に置いた。三ヶ月ほどしてジェフリーは自発的に学校に行き始め、スムーズに溶け込んだという。公立の小学校でも、一人

一人のペースを尊重し無理はさせない。

移民の国カナダでは、一クラス二六人の出身国が一八ヶ国に及ぶこともある。子供たちの言語能力、文化水準にはばらつきがある。学校には必ず勉強の遅れた子や英語の話せない子が一人一人勉強を見てもらう部屋があり、上級生では下校前の三〇分を *catch up time* として、宿題を忘れた子、今日の勉強ができなかった子などが、一人一人先生の指導を受けられる。やむなく小学校一年生を二回やる子、逆に飛び級する子もあるが、また復帰できるし、本人も親も周りの子にも全くこだわりのない。いつ何をどう教えるべしという細かい決まりごとが少なく、圧力があまりないので、先生方は自由で創造的な授業をしている。教育予算削減のおかげで混合クラスが多い。ジェフリーのクラスは一、二、三年の混合クラスだった。自分が一年生なのか二年生なのかわからない子もいるくらいで、家族のように楽しく遊び学んでいる。

二、三年の混合クラスでは算数と国語以外は同じことを教わる。「どうして『二年生向きの音楽』や『三年生向きの理科』に分ける必要がありますか」と逆にこちらが問われてしまう。ハイスクールを含め、何人かの先生に「目下の悩みは？」と聞くとき、口をそろえて、「一クラスの生徒数が多すぎて」と言う。一クラスの平均は約二八人。一人一人のペースに合わせられないなら教育ではないというのが彼らの考え方である。



生と死を考える

——「なぜ生きる、どう生きる」という名の鎮魂歌——

村岡 洋子

多くの人々の死

昭和二十年八月十五日、女学校の一年生であった私の戦後は、蒸し暑い我が家の物干し場に立ちつくしていた長い一日から始まりました。

すでに十八年の五月、父に日本は敗ける、と聞かされていた私に敗戦のショックはないはずでした。しかし、それ以後、加速度的に多くの命が失われていくのにおろおろしながら、それでもなお、一蓮託生、どこかで現実の自分とも繋がっていた「死」が、敗戦によって一つの過去として退けられてしまったとき、私の中に少しずつ溢れて来たのは、今、自分の生が何の理由も権利もないのに、あまりにも多くの見知らぬ人々の死の上に立っている、という恐れに似た思いでした。

長い時がたち、曇り空の端を彩る異様に赤い夕陽の残照の中で、私はそれを私の「原罪」だと思いました。もちろん、この言葉をこのような場合に使うことの誤りは、十分わかっていますでしたが、ほかに言い表し方がありませんでした。生きていること自体が、何らかの後ろめたさや罪の意識に

裏打ちされていた日々は、同時に、溢れるばかりの生命に充たされた、「風立ちぬ」の時でもありました。このような時代、これからの私たちの「生」は、否応なく、断ち切られた無数の「生と死」の意味を解き明かすため、「なぜ生きる、どう生きる」を絶えず問い続ける、鎮魂歌の役目を担い続けることになる、と、私はいつか思い定めていたのでした。

当然のことながら、私の背負っている「原罪」を、私の子供たちはもっていません。私は、それが私と子供たちの世代との根本的な違いだと長い間思っていました。しかし、学校で地域で子供たちと向き合い、末子が中学を卒業するときになって、ようやく、今の子供たちが背負っているものが、ほんの少し見えて来たような気がします。それを理解しようとして心を傾け、その重さに嘆息しながら、今、改めて自分の生の初めに置かれた多くの死のもつ意味の深さにも思い至るのです。

親しい人の死

私の出した手紙に、返事が来なかったのは、彼がもうこの

世にいなかったから……という形で、私は大切な人の死を迎えました。この簡単な理屈を私は理解することができず、今まで、あれほど力強くよろこびに満ちていたはずの世界が、彼がいなくなってしまうとはいえ、全く暗く意味のないものになってしまう、という、そんな理不尽さをどうしても許すことができませんでした。

混乱した心からだを抱え、自然の中から以前味わうことのできた感動を再び引き出そうとして訪ね歩き、魂となったはずの彼の声や意志を集めよう、と焦り、空しい努力を続けたあげく、ようやく彼の死を納得し、自然の営みの前に頭を下げたのでした。

しかし、ただひとつ、あれほど確かな存在感を持ち、現実へと少しずつ転身していたはずの「私たちの生活」が、始めからなかったとすれば、それを信じ、自分の未来のすべてをそれに繋ごうとしていた私とは、いったい、何だったのか——という問いは、いつまでも心の中に住み続け、傷ついた獣のように、狂暴さを募らせて行くばかりでした。

私が再び彼と出会えたのは、何年も後の六月のすばらしいお天気の休日、通いなれた研究室の前の、小さな松林の中でした。さんとさんと降り注ぐ太陽の光が、地面からたちのぼるかげろうと交錯するところに、囲りより一そう明るく親しげにゆらめく、エーテルのように透명한一塊りの気体となつ

て。背筋をさし貫くような一瞬の衝撃のあと、私は目を向けたところどこにでも、そのやさしく親しげで触れやすい気体を、見ることもできるのに気付いたのでした。

おそらく、このすべては、私が創り上げた幻影でしかないのでしょう。死んでしまった人の魂や意志がどうなるのか、この世の次元にとらわれている私たちには、決してわかりはしないけれど、たとえ百％創作であつたにしても、なお生き続けて行くために、私にとっては、彼の生と死を最もふさわしい形で、自分の生に受け止めていく、唯一つの真実であつたのです。心が伸び広がるような安堵感の中で、しかし、心の奥底の「なぜ生きる、どう生きる」という問いが、新しいずっしりとした重さを加えているのに気付いたのでした。

残された者が、死を受容して行く過程は、詳しく研究されていて、否認、混乱、爆発寸前、後悔、喪失感、救い、立ち直り、など段階的にいくつかの共通項にまとめることができます。

しかし、どうしようもない悲歎と混乱の中から、親しかった人の、生と死の意味を問い、その死を自分の命の中に組みこんで、新しく生きていこう、という思いに至る経過は、まさしく、その人の今までの生き方と、故人とのつながりのありようを凝縮した創造であり、ひとつひとつが全く異なった音色を持つ、死んだ人への鎮魂歌となっているのです。

だからこそ、それぞれの物語は、その本当のつらさのすべてを理解することはできないと知りながらも、聞く人の胸を打ち、その人の生と死の世界を拡げてくれるのでしょうか。

死を看とる

のべ五年間にわたる、舅と夫の祖母の介護は、自分の手で死を看とる初めての体験でした。既往症の結核の再発であった舅の死からは、死への不安と苦痛を重く受けとり、ねたきりの呆け老人であった祖母からは、老いとその介護について、限りなく多くの課題を抱えこむことになりました。

しかし、二つの看とりを通じて、私は病人との間に、死について何一つ触れ合いのなかったことをさびしく感じました。できることなら、「自分の死」には、ひと続きの終末のときとして、きちんと向き合っていたい、と思います。死は長い間の生の集大成なので、死をどのような形で迎えるかは、それまでの自分にとっての生の意味を確認することでもあるのです。そんな死を、できれば周囲の人と笑って話し合いながら迎えることができれば……。

しかし、こんな死への願いを、口に出すことは、やはりできませんでした。現実には死を前にしたときの死への恐怖や肉体的苦痛を乗り越える自信がなかったからです。さらに、人間性を無視した過剰医療の問題もあります。

死への取り組み——ホスピスと「生と死を考える会」

「死を人生のごく自然な現象として受容し、死を迎える人のさまざまな苦痛をとり除くことによって、人間としての尊厳を保ちながら、その人らしく生ききることを援ける」というホスピスの理念を知ったとき、私は「自分らしい死」を迎える可能性が、にわかに広がったような思いで、深い共感と安堵を感じました。さらに、すでにいくつかの国で、社会制度として活用されている、と聞き、矢も盾もたまらない思いで、ホスピス研修の旅に参加したのでした。

ホスピス・ケアの理念は、現代医学に対し、数多くの人々の「死」がさし示した人間らしい死への援助の啓示ではないか、と私には思えます。そして、同時に、医療者でない我々にも、死を自分のものとして考え、主体的に取り組むことを示唆しているのではないのでしょうか。しかし、ホスピスは日本では、まだ緒についたばかり、その対象者のほとんどがガン患者、死への取り組みには、まだ問題が山積しています。

「死を拒み忌みきらうのではなく、生と同時に進行するものと考え、よりよい生のために死をみつめ、学び、本音で話し合う。医療従事者にゆだねてしまいうのでなく、自分自身でよりよい生と死のための自立と支えに取り組む」という主旨のもと、「生と死を考える会」が計画されたのは、昭和五十八年、私は一日も早い発足を願って事務局のお手伝いをし、バラバラで未解決のままの「生と死」をいっぱい抱えこんだま

ま参加しました。代表である黒田輝政氏のキアリアと人格によつて、生命の質を高めるターミナル・ケアを模索されている医療従事者をはじめ、死に関心をもつ各方面の方々が数多く参加されており、一般会員と同じレベルで、誠実に本音で話し合う、誠にぜいたくな会合となっています。

私は会場の隅でさまざまな発言に、耳を澄まし、心を傾けながら、未だに「わたしの生、わたしの死」にこだわり続けている未熟な会員です。

ひとりの死を考える

ホスピス・ケアでは、家族もまた、ケアの対象と考えられています。家族が精神的身体的に安定した状態にあることが、患者のためによりよい条件となるからです。ここでも家族は患者にとって最も大切な存在であり、家族に囲まれた死が、「よい死」の大切な条件であるとされています。

けれども、私の心の奥底には、第一回の「女性による老人問題シンポジウム」での「同居であれ別居であれ、ひとり毅然として死ぬ覚悟がなければ」という発言が刻まれています。五十五歳、家族が少しずつ発展的に別れていく時になって、私は、この言葉を、自立した死を可能になるため、心の内に用意しておかねばならないギリギリの条件だと思っています。

高齢化社会を迎えるにあたって、家族をどうとらえるか、は私たちの大きな課題でした。「死」に際しても、ひとり静か

に迎えることが基本であり、家族のあたたかさは、とても貴重なプラス・αと考えておくのが本当ではないかと思っています。

肉親の介護には一顧も与えなくても、死に駆けつけるのは割合寛大な日本の社会ですが、むしろ、ひとりで生きるよりは、ひとりで死ぬ方が堪え易いのではないのでしょうか。

死に面して、自分の生をふりかえるとき、自分の一生に命をふきこみ、豊かにしてくれた人は、今生きてはいなくても、現身の人と同じように、やさしく親しい存在となるでしょうから。「なぜ生きる、どう生きる」を問い続けてきた生が、いつか、自然に「なぜ生きたか、どう生きたか」を自分の心に納得させるための、自らへの鎮魂歌となって死へ収斂していく——現実にはひとりであつても、こんな死があれば、とても楽しいと思えるのです。

遠くにいる家族とは、それまでに自立した人間同志として、十分に親しくやさしい関係を保っていたと思います。そのため、高齢者が自立した人間として、ひとり暮らして行ける援助こそが、本当に必要なのではないのでしょうか。

もし、傍らに、心やさしい介護者——医療従事の方でも、友人でも、家族の一人でも——がいて下さったら、「あの人は、自分の死の主人公として死んだから、よろこんでほしい。いろいろありがとう」とことづけをしたいものです。



今、私は何をすれば良いか？

服部 加江子

人として思う存分生きようとして迷っている私にとって、今、何をすれば良いのだろうか。このことに気づくのは至難である。あらかじめ目標を定めている人にとっては、割合楽なことであっても、自分を見失っている時は、その苦勞は、はかり知れない。

私は、「何が真理か」の追求に、まっすぐに、しかも融通を欠いて、突き進んできたため、一時期社会にどう対応して良いかわからない時をもった。

二十代前半までは、女として生まれたこと、差別や能力の問題、対人関係の悩み等々、世の中で負とされている経験を通して、私の中に巣くっていた疑問の解決に向かっていった。

その解消を私なりに為し終え自己解放をした直後、また新たな問題を抱えてしまった。人間不信という問題である。今までは一つの目標に目をおおわけていたけれど、人と人との間に目をやれば、凄じい深淵があることを知った。エゴイズムに氣をとられたり、人皆目標はばらばらで、心の共通性をもつことの難しさを知った。

この経験は、私をぶちのめしてしまった。心のつながりの大いなる躍動を感じた後だったから、私の上昇志向も、他の人生の意義をも越えた大きな心だと思つたので。

ここで、真理探究をする者にとって悪い癖があることをようやく知った。一つの関心をもつと、他のことを忘却してしまふということ。常に全体を知りつつ、一つに向かうということとはなかなか難しい。

不信者となつてからの私は、あらゆる経験に苦しんだ。離れた目で人と対すると、人との共通性より、離れている所にばかり目が行ってしまう。私と夫との関係も、子育ても、この克服は非常に難しかった。(その試みとして、今までの態度を逆転して、共通部分に目を向けること、人との関係への執われを断つことによつて、何か疎通するものをもち出した。)

会社では、将来への希望を全然感じさせない(高い精神性に欠ける)経験をしたし、結婚しては、家族や対人関係の葛藤の他、女と男のどうしようもない価値観の相違(人間中心主義と仕事中心主義)、子どものしつけの底知れなさ(欲望

をどういう方向にもっていくか。人間の目指す方向を見失っている時は、子どもの将来像も見失う)にうろたえた。

その脱却を求めた女性解放運動への関わりは、人との隔たりを埋めてくれ、焦点を私に定めてくれた。社会の動きの中で、私を生かす方向性を見出したのである。ようやく心の落着きを取りもどして、まだ余りたない。

しかし、私は動いていない。運動をするでもない、将来への糸口をつかんでいるわけでもない、再就職にまだ腰が重い。これはどういうことだろう。

私に問うてみて、私の心がどうも生きていないことに気づく。その都度都度に生きる心はあったが心の奥でまだ解かれていない謎がある。これは私自身のものである。私がそこを解放しない限り、出戻りや挫折をくり返す気がする。私の心の宇宙の中に余りに雑多なものを入れ込みすぎたため、心の自由な活動がしにくくなっている。

忘却ということを恐れたが、忘れてはならない忘却と、忘れねばならないものがあるらしい。この事実になかなか気づかなかった。私は切にエネルギーの源を望んでいるが、私の力の限界を感じる。

そのエネルギー源を常にもって生きてきた人に、平塚らいてうがいることを、私は自伝で知った。彼女は、全体的な精神集中を座禅によって獲得し、いつも太陽を心にもって

た。月になっている者たちにとって、これは強い励みになる。

しかし、真の、私にとっての太陽は何かをつかむことは、私からは予想できない。唯少しばかり触れた真実と心の動向を見定めて、歩むことしかできない。

太陽は息づいているのであり、いつも同じでない。使命感に似たものをもち忍耐強く努力しつつ、眠ってしまわないように常に活力(刺激)を与え、その場、その時に適した行動をとる必要がある。まっしぐらに進むときがあるかと思えば、休息し、周りを見回して自分の居場所にうなずき、また進み出す。

どうやらこういうものらしい。

その真実を頭において、さて今、私は何をすれば良いか。

時は速やかに動く。必要な時は、周りの見解(自立論や主婦論、社会文化や体制、家族)を離れて、私自身に集中することが大切である。短い期間を区切ってだらだらとせず、太陽(エネルギー源)を求めていくことに、今の私の為すべきことがあると思う。その後のことは、ひとまず置こう。

おーに なんでも言おう なんでも聞こうー

◆くつきりと目にしみるようなエメラルド？色の二・三月号の表紙、しっかりと大地に根を張っているタンポポ・なずな等の春の野草いつもながら心がなごむ思い、ステキです。

テーマ「明日ー人はみな成熟に向かって、とても味わい深く、興味深く読みましたが、日下部禧代子さんの「成熟に向かつて歩む」が、今の私には最も共鳴できる内容でした。

平均寿命の伸びた今日、老年期を最も主体的に生きられるようにするためには、これを支える社会のシステムが変わらなければならぬ。新しい社会の仕組みができるには、社会の価値観が改められなければならない……この考え方は、まさに教育（とりわけ男女共学共修の家庭科）を考える上でも大切な点だと思ふのです。

高齢化社会を生きぬくために、「新しいモノサシで物事を見て、トータルに眺められる客観性・本質を見ぬくことができる知性が必要となってくる」という所は全く同感で、少しでも新しい目を持てるよう努力したいものだと思ひます。この意味でも、Weを読み続け

ることは意義があるわけです。家庭科共修への歩みは、今後の女性の人生観を豊かにし、大きく変えてくれると信じ、支援していくつもりです。

「We秋のつどい」の様子と、参加者の感想にも感動。実際に参加していたら、もっともって感激したことでしょう。

また立山ちづ子さんの実践、大豆を教材にした授業展開はとてすばらしく感心させられました。きな粉、豆腐、みそなどを実際に作らせて市販品と比較したり、原材料調べをされた上で、VTRも使って楽しく学ばせる工夫など、さすがにベテランと感心すると共に、こんな先生に学べる甲佐高校の生徒が羨しくなりました。国産大豆、天然にがりの豆腐にこだわって、大豆の価値を見直そうとしていた私には、とってもステキな資料でした。（岐阜・掛布禮子）

◆二・三月号は、感じ入るところが多くあり、機会を失したままになっていた羽田澄子さんの「痴呆性老人の世界」をぜひ見たいと思ひました。

武田さんの文、いつもながらひき込まれます。外見(?)からはちょっと見では思いつかない武田少年そのままの彼を目に浮かべ、魅力を感じつつ、人間って不思議!! を思ひました。

近ごろ学校拒否症の私ですが、植垣さんの「教室って、不思議」の「関係」の機微(雰囲気)の対流」に、そうだ、この不思議が、拒否しながら、きっぱりできない原因の一つなんだと思ったり。

また半田さんの養護学校の家庭科では、私も八王子盲学校の家庭科の部屋を見せてもらい、ほんのちよつと説明を聞いたことが思ひ出され、一人の人間として生きる教育がそこには在り、普通の学校の様々な事柄から解き放たれていない学校ではない学校があることを知ったうれしさとうらやましさを思ひ出しました。（調布・芦谷薫）

◆二・三月号、いろいろ考えさせられました。わが家にも八十七歳の祖母がおります。とうとう寝たきりになってしまいました。食事・排便の世話を、すべて六十四歳の母がしてい

ますが、老人が老人の世話をしているのですから、はたで見ていても気の毒です。母にとっては実母ですが、一人っ子の母にすべてがかかっていて、時には爆発することもあります。祖母の気分のよい時は、歌を歌ったり、一人でぶつぶつしゃべる声が聞こえ、その内容も筋が通っているのですが、時々混乱しますと自分の母を呼び求めます。人は皆こうなるのかな、と私は全く冷たい目でながめていただけなのですが。

「おばあちゃんは宇宙人かもしれない」という内容の絵本がありました。短歌を作り、激しく厳しい性格だった祖母が、このような姿で生きていくことに、「与えられた命」「生かされている」という言葉が浮かんできます。今の私は、自分の手で道を拓き、自分で生き方を選んでいくような思いの方が強いのですが、そうではなくて、そんな尊大な思いをはるか超えたものではないか、という気がしてきます。

家庭科男女共修、男女雇用平等、何となく肩いからせて、がんばらなければという思いに駆りたてられるような気がしていた昨今、久しぶりに何か安らぎを覚えるWeでした。

(敦賀・高嶋みどり)

◆昨年十月号、95ページの意見にぜひ言っておきたいことがあったので、ペンをとりました。鈴木みち子さんの「タバコ一本のために丸焼けになるより、灰皿一つ買ってやる方が安上がりと思うんだけど」という考え方、まちがっていると思います。実際、そうかもしれないし、タバコを吸う中学生の親が、教師に対してそのような言葉をあびせる方もいるそうです。うちでは、隠れて吸わないで、堂々と親のしている前で吸えと言っている。安全だからね——というような言葉。

しかし、本末転倒、やはりおかしいですよ。タバコで青くなるのは、健康でも火事でもなくて、ただただ内申のことだけみたいだよですって。それこそ「やーね」ですよ。そんなもんじゃなと思うのですが。少なくとも、私が接した親は、そうではなかった。

鈴木さんの文章には、タバコを吸う中学生に「味方している」ような「気持ち」がわかった。ような雰囲気があるのですが、それは、ほんとうに中学生のためにはならないのではないのでしょうか。タバコそのものの害については、一歩もゆずってはいけないと思うのです。吸わないのに、煙のどをやられてしまった私には、こういう書き方は、がまんでき

なかったのです。

次に吉田清彦さんの意見に対して。一言でいえば、全くその通り。「結婚＝主婦＝炊事・洗濯」という押しつけについてもそう思うがそのCMが「合成洗剤」だということ!! 前から苦々しく思っていたが、アグネス・チャンまでが出てきて、合成洗剤を宣伝する——なんていうことでしよう。人類の平和を望んでいたはずだったアグネスである。息子に「和平」と名づけたほどの人が、合成洗剤の宣伝、タレントの責任も厳しく問われなければならぬ。まさにその通り。私は、直接アグネスや竹下景子さんに聞いてみたい。「なぜ、そんな宣伝をするのか。合成洗剤の害をご存じなのか」と。(寒河江・中村和子)

◆二・三月号の「発言」で最も強烈だったのは神矢氏の「共に考えて下さい……」でした。就健がマトモでお国のために役に立つ人間とそうでない者をフルイにかけて差別するためのものである、というのは、少数派意見の中でも光り輝くものです。私は最大限の拍手をおくります。この号を頭のうすくなったプライムミニスターに見せたら、一番心臓にグサリとくるものが、このページではないでしょうか。

(府中・斉藤裕)

少年と夕暮れ

小学生のころ、春の夕暮れの縁側で、私は突然わけもなく泣きだして家のものをおどろかせたことがあります。母や叔母は夕餉のしたくにいそがしく、弟や妹は家のどこかでそれぞれ自分のことをしている。腹をすかせて遊びからかえってきたのにちやぶ台のうえはまだなにも用意されていない。なんとなく居場所がないようなきもちで縁側に腰かけているうちに、暮れていく夕空、まわりの家のついたばかりの電燈のあかり、台所で鳴る皿小鉢の音、食い物のおい、それらがやがて自分の身のうちからこみあげてくる身をもむような切なさとい期一会に融けあって、私はしくしく泣きだしてしまつたのでした。年若い叔母がそれをみつめて、なにがあつたのかとしきりになぐさめてくれましたが、私はただ泣くしかありませんでした。台所からでてきた母親、不思議なものをみるように、ぽかんと立っている弟や妹にかこまれて、妙に甘ったるいきもちでことばもなく泣きつづけたその日のことを、私はいまもはっきりとおもいだすことができます。

あれはいつたということだったのだろうとよくおもいます。腹をすかせてかえってきたのにだれも声をかけてくれず、食事はいつまでたつてもできあがらない。そうした不満がこどもの私をぐずらせた、それだけのことだといわれればそれまでですが、そしておそらくそれが事の実相なのですが、そんなつまらないことをこの齢になるまでくりかえしおもいだして忘れたがらないこの自分というものを、このごろの私はやや研究的にながめるようになりました。

どうしておれはこうも人間が甘くできあがつてしまつたのだろう。この手の思い出ばかりを後生大事にかかえておれは生きてきた。それがなければ生きつづけることができなかったかのよう。そしてこの日ごろようやくおれは自分のなかのそんな乳くさを研究的にみることでできる地点にぬけることができたようだ。おれのなかのへこどもへはようやく死んだ――。

その一方で私はこうもおもひのです。あの春の夕暮れ、ひとり縁側にたたずんで、自分をつむ夕暮れの風光と自分の内側の切ないものが一瞬に照応するのを体験したあの日、おれは、実は、この世に生を享けたはじめのときにすでにおれという人間のできぐあいを規定してしまつた原基的素質、そんなものがあるのかどうか知らないが、そういうことばでいいあらわすしかないようなおれという人間のできあがりかたのもっとも根柢的なたち、それをみてしまつたのではなかったか。おとなになつたつて卒業できないなにかを、なみだのなかでたしかめてしまつたのではなかったかと。

私のおもいはさらにその先へとのびていきます。おれは神秘主義者ではないが、あの日のことをおもうと、こんなことまでおもってみたくなる。実はおれがこの世に生まれでる以前からこのおれにつながるなにかはるかなもの、いわばおれの魂のふるさとのようなものが存在していて、それをおれはあの春の夕暮れにおもいだしていたのではなかったか。もしそうであるならば、こどものおれがしくしく泣きながら感じたあの甘さ、そののちも思ひだすたびに感じてこの頃はいささか研究的態度によつて遠ざかろうとつとめていたあの甘さは、そうしたおれにおけるはるかなものの存在を忘れさせないためになにかがしくんだたくらみの味なのかもしれないと。

おまえの魂のかえるべきふるさととはたしかにあるのだから安心してもうすこしのあいだおまえのいるところで生きつづけよ。なにものかがそのように甘くささやく――。

私のなかのへこども、あるいはへこどもの時代へは、どうして死ぬどころかいまも生きつづけて私の本質をかたちづくっているのかもしれない。

それにしても夕暮れ時の縁側という不思議な境界がかつてはあったのだったなあと私はそのこともなつかしくおもいだしています。星のひかりはうすれ、夜の闇はいまだ登場せず、うつろいやすい微妙な明るさがやわらかくただようそこは、家の内とも外ともつかぬところ。遊びほうけてかえってきてもまだ心はおもてにのこり、うちにひきこむのももったいなくてはだしの足をぶらぶらさせながら少年はうたをうたう。学校でならったうたをかたはしからうたう。そして夕空にむかってハーモニカをふく。まれには、はるかな

ものからのよびごえに感応してゆえしらずしくしくと泣きだす。

かつてそうした時空間がたしかに存在し、そこに〈少年〉が棲んでいた。それがいま、〈縁側〉は消えうせ、〈夕暮れ〉は駆逐され、〈少年〉は喪われてしまった。

ひとはこれを益えきもないノスタルジアというかもしれない。しかしひとは、はるかなものへの懐郷のおもいなしにはたして生きていけるものかどうか。少なくともそれが必要とするある種の人間がいるということだけはたしかなようです。

少年 三好 達治

夕ぐれ
とある精舎の門から
美しい少年が帰ってくる

暮れやすい一日に
てまりをなげ
空高くてまりをなげ
なほも遊びながら帰ってくる

閑静な街の
人も樹も色をしづめて
空は夢のやうに流れてある

○○

蓮池 悦子

私は一九七五年〜八五年まで、人口の七割がアイヌ系である北海道沙流郡平取町エベツタニ二風谷という六百人ほどのムラに住んでいました。今は仕事の都合上、札幌市で主に暮らしています。住民票も書斎も二風谷に置いてあります。ちなみに今あげた地名サル、ピラトリ、ニブタニ、サツポロはすべてアイヌ語に漢字を当て字したものです。北海道の地名のほとんどはそうなのです。「二風谷ってきれいな名前ですね」と名作アニメ「風の谷のナウシカ」のイメージでおっしゃる方がいますが、アイヌ側から見れば「北海道はもともと自分たちの「くに」である証拠」の一つなのです。

今年一月からドナルド・キーンさんが朝日新聞『続百代の過客』欄に松浦武四郎の日記を取りあげています。江戸時代末期、幕府はそれまで蝦夷地を支配していた松前藩から領地を取り上

武四郎は幕府の隠密的仕事も担った臨時下級役人として蝦夷地をくまなく調査しました。だから幕府直轄を正当化するために、松前藩の苛烈なアイヌ収奪ぶりをとくに強調した記録を残しているとも解釈できます。アイヌも中央から来た役人に、ここぞと直訴したわけです。また武四郎は精力的なルポ・ライターで、五回の調査を元に江戸でたくさんアイヌに関する木版出版物を出しました。そういう彼だったので、明治初年の行政区画改変時期、明治政府から開拓判官に任ぜられ、「蝦夷地」を「北海道」としたり、アイヌ語地名に発音が近い漢字を当てはめる彼の原案が採用されたのでした。

さて、和人（アイヌ系でない日本人の大多数を形成する民族の通称）の私が、アイヌのムラに住みつき、アイヌの一人称叙事詩・ユーカラの翻訳に携わってきた理由を一言でいえば、「隣接して居住する二つの民族が、なぜ今日まで別々な歴史的発展をたどったのか」という素朴な疑問でした。それがこの連載のタイトルの意味です。

札幌市立中央図書館にはアイヌに関する図書が五百数十冊あります。今入手できる本をほぼ網羅してこれだけです。

しかし、私はこの連載をまず今年九十歳になるアイヌの女性の生の語り言葉を伝えることから始めて、皆さんと一緒にアイヌのことを考えていきたいと思います。よろしく。

＜11＞「女学雑誌」と明治女学校

——巖本善治の理想の情熱——



鹿鳴館時代の女子教育の興隆にユニークな色彩を与えたものに、「女学雑誌」の発行と明治女学校の存在がある。いずれも、女学振興や社会改善の理想に燃えた個性豊かなクリスチャンの巖本善治と深くかわわっていた。

「女学雑誌」は明治十八年七月の創刊から同三十七年二月第五二六号での終刊までの約二十年間、我が国における女性向けの最初の知的雑誌として、啓蒙的役割を果たしたのであるが、巖本善治は、その前身「女学新誌」（明治十七年六月から翌年八月まで刊行）以来、しばしば投稿して華々しい論陣を張った。殊に「女学雑誌」第二四号から責任編集者となり、前誌が女学関係記事専用であったのを改め、女学の外、一般婦人界情報・政治社会評論・海外ニュース・文芸・宗教・読者投稿欄等に範囲を広げて活躍した。

巖本の夢は雑誌を通して旧来の封建的女性観や弊風を排し、女学を振興し

て女性の心身を発達させ、その権利を伸長して社会的地位を向上させることであり、同時に男性啓蒙をも意図していた。しかし「中正」的立場を主張した彼は、教育や自己啓発による女性の特性に応じた穏健な社会改善を期待し、社会構造の矛盾を深く突くものではなかった。したがって二十年代後半以降の「女学雑誌」は、時流に妥協して精彩を欠くものとなり、かつ経営難も加わり、遂に廃刊となった。

明治女学校は「女学雑誌」創刊と同じ十八年、初代校長木村熊二夫妻を中心に創設されたが、巖本も発起人の一人で、二年後には教頭として実質的に校務を主宰し、二十五年以降校長としてその強烈な個性を発揮した。二十四・五年頃高等科に学んだ羽仁もと子（自由学園創始者）は、当時を回顧して「毎日巖本先生の講話があった。時事問題あり文学あり宗教あり、その風采その能辯、才気と敬虔と、覇気と熱涙とを織り交ぜて本当に華麗なものであった」と述べている。自由主義的教育を通して学生達に自己開発や自己献身を促し、彼等と与えた影響は大きかった。また教師陣に島崎藤村や北村透谷等を加えユニークな存在であったが、二十九年火災で全焼。再建はされたものの、経営難で四十二年に廃校となった。しかし、「女学雑誌」や明治女学校で啓発された人々には、羽仁の他、吉岡弥生（東京女子医大創設者）や相馬黒光、野上弥生子等がいるのである。

——私と家庭科との出会い——

湯 沢 静 江

家庭科の共学を、はじめに思いついたのは、短大の一年生の時だった。一九五一年のことである。それから実際に共学の授業をはじめたのが一九七二年で、昨年はついに、家庭科を共学で実施する方向が教育課程審議会から出された。夢みたいなきことを考えてから、わずかこれだけの年数で実現することになったことだけで、私にとっては驚きであるが、それと同時に、社会は動いている、息づいているということとをひしひしと感ずるできごとでもあった。すこしおこがましい言い方をするならば、私の教職生活は、共学家庭科の軌跡でもあった。したがって、この稿を起こすには、私自身の半生を洗い出すことからはじめなくてはならないわけで、即席のノウ・ハウにはなりそうもないが、お許しいただきたい。

一九四七年四月、新制中学三年のとき、旧満州、大連から引き揚げて日本

内地に帰ってきた。父が満州鉄道の職員として、私の生まれた年（一九三三年）に渡満し、第二次世界大戦終結後二年近くそこにとどまってもどってきたのだった。戦後の疲弊・混乱した社会と、全財産を満洲に残してきた我が家の状況からすれば、高校から大学へ進学する計画など、どこを探しても出てこなかった。そんななかで父母は、女の子といえども、一生働いて生活してゆけるだけの技術や資格を持つていないと、形のある財産は何のあてにもならないことを戦争という経験を通して知っていた。それ故に、私が大学進学の希望を口にしたとき、父母は短大ならいいと許可を出した。家庭科ならば家庭生活にも役立つだろうという親心を、何の疑いもなくそのまま受けて、長野県立短大、家政科、被服専攻の学生になった。

しかし、その進路選択は誤算であつたと気付くのに、そう長い時間はいらなかった。家政学とは何なのか、お針子のように被服製作に追われる生活でいいのか、自分が本当に学びたいものは、他にあつたのではないかと等々考えたすえ、友人や、先生方に質問を繰り返したが、胸に落ちる答えはなかった。私の家庭科遍歴はここからはじまつた。

（長野県立赤穂高等学校）

児玉澄子がこたえます



中三の息子のこ
とです。精神的

には強い子ですが中一の時いじめに遭い、限界を越していたようです。二年のクラス替え以後、ひどいいじめはなくなり、家では明るさをとりもどしていました。ところが先日、同年の生徒と顔を合わせた瞬間に、顔の相が変わったかと思われるほど暗くなったのを見て、いじめの後遺症に気づきました。学校の中の荒れが以前にも増しているだけに心配です。今後の息子の過ごし方、心の持ち方、親としての対処の仕方をお教え下さいませ。

(芦沢美矢子)

A 親にとって、我が子の苦しむ姿を傍で見ていること程、つらく耐えがたいものではありません。自分が苦しむ方が、ずっとよい。代わってやりたい、何とかしてやりたい、でも、術がない——この切ない苦悶は、味わった人でなければわかりません。肉体的なものであれ、精神的なものであれ、子の苦しみに付き合う親の思いは、筆舌に尽くしがたいものです。心から、お察しいたします。

もし、具体的な手立てが可能ならば、勇気を振って動いてみるのだと思います。学校へ訴え出ること、クラスメートの親御さんに親しい方がいれば、相談すること、担任の先生と膝つき合わせて話してみる——しかし、これは、相手

と、状況を、よく見据え、掴んでいなければ危険です。相手次第では、また、現状が把握できていないと、かえって悪化するかもしれないからです。

次に、消極的な方法ですが、「逃げるが勝ち」もあります。もし、転校が可能なら、それも一策です。私は、息子が小三の時、直ちに転校させてしまいました。それから、「時を稼ぐ」というのもあります。組替えまで、とか、卒業まで、あと少しという時期なら、たとえ欠席が多くなっても構わない、とにかく、時が過ぎるのを待ちます。いかにも気弱なやり方のように、親の側に強い、確固たる覚悟が必要です。

具体策も、逃げ、待ちの策もとれない場合、親にできることは、徹底的に、「子どもと共に立ってやる」ことです。「こうしたらよい」「ああしなさい」と解決策を与えるのではなく、傷つき、不安と恐怖におびえる子どもに現在、じつくりと寄り添ってやり、その気持を共有してやることです。子どもの友人になってやるのです。この、しつちやかめつちやかな、荒地に、何とか生き延びていかなければならない同志として、立つのです。

若い木が、たくましい根を張るための、一大試練です。お母さん、おどおどして、一喜一憂せず、しっかりと足を踏みしめて下さい。「大丈夫、私の子は、乗り越えられる……」と、固く、信じてあげて下さい。

● 政治の目 ●

市川房枝さんの新しさ

湯川憲比古 ●

今年になって、市川房枝さんの映画「八十七歳の青春」を見る機会がありました（私にとつては三度目）。この映画は、もちろん生真面目につくられた映画ですが、なかなかおもしろい映画です。とくに二十八歳の市川さんが、一人でアメリカの西海岸に上陸して、アルバイトをしながら、東部のニューヨーク、ワシントンへとアメリカを横断するくだりは、古さを感じさせない新鮮な感じがします。そして、この新しさは、『市川房枝自伝・戦前編』（新宿書房）を読むと、彼女の思想や運動論が、現在の日本の状況からみて、非常に新しいところからも来ている、と私には思われます。いくつかのポイントをあげてみましょう。

①市川房枝さんはリベラリストであった。御本人は「大正デモクラシーの洗礼を受けた自由主義者」と言われていますが、私は、現在の日本にとって最も重要なことは、このリベリズムの確立であると思っています。

②市川房枝さんは「婦選獲得」（＝女性の権利）のためのロビイストであった。未だ参政権をもたなかった戦前の運動論として当然であったかもしれませんが、もしかしたら市川さんは日本最初の

超党派ロビイストであったかもしれません。この運動論の正しさは「家庭科の男女共修をすすめる会」の運動が証明していると思います。

③市川房枝さんは、政党に対してインディペンデントであった。超党派ロビイストとしては当然のことかもしれませんが、彼女は政党に対して「中立」でした。そして、無所属の女性が、積極的に政治参加をする場として、政党が政権を争う衆議院ではなく、自治体と参議院を重視しました。この方針の正しさは、これから多くの女性たちによって証明されていくでしょう（もちろん政権を争う政党の中にも多くの女性の進出が必要です）。

④市川房枝さんは市民運動家であった。彼女は今から五十年以上も前に、ガス料金の値下げ運動や卸売市場の独占反対などの消費者運動を行い、はてはゴミの減量とリサイクルの問題にまでとりにくんでいます。もちろん全て市川房枝さん一人の活動であるはずはなく、多くの当時の女性たちの運動ですが、そうした運動が全て戦争の中にまぎこまれていく過程も含めて、市川房枝さんの生涯がとりくんだテーマは未だにきわめて新しいと、私には思えます。

● 経済の目 ●

生活サイドから見た経済
現代の貧困 ①

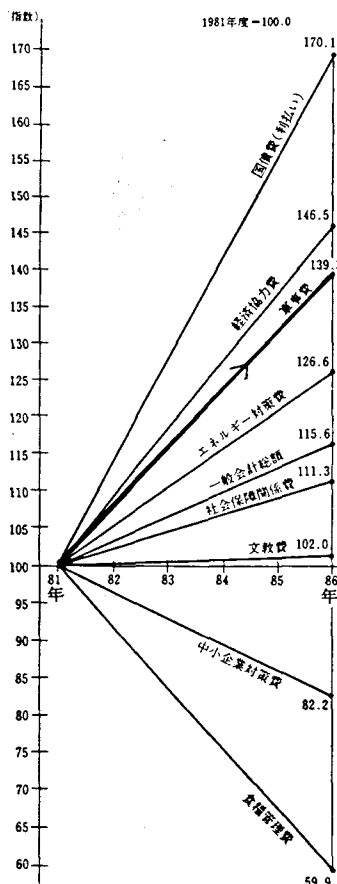
歯止めを失った防衛費

● 福 島 澄 香

防衛費がGNP1%の歯止めを失ったことは危険な軍拡を押し進め、国民生活の貧困化と忌まわしい軍国体制化（秘密保護法）への道を辿ることになる。

今年、室蘭、釜石、八幡の溶鉱炉の火が消され、鉄鋼、造船、炭鉱、国鉄など大量解雇が相次いでいる。関連の下請中小企業、地元の商店街など含めると龐大な失業者が街にあふれ、地域の生活基盤がゆらぎ日本の地域経済が崩されて行く。政府は'87年度予算案で大企業の離職者援助として「30万人の雇用開発

臨調型予算（主要経費の推移）



プログラム」1133億円を計上している。一人当たり38万円弱、二ヶ月分の収入にもならず、防衛庁購入予定のエイジス艦一隻分（1500億円）にも充たない。しかもこの金すら失業者本人には渡らず「雇用創設プログラム」費として大企業の手に残るのではないだろうか。

今年度の防衛関係費は3兆5千億円。GNP1%枠を決めた'76年三木内閣のそれは1兆5千億円、1%枠の中ですら2.3倍も増え、歯止めがなくなることの重大さを痛感する。

国民の生活を犠牲にして整えられる日本の軍備は（表参照）英国の'85〜'86年版ミリタリーバランスなどによるとF15戦闘機88億円80機、P3C対潜水艦哨戒機100億円30機、いずれも米国を除くと世界で日本がトップである。専門家によれば「F15は乗用車で云えばロー

ルスロイス、英国、西独でさえ20億円のF4ファントムでがまんしている。日本の正面装備は超一流とか。これらの軍需品は米国内価格の2倍近い金額で住友商事、伊藤忠など日本商社を通じて輸入され、三菱重工、川崎重工、石川島播磨などで組立て米国、日本の大企業を潤している。

朝日新聞の米国民を対象とした世論調査では日本の防衛費について「今のままでよい」が5割。「増やすべきだ」は2割。レーガン大統領やワインバーガー国防長官の発言は、この2割の意見を代表しているにすぎない。

アジアの中で日本の軍備は飛び抜けて多く、明治以来の日本軍国主義に侵略された朝鮮、中国、東南アジアなどアジア諸国の日本の軍拡に対する危惧の念は極めて強い。

家族を越えたネットワーク

リブセンターの共同生活

● 中嶋里美

二階の洋間がやっと片付いた。

暮から物置き同然の部屋が人の泊れる部屋になった。うれしくて何度も見に行く。重い腰を上げたのも泊り客の訪問が近づいたからだ。

昨夜は風呂場も一ヶ月ぶりくらいで磨き、すがすがしくなった。一日も早く来て欲しいという気になる。

一九八五年、私はナイロビから帰ってきて「もっとお互いに家を解放しよう」とWe誌上に投稿して、多くの方々からの反響をいただいた。西独でみてきた共同体に一層の刺激を受けてのことだが、人間の新しい暮らし方にはずっと以前から興味があった。

今の「女たちの映画祭」などの事務所が新宿リブセンターだった頃よく行った。一九七〇年代の初めである。お昼頃うかがうと「玄米食」がちやうど出来上がったようにして、私もごちそうになったことがある。運動をしている女たち十数人が共に食卓を囲むと一層活気が出てきた。その頃リブセンターの人たちは洋服も共有していた。でもある人の持ってきたものが、その人の一番大切にしている物だったりすると借りる時はかなり神経

を使うということだった。

リブセンターを作って共同生活を始めた理由の一つは、お互いに議論が白熱してきても、夜もふけてきたので帰らなくてはと一人一人が別々の所にもどらなくてはならないのが惜しかったからとのことだった。私もその頃あちこちの議論に加わり、そのまま泊めていただいて職場へ直行したこともよくあった。いつもと違うルートで通勤するのは実に新鮮だった。

以前私は一体自分はどんな生活形態が一番好きなのか自問したことがある。するとこんな答えが出た。「毎日違った人たちと出会い、語り合い、何かを作りあげていくこと、泊る場所も毎日変わってもよい」というものだった。変化を求め動きまわっていたいということだが、出来るだけたくさんの同志に出会いたいという気持ち強い。たしかに自分を生んでくれた両親、共に育った姉妹兄弟がいるが、残念ながらそれは自分が選んだものではない。その関係がいいものであればそれでよいが、悪くしても悲観する必要はないと思う。それぞれ自分の思想を形成した場所が違うのであるから。

すつぱりと家を
出られるかな

店々の間にあつて、不動産屋の外観は店頭のくせして飾りが一個もない。貼紙越しにも楽しそうなモノは全然見えない。地味だ。そんな所とは、私に限って一生関係ないに違いないと思ひ込んでいた。

が、遂に訪ねる日が来たのだった。「あのう、私は部屋探しというのは今で初めてなんです、へオヤー↑↑（コレは業者の反応である。）…えと、広さは六畳位の部屋と、へまあー↑↑トイレとかお風呂も付いてて、へあらま」…できれば月5万円台でおさえ

たいんです。へアラアラ…場所は北口方面で、へおやまあ…私、自転車に乗れるから徒歩で駅から遠めでもいいです。へはいはいッ」。

この商売は学生によく会うのだ、と実感できた。おばさんとの最初のやりとりで一氣にリラックスできたもんな。

数軒目、私の部屋が見つかった。

契約書類には、本籍地から父親の会社名まで書く欄がある。自分の情報は大切だと思う。私は私そのもので証しだと思う。でも説明によれば、警察の犯罪捜査に協力する義務を負ってしていることらしかった。

敷金、礼金、家賃の用意を今までアルバイトして貯めてきてるし、親に今後のフォローを自分から求めているから、やたらと「お父さんの承諾」を連発されるのが気になった。それに、私の親は母と父で1セットなのだ。母も保護者（私ってまだ未



青春ふりかけ せじらふに

成年なのだわ」だと言ったら、収入のない親はこういう時、あんまり重要じゃないそう。若者としては、一人立ちへの第一歩に関わる人には「両親とも信用するもの、But…」と含みのある言い方をして欲しかったな。

すつぱりと家を出てしまおうが当初の計画であつた。でも実際、これから学生になる身では家賃までしか調達できない。抵抗があるけれどそれを認めて、学費と、在宅でもかかる支出くらいの手当は親から受け取るの…（あーあ）。でもそれは、今の年齢なりの「親の娘」としての面の出し方でもある。きつと、新人類二世たちとの出会いの中に過去の矛盾や抵抗感を清算する場面がある、と考えるしかないような気がする。ふと子持ちを夢見たりもしつつ、安い冷蔵庫と洗濯機にも限りなく憧れてしまう春なのだった。



今月の読書から

半田 たつ子

96頁に納まり切らない内容のために、うれしい悲鳴をあげながら、やむなく読書の頁を割愛してきて半年。この間、すばらしい本の出版が続き、もうがまんできなくなりました。旧刊も混じえながら、新学年の出版に際して、ぜひおすすしたい本九冊。

ミニ紹介ですが、お許し下さい。

▼登校拒否を考える会編『学校に行かない子どもたち』

(教育史料出版会 価一五〇〇円)

「登校拒否」を、今の教育状況における子どもたちの人間的表現と受けとめ、専門家に治してもらおうでなく、親子で乗り越える。こうして道を切り開いてきた人たちが、子どもが不利になることを恐れて学校にこだわり、ゆれ動く親に、体験をもって語りかける。学校呪縛からの解放を、裸の生命の輝きを「存在しているという価値」を大切にしよう、と。

▼佐々木賢・松田博公『果てしない教育』

(北斗出版 価一九〇〇円)

教育に関する誰のどのような言説も何らオリジナルなものでなく、現代思想のさまざまなに交錯する領野との共鳴性の下に、語り、語らされているにすぎない、と松田さん。その認識を共有しながら「教育」から無縁な広々とした野へ出ようと。新鮮で刺激的な対話。

▼俵萌子『俵萌子の教育委員日記』

(毎日新聞社 価一二〇〇円)

俵さんが中野区教育委員の任期を終えて二年、今ごろ紹介するのは遅すぎるが、Weの読者会で「教育委員準公選」に取り組む方たちが現れた今、再読してまた力づけられた。「教育からの世直し」に賭ける俵さんの情熱は、今、女性民教審で燃え続ける。

▼小浜逸郎『学校の現象学のために』

(大和書房 価一五〇〇円)

学校、教育をめぐる諸問題は「学校という場が本来的にもっている古典的な様式に、現在の社会や文化が作り出す新しい生活感性が無理矢理はめ込まれるところに生ずる軋轢にほかならぬ」と喝破。論よりも、まず現象があるがままに見る力が必要と痛感させられる。

▼小沢牧子『子ども差別の社会』

(労働経済社 価九八〇円)

静かなけれど説得力ある小沢さんの語り口そのままでの文章。たとえば「身の丈の楽しみの深さ」の項など、うれしくなってしまう。女の言い分が一応の市民権を持ちつつある今「最後の被差別者」子どもへの熱い連帯を呼びかける書。ともに元気になるうという書。

▼永畑道子『女感覚で生きる』

(新評論 価一五〇〇円)

流麗な筆致で厳しく生を問う永畑さんは、こう記す。「家庭科は、まさに人間関係学科ではないかと、私は思う。人と人とのかわり、男と女、家族、兄弟、愛のさまざまな形、そしてもっと広く、地域、社会、世界につながる人間同士の愛情を論じ(略)子どもにとって何よりも心の孤独を救う場所になるだろう」。

▼干刈あがた『おんなコドモの風景』

(文芸春秋 価一二〇〇円)

胸の中を緑の風が吹き抜ける爽やかな読後感。ただ一人の目蒲線愛好会会員という著者。私もその沿線の生まれ：あら、私の名が出てきた。84年四月号の原稿依頼の折、干刈さんにお知らせしたいちよつといひ話を書いた。それに深く感受されたとかわかって感動。

▼早川裕子 グループわいふ『ルポルタージュ進学塾』 (有斐閣新書 価六九〇円)

今焦点である中学受験用進学塾について、塾も学校も個人も実名で書くその潔さに敬服する。小浜氏のいう「現象をあるがままに見る力」が、ここにある。それにしてもなんと異常な現象。小沢氏が唱える「元氣」とは別種の力をふり絞られてゐる子どもたち。

▼黒岩秩子『続お子育て』

(教育史料出版会 価一二〇〇円)

双子を含む七人の子どもたち。黒岩さんの子育てを支えたおばあちゃんの死は、家族全員に深いものを刻んだ。スゴイのは厳志君の成績が上がった時の黒岩さんの言葉だ。「厳志は成績がよくなってうれしかったかもしれないけれど、ほんとうのことをいうと、お母

さんはちよつとがっかりしてゐるんだ。学校の成績なんていうのは、やるのが早いか遅いかとか、どれだけたくさん暗記できたとか、人間にとってあまり大事じゃないことばかりはかっているように思うんだ。だから成績のよくない厳志が、もしかしたら人間にとっていちばん大事なものをつかんでくれるんじゃないかって期待してたんだよ」。

と

ひ

きり絵の
金子静枝さん



今月から表紙裏にきり絵が登場。絵と文の作者である金子静枝さんを、三鷹市上連雀のお宅におたずねしました。二月というのに、春のようなポカポカ陽気、心地よい緑側で話をうかがいました。

——いつ頃からきり絵を？

「美術学校の西洋画科を出まして、両国にある大和刺繍院にデザイナーとして就職しまし

て、刺繍デザインと型彫をしておりまして。

刺繍やアップリケのデザインに、花や動物などの絵を図案化し、さらにこれを切りぬいて型紙をつくります。この型彫の技術を生かせないかときり紙を考えました。もう二十数年前になりますか」

——ワー、すごいキャリアなんですわね

「きり紙の実用化をはかるため、つい立、屏風、カードなどを作ったり、'65年にはアンデパンダン展に初めて、きり紙を出品しました。きり絵という名称でよばれるようになったのは、'70年頃からです。'78年には、日本きりえ協会も設立され、新しい絵のジャンル名として呼ばれるようになりました」

——個展、美術展出品の他、新聞、雑誌、書籍の仕事を手がける一方、きり絵教室の講

師もなさっていらつしやるとか

「'70年に地元三鷹市で、きり絵グループ静和会が発足、現在も活動しております。子どもたちにも教える機会がありますが、表現が豊かで、とても楽しいですよ」

金子さんの作品の一つに「きり絵でつづるある夫婦の戦後史」という本がある。静枝さんがきり絵を描き、夫の徳好氏が文を書く。

東京大空襲から始まり、ベトナム戦争に反対し、『アメリカはベトナムから手をひけ』のゼッケンを八年間つけ続け、一人でデモをした夫と、家族の記録がつづられてゐる。一枚一枚のきり絵が、ドラマチックに語りかける。

「来年は、個展を予定していますので、今は制作準備中」とか。誌上でもお知らせしますので、お楽しみに。

(青木)

地域とともに

家庭科を創る

—佐川加寿子さんの授業—

半田 たつ子



二月十三日、再び火の国へ。呼んで下さったのは、高教組女子教育問題推進委員会だ。空港から会場へ急ぐ道、昨秋、黄金の稲穂が波打っていた田園に、ビニール・ハウスが延々と続く。さみしい。

この週の初め、新潟に行った。やはり高教組主催の学習会で、いま、男性教師を含む他教科の方たちが、共に家庭科について学ぼうと意欲的なのはうれしい。熊本は、京都・長野と並ぶ先進県だ。女子教育推進委員会の中に「家庭科検討委員会」を設け、ここ三年、特に精力的に取り組んできた。私の話の後、A B二つの分科会で立山ちづ子さん、長谷川啓子さんが模擬授業を行う。教科を越え、男女で討議し合う姿に、確かな積み上げを見た。

有志の懇親会では、十二年前の国際婦人年に訪れた折や、月刊「家庭科教育」時代に出会った方たちと旧交を温め合う。それぞれがあれから今日までを語り、心とむ早春の宵だった。

今度も泊めていただく桑畑美沙子さんの家で、洋一郎君がまっ先に「ほら」とさし出したのは、コップに挿したふきのとう。夏のフオーラム連続参加の彼は、夏休みの日記に「ウイに行ってきました」

と書いた。ウイの仲間と自ら任じ、みつけたふきのとうで私を歓迎してくれたのだ。読者の須藤久仁恵さん、立山さんのお母様、啓ちゃん、にぎやかなまどいに、ビニール・ハウスのかげりが飛ぶ。

翌朝、甲佐中学校の佐川加寿子さんの授業を見せていただく。急なお願いだったのに快く応じて下さった。三年、男女共学「保育」、今日のテーマは「母性保護」。生徒たちには迂遠な話である。しかも目前に高校入試。それなのに生徒はよく授業に食いつく。

「前の時間に読んだ藤田健次さんの『看護婦のオヤジがんばる』を思い出してみよう。著者は何を訴えたかったのだろうか?」。佐川さんの問いに、「日本は他の国に比べて、保障が低い」「世の中のしくみが働く人にとってあまりよくない」とだと答える。何れも男の子。各国の出産休暇と賃金保障、妊産婦死亡率の国際比較、女子の年齢階級別有業率などの図表の読みとりでも、次々にあてられる男の子・女の子が、口はやや重いがちゃんと答える。「日本は他の国に比べて保障が低い」「どの国も死亡率が減っているのに、日本はあまり減っていない」「結婚・出産でやめるのだと思う」。佐川さん「犬の子みたいに赤ちゃんペロツとうんだら、そのままにしておく」とね。「ああ、育児も」と首をすくめる女の子。

佐川さん「なら、なぜまた働きなさるとね」。男の子「子育てにお金がかかるから」。佐川さん「じゃあ、また働こうとした時、どこでも雇ってくれなはるか」。女の子「銀行なら雇いはらん」。こういうやりとりが続く。熊本弁を上手に紹介できたらしいのに。パートやアルバイトという雇用形態が、働くものにとっては働きにくく、雇う者にとっては都合がよい、ということも探して、全国と熊本、男子と女子の賃金格差もみつめて、あつというまに、授

業は終わった。

佐川さんは、産後休暇が六週から八週に延びたのは、私たちが闘ってきたからだと言説し、スウェーデンの出産休暇もきちんと考えさせたかった、と。確かに、計画には「働きよい世の中を作るために、先輩たちの闘いに学ぶ・働き続けること」とあったが、そこまで進まなかった。しかし、さすがベテランである。

「なぜ、この生徒たちは、先生の問いに一生懸命答えるのだろうか？」何年前か前には疑問にさえしなかったことだ。でも、この号のための調査で、二四二二名の声に接していた私には、最も解きあかしたいことだった。中学生が先生について語る言葉の汚さ。敵意まるだしで、人間的つながりをプツツンと断ちきるさまに、胸が冷えていただけに、甲佐中の生徒たちには、洋一郎君の「ふきのとう」のように心柔ぐのだ。でも、なぜ？

佐川さんは「家庭科は人権学習です」と言いきる。この教科観とそれを生んだ背景を聞こう。

「私が甲佐中に来て六年になる。ここでは、81年から一、二年共学、82年から完全共学に踏み切った。校区には同和地区がある。生命と生活にかかわる科学や福祉を学ぶ技術・家庭科教育で、部落の子、課題をもつ子を中心に据えた授業を創造したいと、技術科教師と意志統一し、職員会議がこれを了解して実現した。私はせっかちで短気。子どもを変えよう変えようとしていた。けれども複式授業を受けもった時、わからないのが当たり前とわかった。サークル活動を始めて十五年になる。ここで仲間とともに学んだことと、同和地区のお母さんたちによって鍛えられたことで、ようやく自分がどう変わるかが問われるのだと気づいた。自分のいる場所で物を言おう、

と心に決め、九年前前任校で、熊本で最初の完全共学を実施した。今私は人権部会で、平和・公害・性・同和に取り組んでいる」。

ところが、佐川さんのお相手の技術科教師が転出し、後任は頑なな共学反対論者だった。熱心に話し合ったが、根本のところ考えが違うので暗礁に乗り上げてしまった。その時、佐川さんと共に学習してきた母ちゃんたちが起ったのだ。

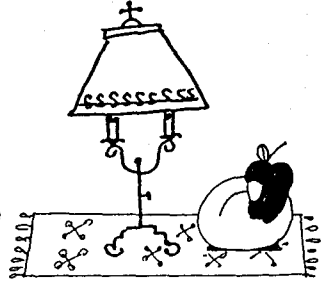
「それは差別じゃなかね。私たちは部落にくらして、差別をうけ続けてきたし、女として生まれて、やりたいこともやれなかった。これからは女も男も同じ力をつけて、自立する人間に育ててほしい。部落の子は差別に負けてしまっている。本物の学力がついたらんけん弱か。もっとたくましく生きる力もつけてほしい」「先生はなんね、解放センターでは男女は平等、女性にふりかかる差別とはいっても聞うなんて、私たちにはかっこいいことばかり言って、どうして共学の必要性を男先生にわからせきらんとね」。

母ちゃんたちも、校長室で再三訴えた。こうして甲佐中の男女共学は続行した。

授業のあと、桑畑さん、立山さん、熊大の学生さんと、有機農法に取り組む緒方意一郎さん一家を訪ねる。桑畑さんは二・五センチの洋一郎君の長靴を用意してきて、豚小屋を回る私に貸してくれた。創意くふうにみちみちたその農法を紹介できないのは残念だ。毎週火・水はハム作りと聞き、立山さんは来週末ますと約束する。次に、82年七月号の後藤已枝さんの実践を生んだ、坂本製油店を見学。写真で見たなつかしい機械が目の前で動いていた。

地域とかかわり、地域に学ぶ、地域に支えられて家庭科を創る――熊本サークルの着実な歩みと豊かな人脈は、家庭科の希望の星だ。

Weの読書会だより



〈We埼玉の会〉

◆一月十八日(月)改築された岩場さんのお宅で開かれました。木の香りも新しく、輸入のカーテンや応接セットの見事な豪邸で、話合いもとてもはずみました。

昨年の十二月号で暉峻淑子さんが書かれていた「西独と日本―平和と教育を考える」が先ず話題にのぼり、どうしたら日本の学校ももっと討論を多くすることが出来るのか、どうしたら自立した成熟した人間を生みだせるのかに話が向かいました。一クラスの人数を減らすのは当然としても、教師自らがもっと豊かな自己表現が出来なくてはかえって管理がすすむのではないか。親も子を持つ以上どんな子に育てたいかをはっきり持つべきなのに、小学校のPTAの席などではあまりにも

自らの考えをもっていない親の発言にガク然とする。岩場さんの勤務している成蹊高校にカナダからの留学生がきているが、日本の高校生は授業中になんとうるさいのか、先生方も見て見ぬふりをしていると批判的だ。どんな所へ出ていっても通用する人間を育てたいものという結論になりました。

最後に一人一人の今年の抱負を語り合いました。仕事に励み、他の人との横のつながりを広げていきたい(村岡)、ゆとりのある生活を目指していきたい(平尾)、やらなくてはならない問題はたくさんあるが人間関係を広げていきたい(岩場)、針灸学校でさまざまな人に出会えて充実している。体について学びながら将来の計画を立てていきたい(仲西)、海外へ出来るだけ多く行き、将来自分が一番住みたい国をさがしたい。娘と一緒にピアノを習って発表会に参加したい(錦)、韓国の代表という気持ちでいろいろな所で自分の意見を述べていきたい。話すことよりも良き聞き手になりたい(天野)、今年の統一地方選では出来るだけ多くの女性が当選するよう協力していきたい(中嶋)。

次回は三月二日(土)、一時半〜錦真理宅

(中嶋里美)

〈We千葉の会(仮称) スタート!〉

◆一月二十四日、市川市の市民談話室で第一回の会合をもちました。調布からかけつけて下さった半田さん、「田無の会」西内さん、ありがとうございます。

明日は、「ケツコン式」だという発起人、横山れい子さんの冗談ともれないその発言に一同びっくり。

あれは、暮れもだいぶおしつまった夜半。電話が鳴って、声の主は以前夏季フォーラムで会ったことのある横山さん。

「あっちこっちの会合もいいけれど、市川に帰って来るとないんだワ。私の住んでいる所での活動が。考えちゃったわ。ネットワークがつくりたいのよね」

「そう。うん。じゃやりましょうか」

というようなわけで、お集まりいただいた方々との話し合いは、かけつけた新邸さん(横山さんは、明日本当にケツコン式だった)

も加わって閉館時刻の夜九時まで続けられました。後日、「充実していました」というお便りも舞いこんで、「テーマなんか、ない方がいいかもしれないわよ」というご意見をいただいたり。次回は、三月十四日。

記念すべきスタートの会に集まったのは、

前記の方の他、斎藤収二さん、山本栄子さん、吉岡佳夏さん、黒部澄子、子ども三人でした。お仲間がふえますように。これから先は、奇数月の第二土曜日。午後三時から。国電本八幡駅北口下車一分。市民談話室で。連絡先 横山れい子（0473・37・2366）（黒部澄子）

《We愛知の会》

◆オメデトウ 五年目にはいりました！

一九八三年一月に産声をあげて以来、発足した年は、教科書問題について、ステキな人にお願ひして話を聞いた。

次の年は、家庭科の小・中・高の教科書調べをやりながら、84年六月から開かれていた「家庭科教育に関する検討会議」に、男女共修家庭科の必要性和家庭科という教科の重要性を訴えるために、はがきつきリーフレットを作成し、多くの人に配った。またそれに先立って、県下の家庭科教員に「高校家庭一般が選択になってはたいへん！」というピンクのビラを郵送した。子守り、いや、子どもに遊んでもらいながら、切手はり、ビラの封筒づめなどの作業をしたことが思い浮かぶ。

昨年九月は「みんなで思いっきり家庭科し

ようかい」の集会をもった。現在は、その「みんなで思いっきり家庭科しようかい」新開つくりにはげんでいる。

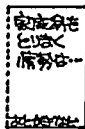
教育課程審議会の間まともで、男女共に家庭科を学ぶことがはつきりきまった今、これからやることは何か？ 家庭科の質的転換である。

例会は（この号の発行前にすんでしまっているのだけれど）二月二十一日（土）と、三月十四日（土）、二時～四時。どちらも名古屋

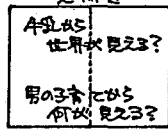
図 家庭科（ピン）プクリ進捗状況

最初のころは ほんとにできるのなと不安だったのですが
なんとかなってきました。4月発行予定。

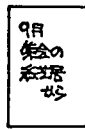
大きな（ピン）プクリより新南です。（許敬・巨勢がまだ決定）
密閉を横にしたような形になります。（わだんは教科書）



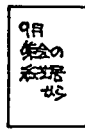
(4)



(3)



(2)



(1)

屋勤労婦人センター3F、グループ学習室。今からでも、仲間になって下さい。

連絡先 412・9583 宮崎世津子
または 935・5318 山田和枝
(宮崎世津子)

《We東久留米の会 スタートしますよ！》

◆東久留米では「教育委員会準公選制」の問題を柱にして、学習と討論をしていく会にしたいと思っています。私の住む滝山団地に、Weの読者をもうひとり得て、三月に準備会を持ち、四月に旗上げします。

近くの田無の会の姫野さんとも話し合いましたが、田無の会も「準公選」で一年やってみることになりそうです。三月に共同でやってみて、四月以降は、一か月ごとにずらしてやり、応援し合おうということになりました。

すてきな仲間が、団地にも何人もいます。お近くの方、ぜひいらっしゃって下さい。

第一の会は、

四月十六日（木）前10時～12時

東久留米市滝山団地二街区集合所

問い合わせ先 0424・73・0901

(西内みなみ)



私

あなたに

◆高校で化学を教えています。学校という教育現場にあって、教科を通していったい何を教えるのか、また生徒の日常生活にあまり役に立ちそうもない教科内容を何故教えるのか、教えるって一体どういうことか、こういう疑問をずっとかかえて来ました。そして化学を教えていながら、現代の科学のありかたに、また教育のありかたに疑問を持つようになりまして。この疑問は、社会構造全体にまで広がって行きます。私たちの社会が効率を優先させ、分業化を進め、物質的豊かさだけを求めて来た結果、人間関係がずたずたに引き裂かれ、いろいろな歪みが生じている、というように現代社会をとらえています。

そうしたなかで、自分と教育のかかわり、化学とのかかわり、そして自分の生き方も含めて、もう一度自身の生活を見つめ直そうと思ひ、いろいろな試みを開始しました。そのひとつとして、畑を借りて有機農業を始めた（昨年の秋は大豊作でした）、Weの集いに

参加したり、地域で「登校拒否を考える」という父母を中心とした教育懇談会を主催したり、女性を市議に送り出す会を発足させたり等々……。

しかし、何といつても自分の仕事は教育現場にあり、日々の授業を無味乾燥のままにしておくわけにはいきません。そんな思いから、教材としてできるだけ身近なものをとりあげ、生活に密着した化学を教えていこうと考えました。できればそこから現代の社会構造が少し見えてくるようなものを扱っていきたいと思っています。

その第一弾として、先日の化学の実験では豆腐作りを行いました（これはれっきとした化学の応用なのです）。きざみネギ、おろししょうが、かつお節、割りばしは各自好みに応じて持参、できあがったあとはもちろん試食会です。たいへん好評でした。添加物なしの出きたてですからまずいわけではないのです。続いて第二弾は各種ジュース・炭酸飲料の

pH（酸・アルカリ度）の測定実験です。色の濃いものはダメ（実験上不都合）ですが、各自好みのいろいろなジュースが集まりました。実験には10ccしか使いませんから、もちろん残りは各自おいしく全部飲みほしました（ちなみに、本校ではカンジュースの校内持ち込みは禁止になっています。でも今回は教材ですから誰からも文句を言われる筋合いはないのです。生徒のうれしそうな顔が想像できますか？）。

現在、進行中のものはもう少し化学的に専門的なものをやっています。金属イオンの分析実験です。七回程の実験シリーズでやって行くのですが、最終回が圧巻！ どんなイオンが含まれているかを当てさせるのです。一番早く、正確にできた班にはケーキが進呈されます。どうも飲み食いの話ばかりになってしまいました。これはもう少し発展させて、近所に流れる川の水の分析や土の分析にまでもっていく予定です。

こんなように、生活に身近でそして楽しく、ちよつぱり我々の生き方を考えさせるような授業にして行きたいと思っています。ただ、まだまだ教材不足ですので、どなたかこのような生活に密着した教材を教えてください

きたいと思います。そして、公害やら薬害が

騒がれている今日、水質検査、食品分析、洗剤等の各種試験も行っていきたいと考えています。高校の実験室規模でやれる実験項目や方法を教えて下さい。将来、高校の実験室が地域の分析センターとしての役割が果たせる程度にまでもって行きたいと考えています。

化学を生活と結びつけていくときに、どうしても家庭科という教科に関心がいきます。そこで家庭科との接点を考えざるを得ません。家庭科を生活の科学あるいは市民の科学と捉えると、化学と家庭科の共通する領域はいくらでも広がっていくように思われます。

このような視点から、私たちは今年から、家庭科の教員と化学の教員とが集まる研究会を発足させました。月に一度の定例会をもつのですが、この会がどのように発展していくか、Weの読者の皆さん期待してして下さい。

一月の例会では「石けん・クリーム」がテーマでした。二月は「残留洗剤ABSの定量分析」の予定です。

〈連絡先・〒350-13 狭山市上広瀬259の1 つつじ野団地4の16の708 小平陽一〉

◆子供との会話

—小3男子、食後の食器洗い、母親食卓—

母 お母さんが子どもの時、母さんは買物係で姉さんはお米洗いだったわ

子 おじちゃんは何？

母 男やからやらんでよかったの

子 何で男やったらやらんで良いの？

母 ぼくなんか、一生けんめいやっているのに

母 日本はね、男が台所の仕事をするのは、

はずかしいことだと言われてきたの

子 ずつと昔から、引きついである生活のしかたがあつてね

母 きまりなんか？

子 ちがうけど

母 じゃ、法律なん？

子 ううん、生活の習慣、ならわしと言うのかな

母 ふうーん。何でやろ

子 原始時代って、聞いたことあるでしょう

母 原始時代はね。女の人は、子どもを生むという大切なことをするので、太陽とい

われていたの

子 わあー。すごいな！ 本当の太陽の次の

太陽かな？

何でかわったん？

母 人が、だんだん固まって住むようになると、近くで採れるだけの食物では足りなくなり、遠くへ、食べものをさがしに行くことになったの。道具をつくり、狩り

もするようになり、皆の食物をもち帰る

人の力がだんだん強くなってきたの。女

の人は、子どもをだっこしたり、お乳を

あげたりして、主に男の人が狩りに行く

ようになったの

子 べつに女の人も行ってもええのに……

母 今ね、結婚して、女の人が仕事をしたく

思っている、相手の男の人が、女の人に、

家にいてほしいという人が多いの

子 ボクやったら、お仕事に行つてって頼む

ね！

母 どうして？

子 だって、そんなん、一人やったら、つか

れるし、早く死んでしまふし、二人やっ

たら力もそんなんに出さんでもええし、何

でもできるし……。平等にできるもん

母 どうして、そう思ったん？

子 そんなん、あたりまえのことや

(長岡京市・福島美津子)

泉

情報の頁

◆ご入会どうぞ◆

“授業づくり部会”

「わかる授業、楽しい学習を創りだすために
どのようにしたらよいかを追求します。」

一、具体的な教材や授業を素材にし、すべての
教科にわたって研究をすすめます。

二、一つの理論や立場を絶対化せずに、さま
ざまな考えを交流しあいます。

三、自由な発想にもとづき、時代の要求に応
えた新しい教材文化を創り出します。

部会では、会員の研究交流の場として「授
業研究通信」というニュースレターを発行
します。会員の研究成果は、著書やパン
フレット、論文などで発表します。今年六
月には研究成果五冊が出版予定です。

「家庭科」はこの部会の一大勢力ですが、

読者の中には多様な発想、アイディアをお
持ちの方がいらっしやるでしょう。ぜひご
入会下さい」
(西内みなみ)

・年会費 二四〇〇円

・連絡先 〒113東京都文京区本郷7-3-1
東大教育学部 藤岡信勝気付 教科研授業
づくり部会

“喫煙と健康女性会議”

子ども、老人、女性など社会的に弱い立場
にある人々の健康を受動喫煙の害から守る
こと、喫煙開始前の小学生・中学生の禁煙
教育の必要性を訴えて、'86年11月9日結成
された。今後「女性の喫煙者の増加をくい
止め、0%」を課題に、情報提供とキャ
ンペーンを行う。

・入会金 五〇〇円

・仮事務局 〒158東京都世田谷区上用賀4-
3-8 北沢杏子方 ☎03-56-5969

“エルザ自然保護の会”

・『野生のエルザ』の著者ジョイ・アダムソ
ン夫人の来日を機に、'76年、「自然保護を
より広く、より多くの人の手によって」自

然保護は身近なことから」と設立された。

自然と人間の調和が達成されたら廃刊しよ
うと十年前に創刊された会誌『自然を愛す
る人々の雑誌ELSA』では、日本を禁猟
地にという問題すら真剣に討議されない現
状を嘆いている。

・入会金、一般会員年会費各一〇〇〇円

・事務局本部 〒305茨城県筑波学園郵便局私
書箱2号

◆本ができました◆

『いじめ・いじめられて 非行克服現場から
の報告①』 全国教護協議会編

・児童福祉法に定められている教護院は、不
良行為をなした一八歳未満の児童を入所さ
せ、性向を改善し、将来健全な社会人とな
り得るよう教護する施設。現在五七の施設
に約三〇〇〇人の児童が教護職員と共に生
活している。本書では、全国の教護職員二
一人が、児童やその家族との状況を具体的
に綴り、いじめ、情緒障害、暴力など個別
の事例ごとに対応方法を紹介している。

・A5判 236頁 価一〇〇〇円

・発行所 全国教護院協議会 〒528-02滋賀県
甲賀郡土山町大野283-20

30 電話92—501—6419

『あしたへつなぐ——丸刈り訴訟に学んだもの——』 熊本本の女達の輪を広げる会

・熊本本のいろんな立場、考えを背負った女達が集まり、行動し、考え込み、共に生きて六年たった。『教育』に目を向けて、土野優さんの闘い——頭髮訴訟——を支援するなかで、熊本本の現状、日本の現状が見えてきた。だが闘いを支え切れなかった反省が、更に大きな輪に発展することと思われる。

・B5版 134頁 価八〇〇円

・連絡先 〒802熊本市帯山一丁目37—2—407 須藤久仁恵

『担任からの便り』 長瀬泰信

・筑紫中央高校に赴任以来出し続けてきた学級通信の七年分を縮小して自費出版した。高校で学級通信を出している例は少ないが、生徒が家で話をしないのが、発行の理由。思ったことを綴り、イラストを描く。

見出しは『厳しさを選べ』、『苦しみが大きいほど喜びも大きい』、『夏を制する者は入試を制す』など。しかし、『受験勉強に縛られず青春をおう歌してほしい』が本音だ。

・B4版 182頁 価一八〇〇円

・連絡先 〒816福岡市博多区麦野三丁目8—

◆冊子ができました◆

『準公選制による身近な教育委員会の実現を』

教育委員の準公選をすすめるための全国連絡会編

・「教育のなかの切実な問題を解決していくための有力な手段として、地域住民が教育意思をもち、教育行政に鋭い目をむけて、やらなければならぬことを考えよう」と呼びかけている。

・内容は、教育委員会制度、「準公選」と「任命制」、中野区の「準公選」、中野区の「教育委員候補者選び区民投票」、全国の「準公選」運動の広がりなど。

・32頁 価一〇〇円 送料七〇円 ウイ書房

にもあります ・連絡先 〒182調布市緑ヶ丘2—18—22 前橋弘子方 ☎03—300—3226

『コマーシャルの中の男女役割を問う直す会報 No.4』

・内容 テレビコマーシャルコンテスト結果報告、企業からの回答、小特集・亭主元氣で留守がいい？ 等々。

・B5版76頁 六〇〇円 送料一部二〇〇円

・申込先 〒560高槻市天川新町14—11 小川真知子

◆お願いします◆

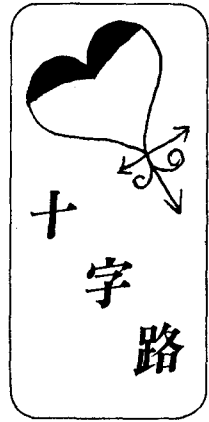
「国会では、専業主婦控除」「特別養子制度」等、家族の強化を狙う政策が議論されています。専業主婦控除については、乳幼児や老人を抱えて働く女性も家事を負担しているのに考慮されていない。特別養子については独身者にも養親となることを認めるかが問題点です。もう一つ、あなたの支持する政党に女性公認候補を立てるよう働きかけて下さい。読者のみなさん、内閣総理大臣、国会議員、都道府県知事や、新聞社、放送局へも投書や電話で働きかけて下さい！」（安東尚美）

・連絡先 〒614京都府八幡市八幡土井102—5

安東尚美 ☎073—982—9123

◆ぜひご参加ください 両方とも四月四日◆

・家庭科の男女共修をすすめる会、総会ならびに情報交換と討論（コンピュータ講習について）、午後一時半から、婦選会館（新宿駅南口）・女性民教審の教育改革提言、長時間討論、午後一時半から、新宿区婦人情報センター（都宮新宿線曙橋下車三分）



●北海道 だれかが救えなかったか餓死の母親 (朝日1/25)

二十三日札幌市白石区の母子家庭で、母親が三人の小・中学生を残して餓死した事件で、福祉事務所の対応が問題となり、市議会厚生委員会でも取り上げられた(同紙29日付)。市の白石福祉事務所によると、「昨年十一月に母親の友人からケースワーカー派遣の要請を受け、話し合ったが、体が悪い様子もなく、若いので職に就くよう勧めるとともに、別れた前夫と養育費について話すよう説得すると、本人も納得して帰った」という。昨年十二月、カゼをこじらせて寝込んでから五十日余り、家にひきこもったこの母親を救う手だてではなかったのだろうか。(高橋芳恵)

●群馬 国家秘密法に反対 (朝日1/20)

同法を市民がどのように受けとめているか読者に投書と呼びかけたところ、そのほとん

どが六十歳以上の人からで、暗い時代の実体験を基に「なぜ今必要か」と同法反対を訴えている。

(林田初恵)

●千葉 “忙しすぎ” 悩む小、中校先生 (朝日1/20)

市教育センターでは、教育課程改善の資料にするため、教師八百三十八人に生活実態と意見を聞いた。その結果、まず悩みとしては、「毎日が忙しすぎる」との答えが六六・四%(三十代後半では七四・八%)でトップ、次いで「会議や打ち合わせが多く自分のやりたいことができない」(五三・六%)「指導技術の不足」(三三・二%)の順。(木田直子)

●埼玉 共に生きる場「よろづや」さん五年目 (埼玉1/17)

「よろづや」が新座市の新座団地近くにできたのは82年9月。無農薬野菜や安全な生活用品を、障害者と健常者がいっしょになって売る店としてスタート。当初予期していなかったお年寄りの積極的な参加もあり、地域の中でお店も定着してきた。

(内村千代子)

●静岡 女子社員の再雇用制度導入 (朝日12/20)

ヤマハ発動機は、十二月から女性社員の再雇用制度を始めた。結婚や出産などで退職し

たが、「子どもに手がからなくなったのでまた働きたい」という人を登録し、雇用を確保しようとする試みだ。対象は、勤務三年以上、退職後十年以内の元女性社員で、年齢制限なし、本人の希望で正社員、パート、在宅勤務のうちから選択でき、職種も事務から製品組み立てまで幅広い。同社の従業員は約一万人、うち約一割が女性で、平均勤続年数は約六年。退職した元社員から予想以上の反響が寄せられているという。

機会均等法で「努力義務」となっている再雇用制度は、特に製造業界で取り組みが遅れている。が、「子どもの手が放れたので」という再就職は、パートか在宅勤務(内職)がせいぜいで、従って単調で低賃金の仕事を経験ある女性で支えさせられることになるのでは???

●長野 共学家庭科資料集、自主編成(信濃毎日2/9)

県高校教育文化会議の家庭科教師たちが、共学を前提とした質の高い資料集を毎年、独自に編集し続けて、ことしで十九年目。今年は特に、乳幼児の発達と保育に力点を置いて、発達の科学と子育てのあり方を提示しているのが特徴。「現代は、子どもにとって好まし

い保育環境が失われてしまっている。子どもの発達という視点から、今こそ保育環境を見直し、充実させたい。次代を担う高校生たちもぜひこうしたことを理解してほしい」と、編集委員会の小林いし子委員長（長野市皐月高校）は話している。

（宮崎春美）

●愛知 学校給食に「わが家の味」（朝日1／11）

豊橋市教委は、家庭料理を学校給食に採り入れようと、小・中学生が母親と協力してつくることを条件に、募集したところ、五百四十五点の応募があった。その中から、大量に調理ができる、魚介類や野菜をうまく採り入れている、カロリー、味などの審査基準をへて十二点が選ばれ、毎月一回登場することになった。選ばれたのは、「切り干し大根のキンピラ」「カレー・ママー豆腐」「ザーサイ汁」「中華風まぜごはん」等。同教委は、食べ残しをなくす「バイキング方式」や野外給食、「親子弁当の日」などさまざまな実験的試みが続けられている学校給食の先進的な研究都市として知られている。

（平野利依）

●大阪 子どもたちの歓声はどこに（朝日12／14）

「子どもが群れ遊ぶ姿を、あまり見かけない

なあ」——こんな疑問から、東淀川区の保育関係者のグループが一年がかりで調査を行った。調査対象となった同区内の淡路地区は五つの小学校がある下町で、子どもの数も多いところ。実際に調べ歩いたところで目についたのは「ぶらぶら遊び」。自分たちで遊びをつくり出したり、夢中になって遊んでいると感じられた場面にはほとんど出会わなかったという。ただ、学童保育の子どもの遊びがやや豊かなところから、群れ集う場を作り出すことから、子どもたちの遊びを活発にする手だてを採るべきだとしている。

（徳永美知子）

●兵庫 ホスピス草の根運動（神戸1／28）

死と向かい合う患者や家族、遺族たちの苦しみや不安をボランティアが電話で聞こうという「いのちの山彦活動」が全国に広がって県下でスタートする。「心の医療」の在り方を追求する「医療と宗教を考える会」（事務局東京）の世話人の一人で、神戸在住の精神科医ト部文磨さんが提唱。同会の分科会活動として、全国ネットワークを形成する計画で、ホスピス（終末期医療）を地域に根づかせる草の根運動を目指している。「患者たちの話を聞いて、苦しみを少しでも分かち合えれば

。それはボランティア自身の「死」の受容のトレーニングでもあり、体験を積み上げながら地道に取り組んでいきたい」とト部さんは語る。

（由良サダコ）

●鳥取 心身障害児の「楽園」計画（鳥取1／12）

鳥取大付属養護学校生の父母で作っている「懇話会」は、卒業した子どもたちが安心して働ける共同作業所を自分たちの手でつくろうと二年後スタートを目ざして運動している。「たとえ生産力ゼロの子どもでも集まってこれる場所にしてほしい。作業の場だけでなく、同じ悩みを持った人が、悩みを分かち合い話し合える場に」と関係者は夢を膨らませている。

（前田享子）

●山口 生活再点検（中国1／8）

高梁市の中学教諭岡本和子さんは、「合成洗剤の使用をやめて激しい手荒れがなおった」体験から、合成洗剤、蛍光剤の恐ろしさについて仲間と学習を重ねてきた。岡本さんは、合成洗剤追放のチラシを発行したり、蛍光増白剤を使わない肌着の共同購入を呼びかける。「ほんとうにささやかな運動だが、粘り強く続け、命を守るネットワークを広げたい」と力強く話す。

（西本あき子）

◆文部省が補習のススメ◆

文部省は過度の学習塾通いによって子どもたちの心身の発達や、学校の授業の弊害が生じている、として、学校教育充実の立場から、「補習の勧め」を盛り込んだ事務次官名の指導通知を1月31日付で全国教育委員会に提出。文部省の西崎清久・初等中等教育局長は「結果として、受験指導になることもある」と補足説明。学校での補習の時間は、朝の始業前、放課後のいずれも教師の勤務時間内、としている。

(朝日、毎日、1・31付)

◆週40時間労働を諮問一労働省◆

平井労相は、40年ぶりの労働基準法改正案の要綱をまとめ、中央労働基準審議会(会長・白井泰四郎法政大教授)に諮問。労働省は3月に労基法改正案を国会に提出する。改正案は昨年12月に出された中基審の建議を法案としてまとめたもので、①現在の週48時間の法定労働時間を週40時間労働制を目標として労基法に明記②当面は週46時間とし、③変形労働時間制(3カ月を通算して1週平均が40時間以下ならよいなど)を強め、時間配分を弾力化する④年次有給休暇の最低付与日数を現行の6日から10日に増やす、としている。労働側は、「週40時間への移行措置が緩慢で、週40時間への到達時期が不明確」などと批判。

(朝日、読売、2・7付)

◆外登法改正案一指紋押捺は原則！回◆

法務省は1月20日、在日外国人に指紋押捺を義務付けている外国人登録法の改正案の骨子を発表。

①5年ごとの登録切り替え時に求めている指紋押捺を、原則として最初の1回限りとする②常時携帯を義務付けている手帳式の登録証明書をカード化する、などのほか押捺拒否者については、登録切り替えの申請期間を現行の5年から「1年以上5年未満」に短縮できる規定を新設し、従来より規制を強化。また、これまで自治体で作っていた証明書を法務省の地方出入国管理局で作成するなど、管理体制をさらに強化するもの。拒否裁判弁護団の新美隆弁護士は「戦後の外登法改正で最も攻撃的な制度変

革だ」と批判。(朝日、毎日、1・21付)

◆特別養子制度を新設◆

養子制度の見直しを進めてきた法制審議会の民法部会身分法小委員会(加藤一郎委員長)は1月27日、民法部会に民法改正案の要綱を報告、了承を得た。

主な内容は①特別養子は原則として6歳未満の子どもに限り、家庭裁判所の審判により縁組が成立する②特別養子と実親との親子関係は婚姻障害の場合を除き消滅する一など。これに伴い、戸籍法も改正され、戸籍上も養父母だけが「親」となり、実親の名は姿を消す。現行の普通養子制度は一部改正してそのまま存続させるため、二つの養子制度を自由に選択できるようになる。法務省は法制審の正式な答申を受け、3月にも国会に民法改正案を提出する考え。

(毎日、1・28付)

◆ビル解禁認める一厚生省研究班◆

厚生省の「経口避妊薬の医学的評価に関する研究班」(班長・小林拓郎帝京大教授)は12月18日「ビル解禁」を正式に認め、早ければ'90年初めから医師の処方せんが必要な要指示薬として売り出される見通し。世界最初のビルが米国で認可されたのは'60年、その後ホルモン含有量を減少させたビルの開発が進んでいるが、青木やよ氏は「欧米ではビルの使用は反省期に入っており、副作用や次世代への影響もまだ明らかではないので、厚生省はこうした情報を公開してほしい」と。(毎日、'86・12・19付)

◆個人の情報保護に新法を提言◆

総務庁の「行政機関における個人情報の保護に関する研究会」(事務次官の私的諮問機関、座長・林修三元内閣法制局長官)は12月22日、新たな個人情報保護法の制度を提言した検討結果をまとめた。高度情報化社会で拡大する一方の行政機関の個人情報収集に一定の歯止めをかけるとともに、国民の側に自分自身に関する情報の開示・訂正請求を原則として認めるという内容。ダイレクトメールに象徴される野放し状態の民間における個人情報利用のあり方にも影響を与える。総務省は検討結果を受けて立法化を進める。(毎日、'86・12・22付)



◆防衛費1%枠を突破、GNP比1.004%◆

政府は12月30日の臨時閣議で、'87年度予算の政府案を正式決定。54兆1010億円、前年度当初予算比0.02%増と伸び率はほぼ0。社会保障費や文教費が抑制された半面、防衛費は前年度比5.2%と急増し、対国民総生産（GNP）比1%枠を突破した。同1%枠は“防衛費の歯止め”として'76年三木内閣当時、閣議決定されたもの。1%突破に対し、野党、市民から、野放図な軍拡を招くものと厳しい非難が集中している。

（朝日、毎日、'86・12・30、31付）

◆5%売上税を導入◆

自民党税制調査会は12月23日、戦後税制大転換への具体策を盛り込んだ'87年度税制改正大綱をまとめ、党議決定。一方、政府税制調査会も同日、'87年度税制改正答申を中曽根首相に手渡した。4兆5000億円の所得税・個人住民税、法人税減税の見返りに、5%売上税導入と、マル優（少額貯蓄非課税制度）の廃止、すべての利子に20%の一律分離課税することで同額の増税を目指す税制抜本改革は、初年度'87年度の増減税規模を1兆7400億円とすることを決定。

総評、同盟など労働団体と全民労協は同23日、「大型間接税導入とマル優廃止による大型増税を意図するもの」と、抗議の共同声明を発表した。（毎日、'86、12・24付）

◆臨教審提言「審議経過の概要（その4）」◆

臨教審（岡本道雄会長）は1月23日、昨年4月の第2次答申以降の論議をまとめた「審議経過の概略（その4）」を中曽根首相に報告。公的な教育財政支出を重点的に配分し基礎研究の充実、国際交流、教員の資質向上などに振り向けるとともに、大学への多元的な資金導入、土地信託方式の導入による教育資産の有効活用を提言。教育財

政への民間活力導入を強く打ち出している。生涯学習社会実現のための具体的プランとして町ぐるみで取り組む生涯学習都市のモデル地域指定を提唱し、この中核施設として学校にコンピューター網など情報機器を整備したインテリジェント・スクールを構想。また、学歴社会の弊害は正のため、公的職業資格取得での学歴要件の廃止、国際化対応のため外国人子女、帰国子女と一般の日本児童生徒と一緒に学ばせる「新国際学校」の設置を提言。「9月入学制」「教科書検定制度」については現状維持論と改革論を両論併記。

日教組は、「インテリジェント・スクール」構想は「教育・研究・文化施設の人間化」に名を借りた内需振興策の一環であり、教育・学習・研究の場が民間資本の投資の対象となる危険があるなどと批判。

（毎日、1・24付）

◆教課審中学分科会一多様な学習に4型◆

教育課程審議会の中学校教育分科審議会（会長・沖原豊広島大学長）は、2月2日生徒の能力、適性に応じた教育を行うため、学習指導の型を示すなど検討の方向をまとめた。

同分科審議会の例示したのは「補充学習型」「深化学習型」「課題研究型」「選択学習型」のタイプ。「補充」「深化」「課題」は全生徒が共通に学習する範囲内で、多様性を出そうというもの。生徒によって学習内容に違いはない。「選択」は、全生徒が共通に学ぶ内容以上の学習を盛り込むことも認め、義務教育の「共通教育」の考え方を超えたもの。同型は、音楽、美術、保健体育、技術・家庭に限定する考えて、全生徒が共通に学習する内容以外に多様な内容を用意し、生徒が選択履修できるとした。

（毎日、2・3付）



〈表紙のこぼし〉加藤由美子

6年目はギリシャ神話です。公約違反をくり返して平気などこかの国の総理より、よほど人間味溢れる神々の物語から、まずはパンドラの箱を。先生の悩みが、その箱をあけたことで始まるとしても(!?)希望と道づれならば……ねっ。

★Weバックナンバーのご案内★

- 〈vol.1〉〈vol.2〉(品切れ)
 〈vol.3〉4月号 PTAって何
 7月号 少年・少女たち
 8・9月号 “遊ぶ”ということ
 11月号 “病む”ということ
 84年増 自分らしさをこそ
 2・3月号 “育てる”ということ
 〈vol.4〉4月号 性をどう語る
 5月号 結婚の風景
 6月号 家族、その人間関係
 7月号 離婚と子どもたち
 8・9月号 法律と私たち
 85年夏増 働き続けるために
 10月号 いま、熱く女の時代
 11月号 みよりの秋に
 12月号 人間と土を生かす
 85年冬増 自分らしさをこそⅡ
 1月号 ぐらしの文化を探る
 2・3月号 水はいのちの泉
 〈vol.5〉4月号 幼い日—大人は
 忘れてしまった
 5月号 子ども—大人の勝手な思い込み
 6月号 “いじめ”—その根っこには何が?
 7月号 性—小・中・高校生は何を思う?
 86年夏増 こどもたちへ—大人になる旅
 8・9月号 親—いま、学校に何ができる?
 10月号 家庭科—いま新しい地平に立つ
 11月号 家庭科—どう変える、どう変わる
 12月号 平和—今年を顧みる
 86年冬増 自分らしさをこそⅢ
 1月号 女性—世界を変え得るか
 2・3月号 明日—人はみな成熟に向かつて

◆今月から「ひと」を馬場さんよりバトンタッチ。最初におたずねした金子さん宅を「それでは」と辞しての帰りがけ、玄關脇に積んである聞きおぼえのある名のミニコミ紙。私も同じ三鷹住民、地域に『みたかきいたか』ありと知ってはいたのですが、金子さんが発行元になっていたとは。それからまた話に花がさき、さつそく購読者になってしまった。というわけでWe拡販のヒントもつかむ。(青木)

◆テレビや漫画のストーリーだとはかり思っていたことが、決してそうではないことを女子高校の教師の報告で知った。私にはその教師に私生活などないように思えた。いま教師たちはなんと大変なことをしなければならぬのだろう。それにしても、それほどのが他人にしてみらっているのがわからなくて、生徒はまた同じことをくりかえす。なんとかならないものだろうか。(中野)

◆「家庭科新時代—Weからの提案」半田たつ子編(A5判・360頁・二千円・送料300円)予約はお済みですか?「自立した男と女を」「人間らしい生活を」「差別のない社会を」を三本柱に編集。待望の「実践集」だけど、教師でない人にも読んでほしい。装丁・カットは長野ヒデ子さん。羽生種子さんと同郷の今治出身で、その大胆で、おおらかな絵は「家庭科新時代」にピッタリ。ぜひご購入ご一読を!(馬場)

◆We五年間を「家庭科新時代」で一つの形にまとめ、出来上りをお待ちの形にまとめた今、六年目の出発のこの号を、一層新鮮に思うのはひとりでしょいか。♥一七四人の声が「子供!」(鼎文社)八五〇頁になったことを思うと、二四二二名をわずかに五頁にまとめたことに心が痛みます。頁がほしい!多くの先生方のご協力によってできたこの号の重みはいかがでしょうか♥次号は「情報化社会の光と影」です。(半田)

新しい家庭科—

Vol. 6 No. 1 1987年3月20日発行
 ¥530(年間購読料・増刊号含¥6700)
 編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14

☎03(326)1380 振替 東京6-59867

印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112 文京区春日1-6-7

<p>旭川 京栄書店 札幌 北東京堂書店 島松 矢野書店、タイヤ書店 苫小牧 熊谷書店 伊達 新生堂 函館 神田書店 青森 成田本店 盛岡 東山堂、みみず書房 花巻 誠山房 水沢 松田書店 仙台 こどもの本の店 プーの家、八重洲書店、萩書房、高山書店、千忠書店 古川 高山書店 秋田 ホビット館 横手 加賀屋書店 大館 金木商事 酒田 石川書店 山形 八文字屋 高陽堂書店 はんべい 阿部久書店 鶴岡 岩瀬書店、西沢書店 福島 松文堂、すばる書店 郡山 ニシザワ 会津松岡 川島朝日堂 藤岡 アルプス社、遊書館 前橋 島村書店 中之条 杉山書店 宇都宮 関口書店 足利 ツルヤB.C 水戸 白石書店 土浦 岩瀬書店、須原屋 浦川 新井書店 越谷 ブックスサトウ 東松山 日野屋書店 和光 比企文化社 狭山 山屋 狭山 楓書房 大田 マスター書店 宮崎 阿里書房 飯能 ベンギン書房 入間 安藤芳文堂 新座 ヤマトウ書店 鴻巣 みやかわ南口店 熊谷 鴻文堂 船橋 神田弘文堂 B.C. はつらつ書房 松田 元山書店 津田 大和屋書店 鎌谷 岡田書店 佐原 多田屋 市川 大杉書店、千里堂 浦安 原勝書店 君津 杉浦書店 東葛飾郡 ブックスさかざい 東京 <千代田> 日成堂、書肆アクセス、三省堂本店、書泉グランデ、東京堂、八重洲ブックセンター<文京> ビッピ <豊島> 池袋書店、紀文堂書店 <杉並> 木風舎、新</p>	<p>愛書店、おラサード書店、たつみ書房、西荻書店、結<新宿> 紀伊國屋書店、模索舎、風書房、伊野屋書店、図南書店<渋谷> すべーす、えいがさい<葛飾> 宏精堂、中村書店、稲田書店、大和書店<世田谷> やまべ書店、江崎書店、桜文堂<北> 愛京堂<大田> 三州堂、藤乃屋書店<荒川> 昌榮堂<板橋> 裕弘堂、アスカ書店<江東> 吉田書籍部、ブックロード<品川> 雄文堂、自成堂<吉祥寺> ウニタ書房<三鷹> 第九書房、たべもの村<武蔵野> いがらし書店<調布> 神代書店<小金井> かご書店、緑町大洋堂<府中> 国府書店会、一二三書房<国分寺> 吉野書店<国立> 増田書店、富士見書店<立川> オリオン書房、泰明堂、石井書店<小平> 和中書店、明文堂書店、大島書店<清瀬> マルオカ書店、飯田書店<町田> 久美堂<八王子> 小沢書店<秋川> 増進堂書店 横濱 浜文教堂、有隣堂、栄松堂、ともだち書店、みどり書房、有文堂 川崎 北野書店、早川書店、大塚書店、明朗書房 ホーエイ川崎 相模原 中村書房 鎌倉 たらば書房 相模大野 相模書房 藤沢 東松堂 綾瀬 藤美堂 茅ヶ崎 榎本書店 小田原 文泉堂 伊勢治書店 平井書店 平塚 サクラ書店 海老名 サンコー書店 大和市 中央書店 大甲府 太洋堂 静岡 吉見書店、森上書店 磐田 あつみ書店 浜北 谷島屋書店 浜松 遠州堂、稲勝書店 沼津 マルサン書店 清水 ランセイ社 水戸 戸田書店 田村 村上書店 上野 谷島屋書店 津宮 文正堂書店 資然堂書店 名古屋 ウニタ書店 日比野泰文堂、谷口正文館書店、白樺書房西店、白楊書店、竹中書店、中</p>	<p>日書房、きたやま書店、丸山書店、ナガオ正文堂、豊川堂、ちくさ正文館、兼松書店 江南 青雲堂 豊橋 文教書店、耕文堂 豊岡 鈴彦書店 岡崎 カマクラ文庫 尾張旭 活人堂 瀬戸 三浦書店、春広堂 愛知 日進書房 刈谷 酒井日進堂 岐阜 文光堂書店 岐阜 栗山書店、万松堂 新津 栄進堂 新長 寛振書店 上越 春陽館 富山 福豊書店 高岡 清明堂書店 水岡 清文堂、イソップ屋 見佐 笠瀬善 岡谷 笠原書店 松本 新光堂書店 長野 平安堂 上野 平安堂 飯田 英文堂 信濃 平安堂 金沢 靴屋書店 一ツツのみやセー ルズセンター、北国書林 能登 千問書店 福井 ひまわり書店、品川書店、勝木書店 敦賀 海光堂 天理 海老山書店 松阪 中村書店 伊勢 古川書店 大紀 紀伊國屋書店、ユーゴー書店、樋口書籍、米原十六堂、藤川書店、学友、西坂書店、呼文堂、もり、富士原文信堂、飯田集英館、川口文堂堂、坂口書店、北村書店、篠田書店 東大阪 ヒバリ、栗林書房 和泉 かつらぎ 豊中 昌文堂、豊文堂 高槻 コーベックス西武ダイハチ 吹田 アミエ江坂本店 池田 春江 堺 ワールド、西村書店 清城堂、三教堂、登美屋 枚方 立川書店 岸和田 斉藤書店 茨木 サノヤ書店 京都 松香堂書店、オデッサ書房、中島書院、洛陽書院 宇治 大久保京都書院 長岡 井田書店 岡崎 恵文社神足店 亀岡 亀岡書局 舞鶴 舞鶴堂、北浦愛文堂 和歌山 宇治書店、紀勢堂書店、有馬書店</p>	<p>神戸 流泉書房、ヒカリ書店、日進堂、文進堂書店、アイ書店、幾久書店、明文館 西宮 イカロス書房 尼崎 宣文堂、塚新西武B.C 姫路 姫路丸善 明石 浅野八代書店 電 友友書房 豊 伏見屋 笠 ひさや書店 井 池田成章堂 岡 金森書店 米 福島かねつき堂 子 今井MC本店 鳥取 富士書店 出雲 武田書店 津和野 金山文具店 松江 大学前園山書店、ブックス文化の友 広島 やまびこ書店、いづみ書店、紀伊國屋書店、ニシヤ書店、黙乎堂 竹原 草間書店 尾道 花本書店、啓文社 福山 岡田書店 高松 みやたけ書店 宇和島 キング堂書店 徳島 雄徳堂徳野書店 土佐山田 依光書店 北九州 北九州書店、白石書店、黒崎ひとつりわB.C 福岡 金文堂、横文館、金進堂 尾崎書店、高橋書店 二日市 丸山スコア書店 直方 みやはら書店 筑後 吉田書店 大川 山口書店 粕屋町 尾崎堂書店 唐津 まつら書店 佐賀 金華堂 長崎 好文堂、童話館 佐世保 金明堂 熊本 教育文化用品KK、三章文庫 延岡 池田書店 宮崎 大山成文館、若印書店、川畑書店 大分 開書堂、今村書店 志布志 スズキ書店 鹿児島 加世田書店 大分県 帯広畜産大学、東北大学、岩手大学、福島大学、新潟大学、群馬大学、宇都宮大学、茨城大学、埼玉大学、芝浦大学、日本女子大学、東京大学、東京国家政大学、成蹊大学、横浜国立大学、山梨大学、愛知教育大学、信州大学、金沢大学、和歌山大学、大阪市立大学、立命館大学、宮崎大学、高知大学、香川大学、鳴門教育大学</p>
---	---	--	---

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入ができます。
お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由とご指定のうえ、ご注文下さい。